

魔法少女リリカルおわたorz

Alika

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

わたしが「八神はやて」となった時から決まっとった悲しい物語。

ただの薄幸の美少女（笑）に降りかかる未曾有の大惨事。

魔法少女リリカルおわたorz始まるで。

ほんまどうしてこうなった!?

（笑） つげんなや！

# 目次

|     |   |    |
|-----|---|----|
| 第一話 | こんなときどういう顔をしたらええかわからへん：笑えばいいと思うよやて？やかましいわ！    | 1  |
| 第二話 | こんな守護騎士で大丈夫か？大丈夫だ問題ない：訳あるか！一番良いのはどこや!?        | 6  |
| 第三話 | クローズエンカウンター？むしろクロスカウンターや！                     | 12 |
| 第四話 | おとめ座のセンチメンタリズムとふたご座のメラニコリック：ただしザフィーラ！てめえはダメだ！ | 20 |
| 第五話 | 全私が泣いた：世界が衝撃の                                 |    |

|                          |  |    |
|--------------------------|--|----|
| 雷に包まれた。これ以上アホの子を増やさんでや!! | 28   |    |
| 第六話                      | 立ちはだかるは「最強の魔王軍団！愛と勇気のピュアキュアスターズ！ここに見参！シャキーン！」タイトル横取りすんなや!!           | 36 |
| 第七話                      | たったひとつ！たったひとつのシンブルな答えや！貴様はわたしを怒らせたああ!!                               | 45 |
| 第八話                      | あかん！無理や！それ飲みもんやない！フェイトちゃん！やめ……ゴバアー！「AMSギヤアするアツ！、逆流……！から光がアア……！すまん、なの |    |

はちゃん…。

50

第九話 あかんあかんあかん!!! たつ

ちやうううう!!! フラグがたつちやう

うううう!!!

59

第十話 「僕は…僕は、彼女達を止めた

い。止めなきゃならないんだ! S4U!!

僕に力を貸せ!!! この、分ならず

屋あーっ!!

68

第十一話 「ふふふ、はやて。私はね…人

間じやないんだよ」 フェイトちゃんエ

…

75

第十二話 こうなつてもうたらもう、ス

カリエッテイが…ポカリスウエットに

なつとってもおかしくないで? 「いや、

はやて。それはおかしい」

第十(悲)惨話 幕間 そのころの

ヴィータちゃん

91

第十四話 幕間2 くはやての日記 も

う、わたしは無理やくより

103

第十五話 「こうなつたら…忍法! お色

気の術!」ウホツ、ええ乳や。揉んでええ

か?

111

第十六話 「ミッドチルダ nin n n j a

なんばーワン w w w」許さへん…絶対に

や!!!

120

第十七話 「おぱんちゅ抱いて、溺死する

wwww」東京湾に沈しろやああああ!!!

へ…だと?!

169

130

第十八話 「うえええええん!!もう元の世界に帰るううう!!」なのはちゃん…その気持ち、わからんでもないで…

187

第二一話 「私は変な夢を見ていたの、白昼夢。そうにちまらない」なのはちゃん……なかったことには出来へんで…

143

第十九話 IF 嘘予告がホントになっちゃった!魔法少女リリカルイレブンS

198

tricker's 始まります!

152

第二十話 IF 今こそ証明する!ランスターの弾丸は!全てを打ち抜く弾丸だあああ!「キーパーを突き抜けゴール

209

第二三話 「なぜ山に来て叫ぶかだつて?チャキーン!ただ単に叫びたかつたから!ドドドド!」そこに山があるから。やないんかい!

第二四話 魔法少女にはマスコットが付

き物やて？ならこれでわたしも立派な魔法少女や！異論は認めん。 ————— 217

第二五話 乳に關してはわたしも一言申し上げなあかんことがある：揺れへん乳は乳やない！貧乳はステータス！神は偉大な言葉を残したで： ————— 227

第二六話 求めよ、されば与えられん。その肉はわたしが育てた奴やあああ!!! 「自らの力で勝ち取ってこそその勝利にござる！」ハフハフ ————— 237

第二七話 幕間3 しよーとしよーと247  
24連発 —————

第二八話 今やヴィータ！お前の力を見

せてみい！「ハンマーヘル！ハンマーヘブン！」 ————— 272

第二九話 「なぜ、分かり合おうとしない！悪いがっ：ここまでだっ！」ええなあ：わたしもガンダムごっこしたいなあ： ————— 285

第三十話 「なぜ、テメエがここにいる！答えろお！」べ：別人やなかったんか：歴史はいつたいたいどこまで狂つとるんか！ ————— 294

第三一話 幕間4 執務官とは。304

第三二話 性王教会：なんと卑猥な響き

や…！「君の頭の中の方がよっぽど卑猥

だよ…」

318

第三三話 クラガナン散策や！世界が違

うと文化が違う！やつく！でかるちゃー

！

336

第三四話 魔法少女リリカルはやてSt

riker's 第0話 魔法少女、育ち

ます！

345

第三五話 魔法少女リリカルはやてSt

riker's 第1話 ファースト：ア

タツク

354

第三六話 魔法少女リリカルはやてSt

riker's 第2話 チャージ・オ

ン・ザ・エネミー

367

第三七話 魔法少女リリカルはやてSt

riker's 第3話 ストリーム・オ

ブ・テイアーズ

380

第三八話 魔法少女リリカルはやてSt

riker's 第4話 プリーズ・スタ

ンド・バイ・ミー

394

第三八話 魔法少女リリカルはやてSt

riker's 第5話 アイ・ワナ・

ビー・ユア・ヒーロー

406





第一話　こんなときどういう顔をしたらええかわからへん…笑えばいいと思うよやて？やかましいわ！

わたしは今、どうしていいのかわからへん。これからはじまるはずやった私と魔法の物語。

6月4日午前零時、目の前には浮遊する本と、どこかおかしい5人の人影。ふと意識が遠くに逝きかけるが、その前にどうしても言いたいことがひとつだけ。

『なにがどうしてこうなったん!?!』

魔法少女　リリカル　おわた　orz

第一話　こんなときどういう顔をしたらええかわからへん…

笑えばいいと思うよやて？やかましいわ！

唐突で申し訳あらへんが、聞いてくれるか？わたし「八神はやて」は転生者や…たぶん。俗に言う神様転生じやフオツフオツフオとかではないんやけど、生前は原因不明の病気にかかり5年間入院し、15歳で亡くなつた（と思われる）薄幸の美少女（笑）やつた。

おい誰や、薄幸の美少女（笑）とか言うた奴は。

それは置いといて、わたしの前世のことなんて正直あまり関係あらへん。

要はこの世界「リリカルなのは」について多少知つとるちゆうことを言いたかつただけや。だからわたしが「八神はやて」になつたんも最初はアレ？ここ病院ちやうやん？家？なんで家に誰もおらへんのや？つてかなんで足動かんの？ぐらいしか思わんかつた。

うんゴメン嘘ついた。現実逃避しとつただけや。きつと前世は薄幸の美少女（笑）のまま死んでもうたから神様が第2の人生をくれたんやと思つとる。

おい、（笑）入れんなや！

そんなこんなでわたしが「八神はやて」になつて5年が過ぎた9歳の誕生日の6月4

日。わたしの物語が始まる。

「魔法少女リリカルなのはA、s はじまりは突然になの」

あれ？なんか足の麻痺、とれてきてる？

「主、現実逃避はもう十分でござるか？そろそろ拙者らの話を聞いていただきたいのでござるが……」

うん、それ無理。これがきつと噂に聞く孔明の罫。本当に世界はこんなはずじゃなかったことばかりやな、クロノ君。

ああ、外の日差しがリビングに差し込んでホンマ気持ちよさそうやなあ。

「どうするでござるか？主は外を見つめたまま未だに現世へと帰還してこないでござるが……」

「あらあらうふふ。どうしたのかしらねえ？」

「しかたないんじゃないのか？突然わたしたちが現れたからきつと主も混乱しているのだと思うぞ？」

「フン！フン！フン！」

「そもそも我々5人も現れたらだれでも驚くだろう」

あかん、もう突っ込みどころ満載すぎて我慢できへん。特に、そのガチムチ!主の前で筋トレすんなや!

「で、アンタらは誰なん?ヴォルケンリッター言うとつたみたいやけど、悪いが自己紹介とかしてくれんか?」

現実逃避してたら終わらへんから意を決して話かけてみる。

「ふむ、では僭越ながら拙者から。拙者の名は烈火の将シグナムと申す、以後よしなに頼むでござるよ」

「ダウト」

「おろ?」

おかしい、小柄ながら筋肉のついたしっかりとした体。ほほの十字傷。日本の古き良き文化の象徴である着物。だがその胸に詰まった夢と希望、てめーはダメだ。というより以外に似合つとるなとしか言えないコスプレシグナム…なんぞこれ。

「次は誰や?あと、わたしのことははやってって呼んでな?」

「次は私ね、湖の騎士シヤマルっていうの、よろしくね?はやてちゃん」

どこの水の惑星からきたウンディーネですかね?あらあらうふふつて…天然か!?腹

黒か!? シヤマルツ、恐ろしい娘ッ!

「フン! フン! フン!」

やかましいわ! 自己紹介ん時ぐらい筋トレすんなや!

「次は私だな! 鉄槌の騎士ヴィータだ! よろしくたのむぞ! ハヤテ!」

なんでや… ヴィータ… なんでツインテールなんや… はやての発音ちやうやん… 仕える側がちやうやん… 借金ないで、私。あ、でも不幸か…

「次は、フン! 俺の番、フン! だな。盾の、フン! 守護獣ザフィー、フン! ラだ。フン! 好きな言葉は筋肉!」

フンフンうるさ過ぎてワンワンに見えてきたやないか… なんで1人だけ好きな言葉言った理由もわからへんし… なんで上半身裸で赤いバンドナだけつけとるんや。

「すまないな、ザフィーラはアホなのだ。多目に見てくれると嬉しい。最後は私だな、私は夜天の書の管制人格だ。よろしくたのむぞ、よm… 主はやて」

… なんて眼帯してんねん。いま嫁って言いかけたやろ、てか背ちつちや! アニメで見たとときと全然ちやうやんか! あ、ちがうアニメ出身か。

「な、名前が無いなんて不便やな。じゃあわたしがつけたげるわラウ r ゲフンゲフン。そうやな、祝福の風、リインフォースなんてどうや?」

あかん! 違う名前付けるところやった! ってかなんで管制人格外に出てんの!?

第二話 こんな守護騎士で大丈夫か?大丈夫だ問題ない  
: 訳あるか!一番良いのはどこや!?

わたしはもう、どうしていいのかわからへん。これからはじまるはずやった私と魔法の悲しくも素敵な物語。

目の前にはやはりおかしい5人の人影。  
ふと現実逃避したくなるが、その前にどうしても言いたいことがひとつだけ。

『ホンマなにがどうしてこうなったん!?!』

魔法少女 リリカル おわた or z

第二話 こんな守護騎士で大丈夫か?大丈夫だ問題ない:

訳あるか!一番良いのはどこや!?

「んで、シグナム。リインの自己紹介で気になったんやけど、夜天の書って何なん？」

本来わたしの所に来るんは闇の書やったはず、いったい何があったんやろ？まさかの死亡フラグ撤回か!? ヤッファー!

「ふむ、それについては管制人k…リインフォースのほうが詳しいので説明を頼むでござるよ。」

「うむ、夜天の書とは…」

…意味がわからない。もはや死亡フラグだとか原作ブレイクとかちやちなもんじゃ無かったわ、もつと恐ろしいものを味わったわ。

「ようわからへんかったけど、ひとつわかったことがあるわ、夜天の書には存在意義があらへんつちゆうことが。」

今のわたしの顔はげんなりした感じやろうな…無限転生？魔力蒐集？防衛プログラ

ム?そんなん問題あらへん。大問題が現在進行形で発生中や。

「うぬう、だけどハヤテえ、それが夜天の書の、わたしたちヴォルケンリッターの存在意義であって…」

「やかましいわ!なんやねん!古代ベルカがミッドチルダに対抗するために作られた『イタズラ用デバイス』って!そんなんちやうねん!わたしが求めつつたんはこんな悲しい魔法との出会いちやうねん!」

「だいたい守護騎士システムが一番意味がわからん、イタズラ中の主を守るために作られたつてのがもう意味わからへん!一頁目から訳わからん魔法がのつとるし、なんや!バナナの皮を設置し確実に滑らせる魔法とか!頭の上からタライを落として必中させる魔法とか!どこで使えば良いツちゆうねん!

「こんなん夜天の書やあらへん…ただのドリフのショーや…いったい古代ベルカはどこに向かっつつたんや…」

「ワンモアセツ!ワンモアセツ!」

「やかましいわ!絶望にうちひしがれた薄幸の美少女の横で隊長のDVD見んなや!何みんなやつとんねん!空気読めや!ガチムチだけじゃないんかい!

「薄幸の美少女(笑)」

「(笑) つけんなやあぁあ!」



「まあ、もおええわ。昼やし食事の準備してくるから好きにしたってや…」

あかん、みんなキヤラ濃過ぎや…ここにおつたらわたしもアホになりそうや…

「はやてちゃん？食事の準備はもう済ませておきましたよ？」

「シャマル？いつのまに準備しとったん？ありがとうな。ホンマ助かったわ」

「うふふ。みんな全然話とか聞かないから大変かもしれないけど、これからよろしくね？」

「シャマルう…」

あかん、涙が出ちゃう、女の子やもん。

わたしが間違つとった。シャマルは普通やおもつとった。せめてシャマルは…と。

「なんやねん、コレ」

テーブルの上に並べられた料理の数々。いや、ほらな? シヤマルって料理下手って先入観があるやろ? ちやうねん、コレ。地球の料理、ちやうねん。

「ハヤテ? 食べないのか? シヤマルのご飯はメガ美味いぞ!」

ヴィータエ: 何でそれが食えるんや。マーブル模様でピクピク動いとるのが見えへんのか? ああ、刻が見える…

「ふむ、さすがシヤマルでござる。また腕をあげたでござるな? このピロペー焼きは特に絶品でござる。」

ピロペー焼きって何やねん! グギャツて! 今フォーク刺したらグギャツて聞こえた!

「うむ、シヤ、ハグツ! マルの料理は、いつ、ハグツ! 食べてもうまい。ハグツ! (笑) もいかが、ハグツ! ですか?」

おいガチムチ! お前は話の最中になんか挟まんとしやべれんのか! そして、誰の名前が (笑) やあああ!

「シヤマルよ、隊長として私も鼻が高いぞ」

だまれ管制人格! お前は隊長ちやうやろ! 隊長はさつきまでブートキャンプしよつたやろが!

「はやてちゃん? どうかしたの? あ、冷蔵庫の中の食材勝手に使っちゃってごめんなさ

い、怒っちゃった？」

れいぞうこ！これ地球の食材か!?ダメや、もう、わたしがまちがったんやな…

私はその日、初めて料理を前に死を覚悟した。

「うまつ!?!なんでやねん!?!」

# 第三話 クロスエンカウンター?むしろクロスカウンターや! ターや!

こないな状況、わたしはもうどうしようもあらへん。これからはじまるはずやった私と魔法の夢と希望の物語。

我が家にはなんかおかしい5人の人影。

ふとここから逃げだしたくなるが、その前にどうしても言いたいことがひとつだけ。

『あかーーん!?!』

魔法少女 リリカル おわた or z

第三話 クロスエンカウンター?

むしろクロスカウンターや!

「では、はやて殿。拙者はいつもの道場に出稽古に行つてくるでござるよ。今日の土産は何が良いでござるか？」

「そうやなあ、道場近くの洋菓子屋さんやろ？そや！シユークリーム置いたらこうてきてな？今日はヴィータの分は買わんでええで？無しやから」

「ハ、ハヤテエ…」

わたしがツツコミ死しそうになつてはや一週間。だんだんヴォルケンスもこの街に慣れてきたようで一安心や。つてか、最初からバリバリ家電製品使いまくつとつたから特に大した問題は起こらへんかつたんやけど…

「で、ヴィータ。わたしのパソコンつこうて何しよつたんや？履歴見たら仰天してもうたで？」

「そ…それは…」

まあ大した問題は起こらへんかったんやけど、多少の問題なら起こす娘がここにおるからなあ…

「なんやねんこの同人誌の山!?!どうしてくれるんや! 18歳未満閲覧禁止もんばつかりやで!?!このムッツリ娘!」

「あうううう…」

あうう…やあらへん!なんでヴィータがこんなダメな娘になつてもうたんや!

「ネットでなんでも買えるからつて買いきやろが!つてかまず買うなや!」

「もつと、熱くなれよおおお!!!」

誰やああああ!大音量でバーニング叫びよるアホは!

朝はムッツリ娘の同人誌、さつきはさつきでラインがニタニタ動画見ながら叫びよるし…なんでバーニング修像の動画を無限リピートしとるんか小一時間問い詰めたい、てか問い詰めたし。

ライン曰く「なぜバーニングするのかって?ふふふ、愚問だなよm…主はやてよ。そ

ここにバーニング修像がいたからだ！」ドヤア

謝れ！修像に謝れ！いたとか言つとるが、お前が呼び出したんや！

一発殴つたわたしは悪くない。わたしは悪くない、悪いのはバーニング小娘なんだ！

「もうだめや…ココロがぶろーくんふあんたずむや…」

こんな気分ときはリビングでごろ寝するしかないで、ほんま。

庭を見ながら日向ぼっこ気持ちええなあ…

「フン！フンツ！ハアアアアアア！！」

……………。  
わたしの視界はセルフエコノミーだから何も映つとらへん。庭にはなんも  
おらへん。

「今なら出来るやもしれん…はあああああ！我が拳に宿るは必殺奥義！カメハ





えつとなになに? 『P.s. 時間が取れたのではやて嬢に会いに行こうと思う、ちようど手紙が着く頃に』 「シジミもトウルルツて頑張つてんだよ!!!」 ……、私も現地に到着するだろう! 心して待っているといい!』 やて。 つてことはグレアムおじさんが今日家に来るんか!」

あかん! グレアムおじさんの歓迎会の準備せなん! あとでリインしばく!

「はやてちゃん? ちよつといい?」

「どうしたんやシヤマル? はよ準備せなんグレアムおじさん来てしまうで!」

なんやシヤマル、グレアムおじさんからの手紙を見て難しい顔してどないしたんやろうか?

「はやてちゃん、言いづらいんだけどね…その人の名前。グレアムじゃないみたいよ?」  
「へっ?」

「名前の綴りをよくみて? Greahmでしょ? Greamじゃないとグレアムとは呼ばないと思うわ。それに、イギリスはUK、この住所はUSだからアメリカよ?」

ピンポン、ガチャツ「ううっシグナムう、私のシュークリーム…誰なのだ?」 「失礼。

今日約束があつて来た者だ。はやて嬢はご在宅か?」

そうやった、なんかおかしいと思つてたんや。闇の書やなくてポンコツデバイスの夜の書(笑)のためにわざわざ違法なこととしてまで管理局に隠しとく理由があらへん。そもそもこの夜天の書(笑)は前の持ち主がコケて虚数空間に落としたから地球にたどりついたってバーニング小娘が言つとつたし。

「そうか、君ははやて嬢の家族か、まったく時間の取れなかつた私の代わりを務めてくれていたことに礼を言おう。これはお土産のケーキだ。謹んで贈らせてもらおう!」  
「ケーキ!? やつたのだ! ハヤテエ! お土産のケーキだ!」

ガチャツ。

あかん、猛烈に嫌な予感しかせえへん。なんでや! なんで筆記体で書いてんねん! こっちは通算10年ばかり学校も行つとらん不登校児童やで!?! なんで文章は日本語で名前だけ英語やねん!

「はじめましてだな! はやて嬢! 私の名前はグラハム。ギル・グラハムである!」

「アカーー」「今日から君は！富士山だっ!!!」

だからセリフに被せんや!!パーニング小娘!!

第四話 おとめ座のセンチメンタリズムとふたご座のメラニコリック…ただしザファイラ! てめえはダメだ!

あかん、こないな状況かんがえてもみなかった。これからはじまるはずやった私と魔法の友情と絆の物語。

我が家にはすでにおかしい5人の人影。

もうここから逃げられないが、その前にどうしても言いたいことがひとつだけ。

『シグナムー!! 助けてえー!?!』

魔法少女 リリカル おわた orz

第四話 おとめ座のセンチメンタリズムと

ふたご座のメラニコリック

…ただしザファイラ! てめえはダメだ!

「むぐー！むぐー！」

「フハハハハ!!抱きしめたいなっ！はやて嬢!!」

「フン！ハアアアアア！テオアーツ！」

「ケーキ！ケーキ！わったしのケーキ！」

「ふう、やはり一日3時間のバーニングタイムはかせんな。シヤマル、昼飯の支度はできているか？」

「あらあら、はやてちゃん楽しそう。リイン、ちよつと待っててね、もうすぐ出来上がるから」

抱きしめたいなっって現在進行形でホールドされとるがな。だれかこのカオスからわたしを助け出してえ…っつかグラハムさん若っ！もう35歳って手紙には書いてあったで!?!そしてヴオ(ル)ケ(ン)達！助けんかい！

「波動拳！波動拳！昇竜、竜巻旋風脚！」

誰や今！昇竜キャンセル竜巻旋風脚繰り出した奴は！ガチムチか!?!

「すまなかつたな、はやて嬢。つついとおとめ座のセンチメンタリズムが熱いパトスとなつて弾けてしまったのだよ」

グラハムさん、ハツハツハと豪快に笑つとるけどセンチメンタリズムの使い方まちごうとる気がするんは私だけか？つてかシヤマル飯ふつうに食べとる！なんや、やつぱり私が間違つとつたんやな…きつとこれが食わず嫌いつちゆうやつやつたんや。

「やはりシヤマルの料理は美味しい、いつ食べても飽きん味だ」

「シヤマルの料理はメガ美味だろー！ハヤテは最初なかなか食べなかつたんだぞ？」

「うむ、この料理。見た目も凄いが味も凄い！最初は毒物を出されてしまったのかと食べるのを躊躇してしまつたぞ」

「ダウト」

「む？」

「あらあら、うふふ。」

最初から『ではただこう!』とかいつて出された瞬間、躊躇なく口に入れた人が何を言うんや。やっぱり私の周りはおかしい人しかあつまらへんのか? ああ、八神はやて…可哀想な薄幸の美少女やで…

「ハグツ、発酵の微少女(笑)? ハグツ」

おいガチムチ、ちよつと表出ろや。そのけんか買ったで。

「ふむ、そろそろここを出なくては時間に間に合わんか。でははやて嬢! これにて失礼する!」

「えっ…もう帰つてしまふん? せつかく会えたんやからゆつくりしていつてえな…」

あかん、グラハムさん困らせるつもりはなかったんや。ただ、もうちよつと一緒に居たかっただけなんや。今まで本当に厚意でわたしのこと援助しとつてくれとつたんが嬉しくて。

「もぐもぐ…」

「はやて嬢…。すまないな、私とて友人たちの忘れ形見をないがしろにしたくはないの  
だが。私は男！空を飛び続けるファイターなのだよ。私が行かなくては世界が回らん  
のだ！それに今の君には家族がいるだろう、私とて二度とここに来ないはずがない！」

「…あはは、やっぱりグラハムさんはおもしろい人だな。うん、わかった。またきてえな！  
今日はおらんけど、家族はあともう一人おんねん！そのとき紹介するわ！」

「その言葉、謹んで受け取ろう！」

「そうや、結局グラハムさんってどんな仕事についてるん？」

「フツ、私か？私は株式会社MSWARD（エムスワッド）航空のジャンボジェット…フ



ラッグのパイロット！そう、即ち『フラッグファイター』なのだよ!!!」

「あらあら、嵐のような人でしたね？」

「うむ、あれこそが燃える男のバーニングという奴なのだろう」

「……どうしよう、ケーキひとりで食べちゃった……」

「あの体、鍛え、フン！抜かれているな。次に、フン！あつた時が楽しみ、フン！だ。」

なんやろ、この気持ち……この……別れを台無しにされた気持ちは。

「ヴァータ。一週間おやつ抜きで許したる」

「ふぎゅー！」

「あ、主（笑）？なぜ俺の前に来るのでしょうか……」

ブチッ!

「ザフィーラ、わかるか? 今ね、私の怒りが有頂天!」

キャイン!

「ぬう…ザフィーラ。お前、主のフルネーム知ってるか?」

「あまり俺をアホ呼ばわりするな、インなんとか。そんなもの『発酵の微少女(笑)』に  
決まっているだろう。もちろん名前が(笑)だ」

「ダメだこいつ、早く何とかしないと…」

「ただいまでござる〜」

第五話 全私が泣いた…世界が衝撃の雷に包まれた。

これ以上アホの子を増やさんでや!!

あかん、なんでいつもこうなるんや…これからはじまるはずやった私と魔法の出会いと別れの物語。

わたしの前にはなにかがおかしい4人の人影。

出かけたことを後悔するが、その前にどうしても言いたいことがひとつだけ。

『いったいあんたらナニモンやあああ!!!』

魔法少女

リリカル

おわた

o r z

第五話 全私が泣いた：世界が衝撃の雷に包まれた。

これ以上アホの子を増やさんでや!!

「なあシグナム、暇やったら出かけんか？この間食べたシュークリーム、また食べたいねん」

「うむ、そうでごさるな。一度はやて殿を連れてきては？と誘われていたゆえ、ちようどいい機会にごさる」

こないだ食べたシュークリーム、絶品やったなあ、あれが噂に名高い翠屋のシュークリームやるか？一人やと遠くて行けんかったしなあ。ちようどシグナムが知つとるみたいやし、連れてつてもらお。

「む、シグナム君ではないか？こんな所で珍しい。今日は道場にくる予定ではなかった

はずだが？」

おお、かつちよええ兄ちゃんどエンカウントしてもうた。シグナムの通つとる道場の知り合いか？

「おお、高町殿こそなぞここに？拙者は家族を連れて翠屋に行くところにござつた。この子が件の八神はやて殿にござる」

「いや、買出しの帰りだね。ああ、その子がシグナム君の話に出てきた子か、確かにうちのなのと同じくらい歳のだな」

高町：…？おお！この人が神速のリア充と名高い、シスコン剣士KYUYAさんか！  
てかシグナム、高町道場行つとつたんかい。ん？なんや、シグナムとええ雰囲気やな。  
そこやシグナム！かましたつてや！相手の好意は奪い取るもんやで！

「なんか変な電波を受信したんだが…神速のリア充？」

「拙者、その電波の発信元に心当たりがあるでござるよ」

なんやねん、二人してジト目でみらんといてや。わたしがこないな美少女かて、そんなにみつめられると、照れちゃうで。

「美少女（笑）」

なんでしつかり受信しとんねん！わたしの考えてることわかるんか!?あと（笑）つけんなや！

「そういえば、自己紹介がまだだったな。こんにちは、はやてちゃん。俺の名前は高まつ  
：「呼ばれて飛び出て僕、参上!!シャキーン！はーやいぞつーよいぞスーパーガール!!」  
どこのアホがでてきたんやああ!!誰も呼んどらんわああ!!!

「こらー！アリシア！ちゃんと挨拶なさい。御機嫌よう、士郎さん、シグナムさん」

「おつ、プレシアさんか、こんにちは。今日はアリシアちゃんとお買い物ですか？」

「でたな！お話魔王の父シローとニート侍シグシグ!!ここであつたがキサマらの最後だー！この僕、『銀河美少女☆アリシア』がやつつけてやる！くらえっ！ビシューーン！超☆カッコいいビームツツ!!ビビビビビ」

「ござっ!!?ニート侍!!甚だ遺憾にござるよ!?!しかしアリシア殿はあいも変わらず元気いっばいでござるなあ。プレシア殿も体調がよろしいようで重畳なり。うんうん」

士郎さああああん!?若すぎやあああ!普通に高校生ぐらいにしか見えへんで!!プレシアさんもなんで地球におんねん!ご近所のセレブみたいな挨拶しおつてから!!あと、アリシア!いつたい何と合体して蘇生したああ!銀河美少女ってなんやねん!超☆(スターホワイト)カッコいいビームつてなんやああ!しかもあんたも何も出えへんやんけ!!あと何や!あのシャキーン!とかの効果音!どうやって出しとるんや!?



「シグシグー、あの（笑）なにー？」

「むしろお前が（笑）やああああ!!はやてや！八神はやて！ハア…ハア…、そういうあんたはアリシアちゃんって言うんやろ？」

「なっ、なんだってー！まさかお前は…我が永遠のライバル八神はやてか!!ジャキーン！そしてなぜ僕の名前を知ってるんだっ！ビシユー！」

知っているのか雷電！ってかあんたがわたしの何を知つとるんや？いきなり永遠のライバル言われるし…。さっき壮絶な自己紹介しよったやろが。

「きつとこれが運命の出会いってやつだな！スチャツ！僕はアリシア・テストロツサ！職業は銀河美少女だ！ババーン！よろしく、我が永遠のライバルにして最高の親友はやて！」

出会って3分で親友ができてもうた…インスタント親友か!?

「だって名前で呼んだら親友だってフェイトが言ってたよ！だから僕達は親友だ！カキーン！」

「なんでナチュラルルに行間読んでんねや。それは例のお話魔王の持論や。まあええわ、親友で構わへんで。これからよろしくなアリシアちゃん」

「よろしく！銀河美少女★はやて！バキューン！わーい、ママァー！！初めて友達でき  
たー！！」

「良くやったわー！！アリシアァー！！早くフェイトにもメールしなくっちゃ！今夜はご馳走  
よ！！」

「よかったでござるな、はやて殿。友達ができたでござる」

「なんやねん、シグナム。別にどおってこともないで。人の職業かってに銀河美少女に  
しよるし、なんやねん★（スターブラック）って、白黒でピュアキュアやるつもりか？」

まあ、でも悪い気はせえへんな。それに…わたしにとっても初めての友達やし。

「はやて殿、顔がにやけてるでござるよ」

フェイト、ヨク聞イテ。私ハネ、アナタヲ創リダシテカラズツト、アナタノコトガ大嫌イダツノヨ！アツハツハツハツハ！私達ハ、旅立ツノ！忘レラレタ都、アルハザードへ！

「あら、フェイトからのメールの着信だわ」

プレシアさん!?なんちゆう着信音にしてんねや!!

第六話 立ちはだかるは「最強の魔王軍団!愛と勇気のピュアキュアスターズ!ここに見参!シャキーン!」タイトル横取りすんなや!!

あかん、なんでや!わたしが悪いんか!?これからはじまるはずやった私と魔法の愛と勇気の物語。

わたしの前には手がつけられないほどおかしな4人の人影。

ここに来なければこんな事にはと思つとるが、その前にどうしても言いたいことがひとつだけ。

『見える…私にも味方が見えるで!!!』

魔法少女      リリカル      おわた      o r z

第六話 立ちはだかるは

「最強の魔王軍団！愛と勇気のピュアキュアスターズ！

ここに見参！シャキーン！」タイトル横取りすんなや！！

「はーやいぞつーよいぞスーパーガール！みーえない敵もバツキバキー！ドキューン  
！」

「アリシアちゃん、なんやねんその歌…」

「なんだよー決まってるだろー、僕たち銀河美少女ピュアキュアスターズの歌だよー。

それにちゃんづけやめてよー、なんか変な感じになるー」

「はあ…とりあえずちゃんづけはやめとくわ」



「そうかい、そろそろなのは達もここに来ると思うから、それまでゆっくりしててくれ」

さすが士郎さんやな。包容力のあるええ大人や。ただ、席を離れ際にぼそつともらしとつた、あとで恭也にはお話（物理）しないとな…の一言が高町家をよく現しとるわ…なのはちゃんのお話（砲撃）は父親譲りだったんやな…

「ところでアリシア、プレシアさんはどうしたん？店の前で別れとつたみたいやけど」

「ママ？今日はせっかくだからお友達とゆっくり遊んできなさいってさー。フェイトももうすぐ来るみたいだし、僕の親友を自慢してやるんだ！ゴゴゴゴ！ママはお家でご馳走作って待つてるんだって！ババーン！ママの次元世界料理はこの世で一番美味しいんだぞ！キラツ！」

「次元世界料理…私も知つとるで、マーブル模様でピクピク動いとるやつとかやろ？」  
「なにそれ!!ゴミ!?!ズキューーン！」

シヤマルエ…

カランカラン

ん? 誰か店に来たみたいやな? もしかしてなのはちゃん達か!? あかん! 緊張してきてもうた!

「アリシアー、友達できたんだって? お母さんから聞いたよー。……ん? なんではやてがここに居るの!?! 闇の書事件もおかしくなってるの!?!」

「あれ? もしかして…我が永遠のライバルはやて! もしやフェイトの知り合いだったのか!?! ガガーン!」

「いや、初めて会ったんやけど…」

「世界はいつだってこんなはずじゃなかったことばかりだよ、クロノお…」



「ちよつとフェイト！先に行くなんて薄情ね」

「そうだよフェイトちゃん、置いてくなんてひどいよ。鮫島、ここまで送ってくれてあげがとうね？」

「ククク！すずかもアリサもそう怒るなよ。きつとフェイトも姉のことが心配だったのだろうさ。しかし、我が領土である翠屋にのこのことやってくるとは、我が宿敵、銀河美少女☆アリシアも堕ちたものだな。フハハハハ！」

「きつ、貴様はお話魔王！ここであつたが百年目ええええ！ババババーズキユンズキユーン!!」

「あ、あの…ご、ごめんね？みんな…」

ちよいまでや、とりあえずひとつひとつ確認していこか？ただし中二。てめーはだめや。

てか、アリシアの効果音は感情の昂りにでも作用されとるんか？今までで一番凄いで？

「とりあえず自己紹介するわよ!私の名前は月村すずか。すずかと呼んでいいわよ、そのかわりにはやてって呼ばせてもらおうわ」

「次は私ね?私はアリサ・バニングスっていうの、よろしくね。はやてちゃん」

えらくツンデレな感じになったすずかちゃんやで…そのかわりに物静かになったなあアリサちゃん…ってなんで二人の性格が逆転してんねや!!

「次は私の番だな!我は超古代魔道機ギヤラクシーシューティングプラスターの使い手である「master! my name is Raising Heart!」今良いとこなの、少し黙ってるの!「……………」フンツ、神魔道帝王バスターカラミティホワイト・T・なのはである!我が野望は最高評議会を駆逐し、管理局を正しい道に戻すことである!」

あーあー…要するに、ロストログア級バ(スター)カ(ラミティ)ホワイト高町なのはっていう翻訳でええんやな…

なんでもう中二病発症してんねん!つかお前もか!口が軽すぎとちやうか!?!ああ

「そうやな!! 頭も軽そうや!! 見つけたで!!! 世界の歪みを!!! このわたしが駆逐したる!!!」

「ええつと…最後は私だね? 私はフェ、フェイト・テスタロッサつていいます! ア、アリアの妹です。ええと…あと、お母さんの作ったコピー機から生まれました! あ…これ内緒だった…」

「コピー機!? プレシアさん一体どんなコピー機作つてんねん! なにをコピーしようとしたんや! あとフェイトちゃん! お前に一体何が起きとるんやあああ!!!」

「あ、あはは。おもしろいジョークやな。わたしの名前は八神はやてつていうんよ? よろしゅうな、えつとフェイトちゃんやつけ? わたしたち会つたことあるか? あと闇の書つてなんなん?」

「えええええつと…あの、その…か、勘違いみたいだった! うんそう! そうにちがいにやい! さつきお母さんからメールきて名前知つてただけだよ! 闇の書つていうのはアレ、アレだよアレアレ…ジャスタウエイだよ!」

「……………」

「ううう……………」

テンパリ過ぎやでフェイトちゃん…あと噛んどるで…困ったからってネタに逃げんのは反則や…あとその赤面するのも可愛過ぎて反則や…

「そ、そうか、ジャスタウェイならしやあないな、うん。あつ…そういえばド忘れしてもうたんやけど、機動六課の時に追いかける奴、誰やつけ?ポツカリスエツテーやったわけ?」

「スポーツドリントクの名前のほうが近いよ!?!スカリエツテイだよ!部隊長でしょ!しつかりしてよ!…えっ?」

ふははははは、仲間や!仲間がおる!…この世界に置き去りにされてしまった仲間がおる!!!

第七話 たったひとつ！ たったひとつのシンプルな答え  
や！ 貴様はわたしを怒らせたああ！！

あかん！ もう限界や！ ここからはじまる私と魔法の物語。

わたしらの目の前に現れたるはアホアホな強敵達。

正直八つ当たりやって分かつとるが、その前にどうしてもアイツに伝えなあかんねん  
！

『君がッ！ 泣いて謝ってもッ！ わたしはッ！ シバくのをやめへん！！』

魔法少女      リリカル      おわた      o r z

第七話 たったひとつ！ たったひとつのシンプルな答えや！

貴様はわたしを怒らせたああ!!

「うう…ひつく…ふえーん! はやてはやてはやてはやてはやて! はやでえ…ぐすつ、ひっぐ」

「いきなり飛びつかんといてやフェイトちゃん! びっくりしたで。号泣しとる理由はなんとなくわかるんやけど…」

「だつて…なのぼが、なのぼが…ぢ、ぢゆうにびようで、じゅえる、じーどが…うええ…」  
「はいはい、わかっとおよ。よお今まで一人で頑張つとつたなあ。フェイトちゃんはエライで? 誰でもできることやあらへん。今はたくさん泣いてええで。これからは私もおる、もう一人やないぞ」

「うええええーん!! はやでえー! あいじでるうううー!!」

「うんうん、わたしもやでー」

「アリサ。なの×フェイの時代はたった今、終わったわ。これからはフェイ×はや、フェイトのヘタレ攻めの時代よ！今年の夏込みはコレに決まり！帰って原稿差し替えるから手伝いなさい！すぐか月村！呐喊します！」

「もちろんだよ！すぐかちゃん！最高の作品に仕上げないと万死に値するねっ！盛り上がってきたよおお！」

「ぐぬぬ！僕（我）のはやて（フェイト）が……！」

オイ、ちよつとマテや。なんか不穏な言葉が聞こえたで……。そして誰があんたのはやてやねん。

「ひつく……。あうう、ご、ごめんね？はやて」

「別に気にせんでええで。かわええフェイトちゃんをしっかりと堪能させてもらたしな」

「あうあうあうあう……」

なんてかわええねんフェイトちゃん…そうやな、フェイトちゃんに比べたらわたしなんて薄幸の美少女(笑)になんのもしやあないで……

「そ、そんなことないよ!はやては優しくて包容力があって、とつても素敵な女の子だよ!私なんかよりよっほど可愛いよ!」

やめて!フェイトちゃん!余計にみじめになるだけや!わたしなんて(笑)で十分なんやああああ!!!そして姉妹で行間読まんといてええええ!!!

「オイ、(笑)。いい加減、我を放置するのはどうかと思うがな…ククク、貴様の所有する闇の書など、軽く星をぶつ壊す我が必殺奥義『超時空波動砲撃スターライトブレイカーファイナルデストロイシフト』の前には飛んで火に入る羽虫同然よ…ふっ…ふはははは!八神はやて!貴様は所詮その程度の女よ!」



ブチッ！

「今までの全ての鬱憤！あんたで晴らさせてもらうでえ世界の歪みいい！！来いや！夜天の書！！結界展開！これがつ、人類進化の極みの姿やああ！特と見せ付けてもらおうやないの！！第98頁蒐集魔法発動！『アンブラッ！マウント富士！ネイチャーツアーの刑！』くらえやあ！このツングタングガングアジドルがあああ！！！！」

「だめえー！はやてー！！その一連の言葉は死亡フラグだよおお！！！！」

「なのおおおおお！！！！モミアゲがあああ！！」

「あははは！いいエビゾリ体勢だ、お話魔王！バシユーン！おびえろー！すくめー！デバイスの性能を生かせぬまま死んでいけー！ズガンー！」

「見えたか！富士山見えたんかああああ！！こっから見えるわけないやろおおがあああ！！」

「星がつ！星が見えたっ！！スター！！！！」

「もうやめてえええ！なのはのHPはもうゼロよおおおお！！！！」

「ストツプだっ！管理外世界での魔法行使は禁止されている！いますぐ魔法を止めるんだっ！」

第八話 あかん!無理や!それ飲みもんやない!フェイトちゃん!やめ……ゴバァー!「AMSギァアするアツ!、逆流…!から光がアアア…」…すまん、なのはちゃん…。

ここからはじまる私と魔法の物語。わたしらの目の前に現れたるはアホアホな強敵達。

正直やっぱりここにおつたんか、でもどうしてもあんたに伝えなあかんねん!

『せめてハナクソほじりながらでてくんやあ!!』

魔法少女      リリカル      おわた      o r z

第八話      あかん！無理や！それ飲みもんやない！

フェイトちゃん！やめ……ゴバア……！

「AMSギヤアするアツ！、逆流……！から光がアア……」

……すまん、なのはちゃん……。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。投降の意思があるなら速やかに武装解除してほしい。みたところそんなに害のある魔法ではなさそうだから、当方としては話し合いで解決したい。僕個人としても、君みたいに可愛い女の子に魔法を放つのは心苦しい」

「かかかか……かわ……かわ……」

「なのおおおお!!!通常の三倍の速度で背中とお尻があ!!!接近してくる機影があります

のおおおお!!!!

「なのはあ!何を言いたいのか分からないけど赤い彗星にならないでえ!!はやて!こっちに戻ってきてええ!突っ込みでしょおお!!クロノもなに自然に口説いてるの!?!」

「いや!?!別に口説くつもりはなかったんだが……」

「ようやくきたな!銀河美少年ブラックフィールド!ズモモモ!颯爽登場!した瞬間からお話魔王にダメージとは!ピキーン!さすが二代目銀河美少年!チャキーン!」

「黒野じゃないクロノだ、それに二代目銀河美少年を襲名した覚えもない。そろそろなのはも限界みたいだから魔法を解除してくれると助かるんだが……」

「かか……かわっ……」

あああああかん!男の人にかか…可愛いなんて言われたの前世も含めて生まれて初めてや!?!あわわわわわ!!!くあw背drftgyふじこlp;@:~」!!!!

「ううん……ここどこや？病室か？海鳴大学病院か……？」

「いや、ここはL級次元航行艦船の8番艦アースラ。乱暴な言い方をすると次元を旅する宇宙船だ。魔法使用中に気を失ってしまったので急遽アースラの医務室につてれきたんだ。」

おわっ……クロノ君や！ベッドの隣でわたしが目覚めるまで待っていてくれたんか？

「そうだったんや、すいません迷惑かけてしもうて……」

「いや、僕も悪かった、はやてだったか？お詫びとして翠屋での飲食代は僕が払っておい

た。あと、フェイトから聞いたよ。バカホワイトが相変わらずのアホな事を言ったみた  
いだね」

「そ、そこまでしてもらうなんてえつと…クロノさんに悪いわ!わたしこそなんかお詫  
びせんと…そうや、なのはちゃん達は?」

「気にしなくても良い、ああ、どうしても言うなら今度翠屋についてきてくれないか  
? なかなかこの艦を離れられないかあさ…艦長達からのお使いを良く頼まれるんだが、  
あの手の店に男一人で行くのはちよつと敷居が高くてね。さあついてくるといい。な  
のはは今艦長室でこつてり絞られているところさ、フェイトとアリシアもそこでのんび  
り待っている。そこで君の使っていた魔法のことも少し聞きたい、聞かせてもらえるか  
?」

「し…しれつと女の子とのデートの約束を取り付けるなんて…つ、罪作りな男やな。え、  
ええでそのくらい。あと…く、車椅子あるか?わたし、歩けんねん…」

「!?すまない…つらい事を言わせてしまつて。あの時は急いでいたせいで、翠屋に置い  
てきてしまったみたいだ。……悪いがちよつとがまんしてくれよ?よつと」ヒヨイ

「うわあああああ?!?!?…なにすんねん?!?!?」

「あまり暴れないでくれ、バランスを崩してしまう。ここから艦長室までは近い、車椅子  
を取ってくるよりこのほうが早いだろう」

「せやかて…なにもお姫様だっこせんでもええやん…」  
「僕だつて恥ずかしいんだ。すこしの間だけがまんしてくれ」

あああああかー！ー！ー！！なんでクロノさんこんなに来るイケメンになつとん  
や！！よう考えると将来、富と地位と容姿のすべてがそろ超絶ヒーローやないやああ  
！！これがイケメンパウワーか!? 主人公補正か!? 罪な男やで!! ええのか! 奥さんおるの  
にお姫様抱つこでホイホイ連れてつて!? わたしは子持ちやろうが誰やろうが惚れてま  
う女なんやでー！ー！ー!!! そうや! こん時はまだエイミイとはなんもないんやつた  
あああ!!

惚れてまうやろー！ー！ー!!!

「えへへ…あかんでクロノさん、わたしたちまだ出会ったばかりやで…いやん、はやて困っちゃう!」

「おーい、はやてー。いい加減戻ってきてよー。この部屋、突っ込みどころがたくさんあるんだよお…」

「なーなー!銀河美少年ブラックフィールド!決め台詞やつてくれよー!」

「断る。だいたい僕の職業は銀河美少年などではない、管理局の執務官だ」

「な…なのお…正座2時間は足がしびれるの…リンデイさあん、ごめんなさいなのお…」  
「なのはさん?何度言ったらわかるんですか?囑託魔道士としてまず人前で魔法魔法叫んではいけません!ちゃんとR a i s i n g H e a r tの言うこと聞いてますか? どうせ聞いてないんでしょう!まったくあの人と同じでしょうがないわね」

カコーン!

「そんなとこ…はずかしいわ…やん…せめて電気けしてえなあ…」

「もうこうなったら特殊兵装の出番だね…クロノー。リンデイさんのお茶取ってー」



「何をするつもりだフェイト。ほら、間違っても飲み物じゃないからな、それ。はやてに飲ませるなよ? いいか、絶対に飲ませるなよ!」

「わかっているってクロノ、なのはじやあるまいし。でも、さすがクロノだね」

「ん? 何がさすがなんだ?」

「お約束をよくわかってるってこと。……騙して悪いがっ! はやて! 一気! 一気!」

「フェイトテストタロツサアアア!!!」

「ゴバアアアア!!! 甘さと渋さと辛さと苦さと酸っぱさが混ざり合って地獄の協奏曲をおお!!! 口の中がダークマターに蹂躪されるうううう!!? ってなんでやああ!!!」

「銀河美少女★はやて! 颯爽生還! ズキューーン! さすが僕の最高の親友だ! あの兵器を前によみがえるなんて! キラーン」

「なのおおおおお! ダークマターが顔にいい!! 目がああ!!! ワタシノメガアアアア!!! 足がああああ!!!」

「ギャーギャーうるせえぞ。おいクロノオ、たくさんの美少女に囲まれてやがって。両手に花ですかコノヤロー。しかも女の子抱えて医務室に連れ込んだってなあ? オ

イオイ初めてが医務室とかガキのくせにレベルたけえな、両手に花どころかシモのさくらんぼまで収穫されてたのか。どうせなら美女つれてこい美女、お前の誑しスキル使つて。そして俺に紹介しろ」

「とつ父さ…副艦長!なんて品がない事を言うんですか!そして事実無根なこと言わないでください!あとせめてボサボサの頭もどうかしてきてください!こんなに長い間どこに行つてたんですか!」

「誰の頭がクルクル性根から捻じ曲がつた天パーだ!あそこだよ、駅前のパチン…トイレに籠つてたに決まつてんだろ」

下ネタ自重しろやああああ!!ダメ人間臭しかせえへんで!!



たっちやううう!!!  
フラグがたっちやうううう!!!

「はあ……とりあえず副艦長は艦長の隣にでも座っていてください。はやて、さっそくで悪いが君の使っていたデバイスと魔法について教えてもらいたい。みたところデバイスのほうでエミュレートをかけたミッド・ベルカとも違う術式のようにだったが」

「う、うん。かまわへんで。っていつてもわたしも魔法つこうたんは初めてやったし……詳しいことは家族に聞かなわからへんけど……」

「へいへい、よっこいせ。オイ、クロノ。俺が買ってくるよう言つてた少年ジャンクはど  
うした。」

「お話魔王！今日こそ決着をつけてやる！訓練室で勝負だ！ドドドドド！」

「フツ、銀河美少女よ！そのジョジョ立ちでの挑戦受けて立つ！我が魔道神眼の前には貴様など塵芥に等しいことを改めて思い知らせてくれるわ！このなのはが！」ゴゴゴゴ

「はやてー、私たちは訓練室に行くからねー？」

「あら、クライドさん。少年ジャンクはここにありますよ。あと、卵焼き作ってみたの。食べてもらえる？桃子さんに地球の料理を教えてもらったの」

「オイ、てめえの料理は非殺傷設定切れてるか質量攻撃に当たるか未だに法廷で争ってるんだから、結婚するときに絶対に作んなって言っただろ、リンディ。また近所にはら撒いて古代遺物管理部 機動三課のお世話になる気か、何日目だボケエ。だいたい、てめえの料理のせいで俺の出世が遠のいたんじゃねえか」

「法廷で争われてるのはクライドさんの魔法です！私の料理は関係ありません！」

あかんフェイトちゃん！一人にせんといてえ!! 誰も味方がおらへん！そしてその天パー！なに少年ジャンク読んどんねん！パチンコ行つとつたなら自分で買ってこいや！あとリンディさん！あんたの料理はロストログア認定されとんのか!!! 前にしよっぴかれとんかい！アホ二人はさつさと訓練室でも好きなどこに行けや!!!

「まず、この夜天の書は古代ベルカで、ミッドチルダに対抗するために作られた『イタズラ用デバイス』ちゆう話で、何らかの原因で持ち主の手を離れたら新しい持ち主の下に転移するようになつとるらしいで。機能としては再生機能と魔法蒐集機能と転移機能、あと守護騎士システムが組み込まれとんのや」

「古代ベルカのデバイス…貴重な資料だな…、聖王協会からしてみれば喉から手が出るほど欲しがるだろう。魔法蒐集機能とは一体…？まさか強制的にリンカーコアから蒐集したりとかの傷害事件をおこしたりしてないだろうな？」

「それが…蒐集するためには持ち主が書を所持している状態で魔法を食らう必要があるらしくて…。しかもイタズラレベルの魔法とちやうと蒐集せんくて…。わたしが使えんのはこの書に蒐集されとる601頁分のイタズラ魔法だけなんや…」

あかん、泣けてきた…なんでこんなポンコツデバイスが生まれてきてしまうたんや…。体張ってラーニングしても使える魔法がイタズラ魔法だけなんて、クロノさんに笑われてしまうで…

「……………。その、なんだ…。まあ、事件を起こしていないなら所持していても問題ないだろう。元気を出してくれ、僕のS4Uを貸してあげるから、あとでちゃんとした魔法を使ってみるか？」

その優しさに、全私が涙した。クロノさんの優しさ…プライスレス。

「あん？夜天の書がどうしてここにあんだ？」

「副艦長？ご存知なのですか？」

「昔、クロノが生まれる前だったか？俺のところに空から降ってきて来たんだよ。守護騎士システムってのは知らなかったが、魔法が次元犯罪者をつかまえるのにスツゲー便利だったから使ってたんだけど、10年くらい前のどっかの任務時に虚数空間に落つことしちゃった」



「こんな古代ベルカの貴重なデバイスを落つことささないでください！父さん！転移機能がなければ失われてたかも知れないんですよ!!！」

「んなこと言つたつて、こけちまったもんはしゃあねえだろ。オイ、嬢ちゃん。その夜天の書、第594頁に俺のくらつた『リンディちゃんの愛☆LOVEだあくまたあ。く私の想いよクライドさんへ届け!!管理局のクライドさんへ届け!〜』つて便利な魔法が入つてつぞ。発射された料理がターゲットに自動追尾して口に入り、確実に行動不能になる」

「もう！クライドさん！出世できないのはその魔法のせいじゃないですか!!だいたいなんですか！私のダークマターつて!!」

「俺が知るか。勝手に魔法として蒐集されたんだよ」

「そんな法廷で争われとる魔法なんか使えるかあああああ!」



「S4Uて言うのは、父さんと母さんが僕にくれた杖型ストレージデバイスで読み方は『Song・For・You（ソング・フォー・ユー）』。いつか僕も誰かの為に、愛の歌を贈れるようにってさ」

Song for you…貴方に歌を…か。それをわたしに預けるって………うわあああああ!!!クロノさん全力でわたしを攻略にかかるとるんかああああ!!!! 堕ちちゃうううう!!!わたし、クロノさんに墜とされちゃううううう!!!

「ピコーン。息子が孫フラグを立てました」

第十話 「僕は…僕は、彼女達を止めたい。止めなきゃならないんだ! S 4 U!!僕に力を貸せー!!!この、分からず屋あーっ!!」

ここからはじまる私と魔法の物語。わたしらの目の前に現れたるはアホアホな強敵達。

アホとアホがアシンメトリカルドッキングしとる…わたしはどうしてもお前らに言わなあかんねん!

『なぜや!なぜお前らがここにおる!答えろおおお!!!』

魔法少女

リリカル

おわた

o r z

第十話 「僕は…僕は、彼女達を止めたい。止めなきゃならないんだ！」

S 4 U!! 僕に力を貸せー!!! この、分ならず屋あーっ!!!」

「どうだいはやて、魔法は使えそうか？」

「う、うん、バリアジャケットの展開とシューター1個作るくらいならなんとか出来そうや…それにしても、このデバイスもろうてよかったかな…」

「そうか、それは良かった。ベルカ式の魔法にしか適正がないかもしれないと思ったからね。父さんと母さんがくれたんなら素直に貰っておけば良い、個人所有のデバイスなら誰に渡しても問題ないからね、名称はなんて言うんだい？」

「あいあむF4U、はろー」

「なんでもクライドさんとリンデイさんの好きな歌を元にしたS4Uと対になる名前らしいで? 正式名称『Flower・For・You (フラワー・フォー・ユー)』で、S4Uと一緒に作られたインテリジエント型らしいで? なんでもクロノさんに渡すつもりやったらしいんやけど…」

「ああ、僕がストレージデバイスの方がいいといったせいだろう。それにしても発音が…」

「あろんぐろんぐたいむあー、いんぎぎやらくしー。ふあーふあーあうえーい」

あかん、なんやこの両親からの支援体制…リンデイさん、孫の名前はなんにしようか

しらとか勝手に言わんといってください。エイミイやのうてなんでわたしに渡すんか？あとクライドさん、クロノがあそこまで落としかかるのは初めてみたとか意外と満更じゃなさそうだとか期待させること言わんといってください…。それにしても対になるねえ：Flower for you, Song for me.とか…あのふたり意外にロマンチストやな。

「ここが訓練室だ、シールドを突破するほどのアホみたいな威力の魔法さえ使わなければ安心だから思いっきりやってくれていい」

「へえ…みんなこの部屋ん中におるんや」「おりやあああああ!!!」なんやこの状況…」

「くらええええ!! お話魔王おおお!!! バッキューン! 超ッ! ホワイトスター! キラン! カツコいいビイイイムツツツツ!!!」 バシューーー!!!

「真つ向勝負うううう!!! ギャラクシーシューティングプラスター!!! スローイングスピアフォームツ!!!」 「No! Master! No!!!」 いいから黙って変形するのをおお!!!  
「……All right. ガシユン!」 ここが貴様の終焉だああ!!! 銀河美少女ホワイトスターを! 軽く! ブツ壊せええ!!! 全! 力! 全! 壊! ギャラクシーガール! ホワイトスターライトツ! プレイカアアア!!! プロキシミイイイエデイシヨオオオン!!! 投ツ擲イイイ!!!」 ゴオオオオ!!!  
Noooooooooo!!! Oh my god! Oh my god! Oh my god!!!

「テスタロツサアアア!!! 拙者ツこんなに胸が躍るのは生まれて初めてでござるよ



おおお!!!レヴァンティン!!!カートリッジッ!ロオオオドツ!!!「Ja!ガガガシュー  
ン!」夜天御剣流ツツツ!!!九頭龍!!一!セエエエン!!!」ガガガガガガガッ!!!

「さすがシグナムツ!!どんなになつても最高だよ!!!バルディイイツシュ!!!」Yes S  
ir!!!ガガガシューン!!!ライオットザンバアアア!!!カラミティイイイ!!!」ガッ  
キイイイイン!!!

「フンツ!フンツ!ハアアアアア!!!筋!肉!全!開!」バババツ

「ああ、やつぱりいい筋肉だよ!アンタ!!さすがあたしの彼氏だよおお!!!」ベタベタ

ちよつと待てええええ!!!ニート侍!!!ガチムチ!!!どっから出てきたてめえらあああ  
あ!!!いろいろあり過ぎて突っ込みきれんわああああ!!!超☆カッコいいビーム出すな

ああああ!!! レイジングハート投げんなやああああ!!! 夜天御剣流ってなんやああああ!!! それ  
はスカリエツティぶっ飛ばすやつうううう!!! 筋肉全開ってなんやああああ!!! お前から付  
き合つとんかあああいい!!!

「ストップだアアアアアア!!! ここでの大規模魔法の使用は禁止されているって言った  
だろオオオオオオ!!! S 4 U!!! ステインガアアアアブレエドツ! エクセキューショ  
ナー! シフトオオオオオオ!!! 少しッ! 頭ッ! 冷やそうかアアアアアア!!!」

「「「みぎやあああああ（なのおおおお）（ぎぎああああ）!!!」」」

第十一話 「ふふふ、はやて。私はね……人間じゃないんだよ」 フェイトちゃんエ……

ここからはじまる私と魔法の物語。わたしらの目の前に現れたるはアホアホな強敵達。

特にその中二病！……どうしてもアンタにコレだけは言わなあかんとや！

『さすがなのはちゃん……わたしらにできへんことをやってくれる……そこに痺れも憧れもせんけどな……』

魔法少女

リリカル

おわた

o r z

第十一話 「ふふふ、はやて。私はね…人間じゃないんだよ」

フェイトちゃんエ…

「ううううー、今や！ラピットシューター！」ポシユ

「すごいじゃないか！一度目で魔法を発動させるなんて！」

「はやて凄いよ！私も初めてリニスに魔法習ったときは不発だったんだよ！」

「そんな褒めんといてや、へろへろのシューターが一個できただけやで？」

「いや、誇っても良い。ベルカ式の使い手がミッド式の魔法を使うなんて至難の技だ」

「ふんっ、そんな子狸のへっぼこ魔法など我が魔道の前にはゴミ同然よ！ふはははははははー！」

「はい、アンタは黙つとこうな？第594頁蒐集魔法発動、『リンディちゃんの愛☆L0VEだあくまたあ。く私の想いよクライドさんへ届け！！管理局のクライドさんへ届けー！！』」

「なのおおおおお！聞くからにヤバそうな魔法がああ！！フ、フラツシユムーヴ！回避できないの！？プ、プロテクション！コレで安心なの「パリーン」そんな！プロテクションがやぶらガボツ！」

「おお、ホンマに一撃必中や…なのはちゃんの目と口からビーム出とる…」

「なのおおおおおお！！マーズーイーイーぞー！！！！」

「お話魔王があんな簡単にやられるなんて…ガビーン！」

「おお、前の主がよく使用していた魔法にござるな。アレは書の中からみてよく笑って  
いたでござる。今回はハンバーグのようにござるな」

「あのスピード…真ソニックフォームで回避できる？」「N o , s i r …」だよね…はや  
て、その魔法私には絶対に使わないでねー？」

「母さんエ……」

おお、クライドさんが便利っちゅうとつた訳がわかったわ。なのはちゃんのプロテク  
ションぶち破ってフェイトちゃんですら回避不可能な魔法とか無敵やろ…あと、あれハ  
ンバーグなんか!?わたしには紫色のオーラを纏った暗黒物質にしか見えへんかったで  
？

「で、フェイトちゃん。何でここにシグナムとザフィーラがおんねん?」

「アルフが彼氏が出来たから紹介したいって連れてきたの、シグナムはここに来る途中で会ったみたい。それにしても、シグナムもザフィーラも何か変になってるみたいだね」

「分かってくれるかフェイトちゃん、シグナムはまだマシやねん。相変わらずのバトルマニアやけど…問題はアホのザフィーラとむつつりヴィータ、あとバーニングリーンや。特に前者2人は手がつけられへん」

「あはは、はやても苦労してるみたいだね?ところで、はやてはどうやって過去に戻ってきたの?私はティアナと執務官の任務中に確保したロストログアが暴走して、気が付いたらコピー機の前でぼーっとしてるのを母さんに見つけてもらったんだけど…」

「ちよいまでやフェイトちゃん。自分がおかしな事口走つとることに気いついとるか？ 気になつとつたんやけどなんやねん。コピー機つて。プロジェクトFATEはどうしたんや？」

「えつとね…私もよく分からないんだけど。私がかつちに来る前からアリシアはよみがえつてたみたい。あの…マテリアルみたいになつて…。私は5年くらい前かな？ 母さんの作った、研究材料を増殖させるコピー機から生まれたの…アリシアがイタズラで…自分のパンツをコピーしたから…」

「……………」

「聞いている!? はやて! パンツだよ!? よりによつてアリシアのパンツから生まれたんだよ!?! なんなの! ついに人間ですらないよ!?! どうゆうことなの!?! ねえ、はやて! 教えてよ! 母さんは何も答えてくれないんだ!」

「お、落ち着いてえなフェイトちゃん。そんなことわたしにきかれても答えられへんて。」



だからガクガクさせんといてやああああ」

「うう…酷い目にあつたの…ふう。ときに雷光の死神に狸の王よ、貴様らも未来がわかるのか？ふむ、我は娘ヴィヴィオとウエンディとともにスカさんごっこをしてる最中に次元震に巻き込まれたのだが…」

「狸の王と申したか!?もうーセツト逝つとくか!?まあとりあえず、スカさんごっこってなんや?なんでその微妙なメンツで行つたかも、小一時間問い詰めたいで?」

「びい!!…スカさんごっこってのは、白衣を着てスカさんになりきってハツハツハツハツハッ!しながら地上本部を練り歩くの。その間に局員に捕まったら罰ゲームなの」

「鬼畜だね、なのは。それじゃあ余計に海と陸の確執が深まるばかりだよ…」

「なあ、フェイトちゃん。こんななのはちゃんと出会ったときはどうだったん？いきなりスターライトブレイカーとか撃たれんかったか？お話ししようよとか言いながら」

「いや、私は撃たれなかったんだけど…大きな子猫に対して『リリ狩る！真剣狩る！首を刈る！』って叫びながらプラスチックビット出してエクセリオンバスターA・C・S・打ち込んでた」

「き…鬼畜過ぎやボケエ！」

第十二話 こうなつてもうたらもう、スカリエツテイが  
：ポカリスウエットになつとつてもおかしくないで？  
「いや、はやて。それはおかしい」

ここからはじまる私と魔法の物語。わたしらの目の前に現れたるはアホアホな強敵  
達。

それより先のことどうなるんやろ…どうしても気になつてしまふで…

『このままやと機動六課どうなるんやろ…』『えっ？』『』

魔法少女

リリカル

おわた

o r z

第十二話

こうなってもうたらもう、スカリエッツィが…

ポカリスエットになっとつてもおかしくないで？

「いや、はやて。それはおかしい」

「どどのつまり、フェイトちゃんは正史よりロストログアの暴走によって過去に戻った、もしかしたらティアナも巻き込まれるかもしれない。なのはちゃんについては次元震によつてこの世界に来たと、次元漂流者になったかと思えどそこは過去の自分の世界に似とるけど違う世界やつちゆう訳やな。わたしは…仮に観測世界としとくわ、そこにおつた同位体的存在『矢上 疾風』から『八神 はやて』になつてもうた…と。うわー見事にバラツバラやな」

「うむ、我が世界には『高町 美由紀』などというヘツポコな姉など存在しておらぬ。それに…アレだ…『クロノ・ハラオウン』はアレの父と同じ性格の女であった。ちなみに我が世界からはヴィヴィオとウエンデイが巻き込まれている可能性がある」

「ティアナ…大丈夫かな…。こんなアホばっかりの世界で一人で…。泣いてないかな？」

「それについてはなんとも言えへん…あの真面目な性格やから絶望しとらんならええんやけど…。わたしの世界にも一人知り合いに心配な人がおる、わたしの友人でな『中島 元也』さん言うねん。名前が同じなだけで歳はわたしの3つ上やったんやけど…ここまで来たらゲンヤさんになつとる可能性は捨てきれんわ…」

「………………。不安や（だよ）（なの）」

「そろそろ戻らんとあかん時間やな。シグナム、ザフィーラ、帰るでー。シャマルが夕飯作って待つとるで?」

「そうでござるな、あまりヴィータを放置しておくともんでもない事態になってそうでござる…:家の中に入れないほどの同人誌の山が出来ているかもしれないでござるよ」

「そういえばシャマルが、フンツ!今日の、フンツ!夕飯は魚、ハアアア!料理にすると、フオオオオ…:言っていたな。アルフ、ではまた明日」

「明日は駅前に午後1時待ち合わせ!新しく近くにジムが出来たんだ、そこにデートとしゃれ込もうよ」

「えー、もう帰っちゃうのかよー、もうちょっと遊ぼうよー。フェイトもそう思うだろー？」

「えつと…ダメだよアリシア。はやてに迷惑がかかるよ。それに母さんがご馳走作って待ってるんだよ？今日はもう帰らないと」

「なのおおお…もうこんな時間なの！早く帰らないとお母さんに心配かけちゃうの！私も帰るの！」

しもうた！あのヴィータを放置して来てしもうた！もしかしたら家が爆発しとるかもしれない！何を起こすかわからへんのがウチのヴィータや！ってかなのはちゃんつて中二病状態になつとらん時はやつぱりいつも通りのしやべり方なんやな。普通にしゃべれるんなら中二病やめればええのに…やめられへん止まらへんから中二病感染率が高いんか？怖いわ中二病…わたしも4年後くらいに気をつけておかんと…中二病に感染する前に死んどるから感染するかもしれない…

「アリシア、わたしは普段ひまやから、いつでも家に遊びに来たらええ。ほれ、バルフィニカスにわたしの住所送つといたで、それで来れるやろ? 楽しみに待つとるで!」

「うん! 絶対に行く!! チャキーン! わーい、ママア!!! 友達にお呼ばれたああ!!!」

アリシア、いくら嬉しいからってここで叫んでも…家におけるプレシアさんには届かへん d…… 「良くやったわー!!! アリシアアアアア!!!」 どうして届いたああ!? なんや今の! 『母の歓喜の叫び O. J. T』 かああ!? 次元跳躍魔法の一つかああ!?

「ほな、わたしらは帰るなクロノさん。今日はずっとも楽しかったで!」



「それは良かった。F4Uに僕の連絡先を送っておいた。魔法の練習がしなくなったらいつでも連絡してくれ。なかなか艦を離れることは出来ないが、迎えに行くことぐらいはできそうだから。ああそうだ……はやて。日曜日は何か予定はあるか……？」

「？ 特に何もあらへんけど……なんかあるんか？」

「フツ、それはちょうど良かった。午後1時に迎えに行くから家で待っていて欲しい」

「なんや、クロノさん。答えになってへんで？」

「なんやろ？ 聖王教会がらみか？ それにしては連絡したようには見えへんかったし、対応が早すぎる気がするんやけど……」

「約束しただろう、翠屋にデートのお誘いだよ、少し色々な場所をまわってからね。その時とはびきりのプレゼントをしようと思う。楽しみに待っていてくれ。じゃあ僕は仕事に戻る。また日曜に…楽しみにしている」

「なっ……………!!」

「「「「キヤアアアア!!デートのお誘い(なの)(でござる)!!「「「」

「「うう…クロノ…、ホロリ。息子が嫁フラグの為に全力を出すようです」

第十（悲） 惨話 幕間 そのころのヴィータちゃん

今ここに！ヴィータちゃんの非常に残念な物語がはじまる。

『ハ、ハヤテエエエ  
!?!?』

魔法少女      リリカル      おわた      o r z

第十（悲） 惨話      幕間      そのころのヴィータちゃん

「ヴィータちゃん？ちよつとリインと一緒に買い物に行くけど、一緒に来る？」

「えー、ヤダ。家でゲームしてるほうが百倍マシ。買い物行くならアイス買って来て、バーゲンだつちゆのイチゴ味ー」

「ふむ、なぜそんなに外に出るのが嫌なのだ？ここは魔法も危険も何もない平和な国だ  
というのに」

「パソコンの中のほうがよっぽど楽しい。二次元の住人にアタシはなる！」

「しかたないわ、リイン。行きましょ？今日はお魚にする予定なの。商店街で良いお魚  
ないか一緒に見てもらえるかしら？」

「うむ、構わん。魚といえれば刺身なるものがあると商店街の魚屋の主に聞いたことがある。何でも生魚を食べるそうだ……」

ふっふっふ！さっさと出て行けー！アタシにはしなきゃならねえ事があるんだよ！  
この時を……この時を待っていたああああ!!!

「うへへへへ。誰もいなくなつたー！コレでハヤテに取り上げられたアタシの18禁同人誌を回収できる！ふへへへへ〜」

待ってろ！アタシの同人誌!!今すぐ取り返してやる!!

「とりあえずハヤテの部屋に来たは良いものの、どこに隠したんだーハヤテ？とりあえず…ベッドの下から確認だああ！へっへっへ！アイゼン！よつと…ゴソゴソ…やつぱり何かあるぞー！アイゼンに引つかかって出てきたらいいなー」

　　こういうベッドの下にはえっちな本が隠してあるはずなんだ！あんな物凄なおっぱいマニアのハヤテが一冊や二冊持つてない訳がない！そうに決まってる！今こそその時だアイゼン！ハヤテに今までの仕返しをしてやる時がきたんだ！ラテーケンハンマー！

「何だコレエエエエエ!!!ガビガビになった水風船みたいなヤツウウウウ!!!これってアレだよな!?!アレなんだよな!?!なんでこんなところにいいいい!!!」

「ハッ…もしかして……………(ヴィー・タちゃんのエ・ケ・ナ・イ・妄想♪)……大人だよお…ハヤテエ…まさか…あんなことやこんなことも…経験済みだなんて……………」

ハ…ハヤテ…アタシの予想の斜め上をバレルロールしてカツ飛んでいった…無理だよ…アイゼン…アタシがハヤテに敵うはずがなかったんだよお…

「ハッ!?気が付いたら1時間もぼーつとしてた!今のうちに同人誌回収しないと…コレ

は…ハヤテの机の上にそつと置いておこう…」

うん。アタシは何も見なかった。

「次はやっぱり本棚だ！この本棚の後ろとか…おりやあ！お！やっぱり何か落ちてるぞ！これは…本だ！ちよつと遠くてわからねえけど…よおおいつしよつと！」

へっへっへ！コレでハヤテの趣味をみんなの前でブチまけてやる！アタシの同人誌を奪った罰だ！かなり埃被ってるなこれ…さてさてどんな本がハヤテの趣味なの…か…

「うぎやあああああ  
!!!!!!!」



「む…無修正…の…ハードポルノだ…うわ……」

ハヤテ！マジハヤテ！アタシなんか子供じゃねえかよ…うわー、こんな風なんだ…うわーうわー……」

「これ。もって帰ろ…」

「気を取り直して最後は庭にある納屋の中だ！へっへっへ！ここが一番アヤシイところ  
だけ！いざ！戦場に逝かん！ハヤテの秘密を大暴露なのだあああ!!!」

「意外と色々入ってるんだな…よつと、ん。扇風機の空箱に…1mケピイちゃん人形…  
スワンボートに…スワンボート!?なんでこんなところにあるんだよ！何に使うんだよ!?  
あと、乗馬用ムチ…まったく意味がわかんねえ……ん?なんだこのリュックサック…コ  
レだけ結構新しいぞ?」

最後に当たりを引いたみたいだな！クッククック…ハッハッハッハッハ!!ハヤテ！残  
念だったな！アタシの騎士としての勅の前ではハヤテの秘密もはや風前の灯だけ！

「ハヤテの部屋にブチまけてやる！帰ってきたときのハヤテの顔が目には浮かぶぜ！」

「びぎやあああああ  
」

!!!!!!!

「縄にロウソク…納屋にはムチ…ハ…ハヤテエ…大人すぎるよお…え…SMだなんて…」

「ただいまー。ヴィータちゃん、いい子にしてた？ちようどはやてちゃん達と一緒に帰ってきたの。今からすぐに夕飯作るから待っててね？」

「う、うん。おかえり、ハヤテ…」

「ヴィータどうしたんや？調子悪いんか？わたしはちよつと部屋に戻って着替えてくるわ。シグナムー手伝ってや？」

「どうしたのだ？ヴィータ。何かあったのか？家を出る前と様子が違いすぎるぞ？」

「いや、ちよつと……」

「なんやコレ!?!なん…本棚が動い…や?」

「……て殿、この…ソクと、縄…一体なん…ござるか?」

「ん?なんで…屋に置い…避難用…ツクがここに…ねん?」

「アタシも少し大人になっただけさ…」

「いったいなんのことなのだ?」

「フンツ!フンツ!びたんこ張ったらズッコンピー!」



第十四話 幕間2 くはやての日記 もう、わたしは無  
理やくより

ちよつと今までわたしの周りに出て来た人のせいりでもしとこうか。  
正史とかけ離れとるから混乱してしまうで。

『魔窟海鳴のカオス具合がようわかるわ…』

魔法少女      リリカル      おわた      o r z

第十四話 幕間2 くはやての日記 もう、わたしは無理やくより

明日から待ちに待った『魔法少女リリカルなのは』が始まるで！この五年間寂しかったわー。でも明日からはちがうで！わたしは文字通り生まれ変わったんや！でも…なんですすかちゃん図書館におらへんかったんやろ…

あかん。昨日の日記みよると涙が止まらへん…わたし、なんか悪いことしたんかな…涙が…ほとぼしる…

『シグナム』種族…ニート侍

バトルマニアなんは変わつとらんけど、見た目はまんま流浪人やな…。夜天御剣流つちゆうパチモン臭い剣術の使い手で、私の周りでは『比較的』マトモな人物やな。恭也



さんとは殺し愛をする仲やで。得意技を聞いたら龍槌一閃って答え取ったけど…魔力使わずに大木を叩き切ったのを見て、やつぱり思うた…人やない。

『シャマル』種族…ありえへん料理

ただの天然さんや、凄くマトモやで！腹黒やなくてホンマ助かったで。ブレーキが付いとらんわたしの家族の唯一のストツパーや。ほんまいつも感謝しとるで。料理も見た目がカオスなくらいで味はメガ美味や！たまに塩と砂糖を間違えとるけど…。最近 はプレシアさんと桃子さんとリンデイさんとママ友？会をしとるみたいや

『ヴィータ』種族…むつつり娘

わたしの頭痛のタネや…。ゲートボールどころか家から一步も出えへん。PCイジるのが好きみたいでサブカルチャーにドはまりしよんねん…ヴィータの部屋は同人誌で溢れかえつとる…。あと、ヴィータから没収した18禁同人誌は今朝の資源ゴミに一直線や。捨てるのもあまりに恥ずかしすぎて、狼になったザファイラに出しに行ってもろうたで…

『ザファイラ』種族…アホガチムチ

人の話の途中に平然と割って入って場を引つかき乱す生粋のKYや。好きな言葉が筋肉とか言つとつた通り、体を鍛えるのが趣味や。行動は意味不明の一言で分かつてもらえらと思うけど、コメコメ波を撃とうとしたり格ゲーの技を練習したり…CMのマネをしたりしよる。一つ気になんのは、魔力も使わずになんでキャンセル技や空中ダツシユ出来んねん！物理法則に真つ向から喧嘩売つとんか!?!あと、リア充や。爆発しろ。

『リインフォース』種族…バーニング小娘

リインも『比較的』マトモな人物の一人や。ただ、ニタニタ動画が好きみたいでバーニング修像の大ファンみたいや。一日3時間バーニング動画で燃えとるみたいやけど…うっさいわ！ちなみに昨日は一日中教祖様ダンスしよつたで。「るー!!」ってな、非常に動きがキモかった。もはやただのニタ厨や！

「あはは…わたしの家族終わつとる…もう、ゴールしてええよね…」

「ギル・グラハム」グラハムさんや！

正史どおりに進んだらと思つとつた思い込みから激しい衝撃を受けた人や、なんてことない。ただのフラッグファイターや。ジャンボジェット言つとつたけど…変形とかせんやろな？グラハムスペシャルとか変態機動しとる可能性はある！絶対！日米国際線のエースパイロットやで。ほんまにこの人がおらんと世界が回らんな。

『高町 士郎』士郎さん、なのはちゃんのお父さんや

見た目が高校生ぐらいにしか見えへん以外は非常にマトモな人や。この魔窟海鳴の良心的存在で、シグナムのかよつとる道場の主や。包容力のあるステキな男性や。非常に悲しいことに、普段は翠屋からほとんど外に出てこん…エンカウント率が非常に低い…伝説のポケモンみたいな人や

『プレシア・テストアロッサ』プレシアさんやな

アリシアがおることで狂気に走らんかったみたいや。フェイトちゃんとアリシアを溺愛しとるみたいでどこからともなく声が聞こえてくるときがあるで、きつとこの人には次元なんてものは最初からなかったんやな。ただ、たまに見え隠れする正史通りの狂気が怖いで…フェイトちゃんからの着信音とか…

『アリシア・テストロッサ』自称、わたしの最高の親友「シャキーン!」

ん!?なんで効果音入った!?もう、どこから触れてええやら…訳のわからん効果音に然り、復活の理由しかり、レヴィ化しとることに然り、フェイトちゃんの生まれた理由に然り…。まあ見たとおりのアホの娘やけど、とつてもええ子やで!一応、自称やのうてホンマにわたしの親友やで。そんなこと恥ずかしくてアリシアには言えへんけどな。初めての友達やし…もつと一緒に遊びに行きたいとおもつとるd「ママアアア!!!今、はやてが親友だつて日記に書いてくれたああああ!!!」なんでわかるんやああああ!!!お前の叫びも次元を超えるんk「よくやったわー!!!アリシアー!!!」もうええわ…

「今日はこの辺にしとこ…最後の意味分からん事態にわたしのSAN値が直葬や…。ん?なんやこの机の上に置いとるピンクの塊…?」



「もう。怖いものなんてない。この世のすべてを部屋に置いてきた」

「二」「ヴァイターのヤツ…無茶しやがって…」「三」

第十五話 「こうなつたら：忍法！お色気の術！」ウ  
ホツ、ええ乳や。揉んでええか？

衝撃とともに始まった私の魔道物語。

目の前に現れたるは、史上最強の女の敵！ここは一致団結、みんなで戦うんや！

『汚い！さすが忍者汚い！』

魔法少女    リリカル    おわた    o r z

第十五話 「こうなったら…忍法!お色気の術!」

ウホッ、ええ乳や。揉んでええか?

「あかん、はよ着替えんとクロノさん来てしまっうで!うう…なかなか決まらへん…もうすぐ夏やしな…そろそろ軽く露出度高めのカッコの方がええんかなあ…」

その方がクロノさんも意識してくれるかもしれへん…おお!乙女しよるなわたし!



そうや！初デートに気合入って何が悪いんか!? 命短し恋せよ乙女や！

「いつそのこと…この勝負下着で…クロノさんを悩殺…ゴクリ…」

「ハア…ハア…黒のレースの下着と…背伸びする少女…イイ！」

!?!?

なんか変な言葉聞こえたで!? 気のせいか…?

「と…とりあえず…この下着を…」

「おふ！エロティシズム溢れる下着少女 k t k r！使用済おぱんちゅゲットだぜ！」

「だっ…誰や!?!」

気のせいやない!見えへんけど、誰かおる!なんや!誰や!わたしのエロスを見てええのはクロノさんだけやで!あとわたしのパンツ返せや!

「しまった!興奮しすぎて息が殺せなかった!……:ファファファ。よくぞ気が付いた!トウツ!」

「に…:忍者!?なんで忍者がわたしの家におんねん!思いっきり叫んどつたやないか!こつちみんな!えつち!」

「ブフォ!えつちいただきました!結界展開!N i n n j aタイムはいりまーすww  
w」

「ひっ…:こつちくん!手えワキワキさせんな!ばか!えつち!へんたい!誰か!シ  
グナムー!ヴィーター!」

「無駄ナリよwwwこの結界は特製の結界だから破れるものはほとんどないアルヨ  
www」

「あ…ああ…やや！こつちこんでえな…」

「まずは…手始めに…ぱいたーつちwww吾輩の揉みポの餌食でござるーwww」

「やあや！やあや！ひつく…ばか！ばか！」バシツバシツ！

「ありがとうございます！ありがとうございます！www我々の業界ではご褒美ですw  
ww少女のビンタ、気持ちEー！」

「シャマル！結界の解除はまだでござるか！飛龍一閃！クソツ！声だけ聞こえるとは非

常に悪趣味な結界でござる! いざとなったら家ごと結界を叩き切る!」

「ハヤテー! ハヤテー! シヤマル! 早くしないとハヤテが! ハヤテが!」

「だめ! こんな複雑なミッド式結界見たことないわ! あと3分はかかる! はしって! クラールヴィント!」

「筋! 肉! 全! 開! バリアブレイク!! クソツ! これでもダメか! ハアア! テオアア!!」

「諦めるな! ここで諦めてなんの守護騎士か! その血をもって染め上げよ! ブラッディーダガー!!」

「いったいなんの騒ぎだ!! どうしたんだ!?!」

「[[[[クロノ(殿)(アニキ)(媚殿)]]]]!!」

「!! この結界は…まさかヤツか!? 僕に任せてくれ!! S4U! 量子化転送開始! 強襲用特殊近接仕様!」

【SystemBootstrap. TRANS—Assault. Mode.】

「逃げてばかりじゃダメナリよ、フヒヒwww忍法! 亀甲縛りの術www裸に荒縄…ハナチブwww! ロリコンには刺激が、つ・よ・す・ぎ・るwwwみ・な・ぎ・つ・て・キターwww」

「あう…う、動けへん…」

あかん!もうダメや…わたしはこんな汚いニンジャに犯されてしまうんか…汚されてしまうんか…ごめんなクロノさん…わたし…ほんとは…クロノさんのこと…

「うう…えぐつ…うわーん!クロノさーん!たすけてー!」

「残・念・で・すたー☆w w w初ピンポンいっただつきまー」そこまでだああああ!!!!  
「ナ、ナンダツテー!」

「指一本触れさせてたまるかああ!!はやては、僕が守って見せる!」

「貴様は…クロノ・ハラオウン!なぜここがわかったああ!!クツ…忍法!」

「無駄だツ!ここはツ、僕の距離だ!ウオオオオオオ!!ライザアアソオードツ!!!」

「ク…クロノさん…ど、どうやってここに…」

「はやて！大丈夫か!?今度は逃がさないぞ！S級広域次元犯罪者！」

ユーノ・スクライア  
!!!!

第十六話 「ミッドチルダn i n n j aなんばーワン  
www」許さへん…絶対にや!!!

衝撃とともに始まった私の魔道物語。

目の前に現れたるは、史上最強の女の敵…ここは一致団結、みんなで戦うんや！  
『みせてもらおうか、管理局執務官の性能とやらをwww』

魔法少女 リリカル おわた o r z



## 第十六話 「ミッドチルダ n i n n j a なんばーワン w w w」

許さへん…絶対をや!!!

「なぜここにいる…宿敵、クロノ・ハラオウン。この間まで第57管理世界にいたはずの貴様が…なぜここにいる!…木の葉隠れくおばんちゆの舞うで確かに巻いたはず w w w」

「誰があんな変態忍術くらうか!?!舞と巻いたをかけて上手い事言つたつもりか!?!ここに用事があつただけだが、丁度いい。今日こそ貴様を捕まえてやる。それが僕の執務官としての仕事…いや、はやてを襲つた報いとして、だ!!」

「この第97管理外世界に執務官が来ているとは予想外ナリよ。ここは一度引かせても

らうwwwだが！この星の魔法少女のおばんちゅをコンプリートするまでは！死んでも死にきれんwww死んでも神様転生か？wktkwktk！」

「この次元変質者があああ！逃がすかつ！スナイプショット！アクセル！」

「ちゃきーん。ユーノは『次元変質者』の称号を得たwwwうはおk把握www少女よ！今度はその装備したスケスケおばんちゅ頂きに参るwwwばいびーむ☆」ドロン

「クソツ！逃がしたか！はやて、大丈夫だt「ヒシツ」うわっ

「うう…えつぐ…クロノさん…わたし…わたし…」

「……すまない、遅くなって…」

「ううん、クロノさんはちゃんと助けてくれたで…わたし、もうダメかと…ひつく…」ピ  
トッ

「は、はやて!? 離れてくれ! 服を! 何か着てくれ!」

「いやや! 離れんで! クロノさんになら見られてもええもん!」

「「「無事か!! 主はやっ……………」」」

「あらあら、はやてちゃん…クロノさん押し倒しちゃって…」

「あ…あれが騎乗位…やっぱりあのピンクの塊は…」

「おお……これが…例のミリオン動画の…」

「勇者が囚われの姫を救い出した感動の場面だ。邪魔をするのは悪い…皆、居間にもどるぞ。KYにならんうちにな。フンツ！フンツ！」

「そうでござるな。では、はやて殿。しつぽりと楽しむでござるよー」

あかん！勢いで押し倒してもうた！でも、ええ機会や！女は度胸！せ、せめてちゅうくらいは…八神はやて！転んでもただでは起きへん女やで！？それにしても変態忍術…ユーノ君いなくなったら即消えてもうたわ。そしてガチムチ、ようやった。今日はペディグリーチャム好きだけ食うてええ！

「クロノさん…わたし…ええよ？…わたしをあなた色に…黒に…染め上げて…」

「はやて!? ストップ! ストオオツプウウ!!! 君たちも勝手なこと言わずに助けてくれええええ!!!」

「まったく、悪ふざけも大概にしてくれ…寿命が縮むかと思った…」

「あはは、ごめんなクロノさん。でも、クロノさんも悪いんやで? あんな状況、女の子は盛り上がってまうに決まっとるやないか」

「…そうゆうものなのか?」

「………………。この鈍感ヒーロー」ボソツ

「ん？なにが言ったか？」

「なんも言うてへん。…………もうこつち向いてええで。ちゃんと服着たわ」

「そうか、ではそろそろ行くとしようか。なんだかんだで約束の1時を30分も過ぎてしまっている」

「…………なんも言わへんのか…………うん。ところで今日はどこ行くんや？他んどこもまわる言うとったけど、わたし車椅子やから遠くまで行けへんで？」

「フツ、そのためのプレゼントだ。F4U、さつき送ったプログラムを起動してくれ。起動した後は、僕のS4Uと同期状態を維持しててくれ」

「おーけー。ぶろぐらむ、すたーてつど」

「ん？なんや？プレゼントって魔法か？わたしまだ魔法ろくに使えんで？」

「大丈夫だ、S4Uを介して僕が維持している。はやて、自分が立っているイメージはできるか？」

「歩く感覚はようわからんけど、そんならいなら出来る…おわっ!!!」

「よっと…危ないな、突然立ち上がるから倒れるところだった。ふむ、やはりまだプログラムが甘いか…」

「ク、ククククロノさん!?!わたし！自分の足で立つとる!!!」

「やはりな…リインフォースから聞いたよ、夜天の書の初期起動のためにリンカーコアを酷使しすぎて足に麻痺が起きていたようだね。この魔法は身体強化魔法を基に、足に対して集中的に強化を施し、それを思考制御することで、はやてが立てるかもと思いが作ったんだ」

「わたし…わたし…」

「一人で歩くのはまだ危ない、僭越ながら僕が支えになろう。さあ、はやて。

散歩に行こうか」

「……………。うん!!!」



「そうだ、伝え忘れていたことがひとつある」

「？ なんなん？」

「はやて。その服、とても君に似合っているよ」

あつ……今、わたし……殺されてもうた。

このタイミングで言うなんて……

第十七話 「おばんちゅ抱いて、溺死するwww」東京湾  
に沈しろやああああ  
!!!!

衝撃とともに始まった私の魔道物語。

目の前に現れたるは、史上最強の女の敵！ここは一致団結、みんなで戦うんや！  
『デュフフwwwこんにちは。今日もいいおばんちゅ日和ですねwww』

魔法少女  
リリカル  
おわた  
orz

第十七話 「おばんちゅ抱いて、溺死するwww」

東京湾に沈しろやああああ  
!!!!

「ふふふ…えへへ…クローロノさん」

「ん？なんだい？」

「呼んでみただけやー」

「フツ、非常にご機嫌みたいでなによりだ。しかし今日は見事に天気がいいな…このま

ま海鳴海浜公園まで行ってみないか？」

「わたし、クロノさんと一緒ならどこへでも行くで!!」

まさか、もう歩けるようになるとは思わなかった…夜天の書が起動してから確かに足の麻痺がなくなってきたる人は気付いたけど、リハビリにはまだまだかかるもんじゃないか…と思ったわ…まったく、この人はなんでこうもイケメンなんや…性質が悪いとか…。どないしよう、他の女の子にも手えだしたら…ダメや許さへん。クロノさんOH ANASHIやな。うん。なのはちゃんに手伝ってもらって10本耐久スターライトブレイカー訓練や」

「……はやて、なんで突然僕にOH ANASHIなんだ？スターライトブレイカー食らうほどの何かをやらかしてしまった覚えはないんだが……」

「あら、いややわー。女の子の思考を読むなんて…クロノさんのえっちー!」

「うっ……。僕が思考を読んだんじゃない、口からダダ漏れだったただけだ……」

「……………てへぺろ☆」

まあええわ！しっかし、まさかユーノ君があそこまでヒートアップしるとは……思わなかったで、誰も。きつと淫獣淫獣言われとつたから開き直つてもうたんやな……ユーノ君……。最初に出てきたとき、口元隠しとつたし、あまりにキャラが違いすぎてわからへんかったわ……。それにしても『S級次元犯罪者』ねえ……あのユーノ君なら強制猥褻罪とか……普通にありえるな。

「ところでクロノさん、さつき言つとつた『S級広域次元犯罪者』ってなんや？Sつて言うくらいやし……殺人とかしとんのか？」

「いや……実は、次元犯罪者の区別は危険度ではないんだ……S級つてのは、その……『セクハ

ラ級』のSなんだ…」

「……………しようもないへっばこ犯罪者つて訳やな…。なんやねん、セクハラ級広域次元犯罪者つて…」

「このS級広域次元犯罪者を放置しておくと……………あまりにもミツドの品格を疑われてしまうことから、全執務官に対して最優先事項として処理しろという通達が出ているんだよ…正直、僕はアイツに二度と会いたくないんだが…」

「ワーカーホリックのクロノさんが仕事したくない…やと…!?どんだけや…汚い!流石忍者!汚い!」

「うっひはーwww」

「あの声は!!!」

「そこのお嬢ちゃーんwwwおぱんちゅ見せてくれませんかーwww」

「おぱんちゅ??僕のパンツが見たいのか?なんで?」

「ウヴオアアwww!無垢な幼女ktkr!その金髪幼女、お兄さんと遊ばない?  
今なら飴ちゃんあげるよーwwwデユフフwww」

「飴ちゃん!?ピキーン!飴ちゃんくれるの!?わーい!!」

「ちよつとそこの公園の茂みの方へ行こうねーwww」

アウトオオオ!!!あかん!あかんあかんあかん!お巡りさーん!!!犯罪者やあああ、

犯罪者がここにいますううう!!! はよう捕まえたってやああああ!!!

「クロノさん!!! あそこ!!! あのアホアリシア! 何、不審者に着いて行こうとしてんねん!」

「もはや、奴はなにを仕出かすかわからない! 一撃で沈める! ウオオオオ!!!」

「うひっwwwみちゅかってもうたwww」

『「私のアリシアに触らないでええええ!!! サンダアア、レイジイイ!!!」 O. J. T. !!!』

「うぎやああああ!!!」



「ほえ？なんでここに我が親友、銀河美少女★はやてがいるのだ!?ガガツキュピーン！」

「クロノさーん!!!ク、クロノさんが巻き込まれてもうた…。このアホアリシア！あれだけ変な人には着いて行ったらあかんって言うたやろ!!」

「うう、はやて、ごめんなさい。シヨボン」

「全く…気いつけえや？あそこにおる変態みたいなんが世の中にはおるんやから。さつきわたしも危うくあの変態の毒牙に掛かるとこやったんやで？」

『「アリシアはいつだって私に優しかった!!あなたはやっぱりアリシアの偽物よおおお!!!だからあなたはもういらぬわああああ!!!どこへなりとも、消えな  
さあああ!!!」』

「びぎやああああ!!!」

「あ、よく見るとフェイトがあそこにいる！チュピーン！ところではやて！その可愛いカッコ…まさか…おデートか!?僕との関係はお遊びダツタノネー！ピシャーン！」

「プレシアさんはいつもの事として、フェイトちゃんまでやってくるとは思わなかったで。しかもええ感じに二人とも壊れとるみたいやし…そしてあんたとわたしの関係っていったいなんやねん！そ、それに…デ、デートとか…か、関係あらへん…これは…普段着や!!!」

「嘘はいけないぞ！このあいだデートの約束を銀河美少年としていただろ！ジャキーン！しかもその服は、おととい僕と一緒に買い物に行ったときにこつそり買った服じゃないか！ゴゴゴゴゴ！」



「ちよいとフェイトちゃん。なんでクロノさん巻き込んだかOHANASHIしようやないか、ついでにバグった理由についても説明してもらおうか」

「えええええつと…あの、その…ちがうんだよ!?丁度クロノが変態の陰に隠れて見えなかっただけで、私とアリシアのはやてを取ったからとかそんなじゃなくて!はやてがかまってくれないからヤツ当たりにとかそんなこと全然思っでないよ!?それよりはやてはなんで立てるの!?!」

「…フェイトちゃん、限りなく本音がダダ漏れや…誰があんたらのはやてやねん…。クロノさんのお蔭や、魔法で立たせてもらつとる。まだ自力ではリハビリせなん立てんから学校へ行くんはもうちよいかかるけどな」

「なんだかよくわからないが…僕が悪いのか？」

「銀河美少年！このやろー！はやてを返せー！バキューン！」

「ぐっひひーwww吾輩にとつてはさっきの電撃はご褒美ですwwwドMばわー全開wwwいまじゃ、忍法！風魔手裏剣くはためくスカートと秘境おぼんちゆくwww」

「「きやあああああ!!!」」

「なっ……!!!」

「ぶふおああがががwwwwww!!くあwse drift gyふじこーp……」

「フェイトちゃん……なんでパンツはいとらんのや……」

「だってアリシアが……フェイトはパンツだから……パンツがパンツをはくのはおかしいって……あう、みられちゃったよう……」

「だってフェイトはパンツだろ？あれ？ちがうの？」

「僕は何も見えていない僕は何も見えていない僕は何も見えていない僕は何も見えていない……」

「我が人生。一片の悔いなし……フヒツwww」

第十八話 「うえええええん!! もう元の世界に帰るううう!!」なのはちゃん…その気持ち、わからんでもないで…

衝撃とともに始まった私の魔道物語。

目の前に現れたるは、史上最強の女の敵…ここは一致団結、みんなで戦うんや!

『なのは…僕は、君に…どうしても言いたいことがあるて、海鳴に來たんだ…』

『ユ、ユーノ君? な、何よ、今頃…もう遅いな。私たちの関係は始まらなかったの!』

魔法少女  
リリカル  
おわた  
o r z

第十八話 「うええええん!!もう元の世界に帰るううう!!」

なのはちゃん…その気持ち、わからんでもないで…

「いやあ、でもはやて。歩けるようになってよかったね!あ、クロノ。支えるの私が代わるよ、だから私のはやてと腕組むの…やめようか?はやて、あそこにクレール屋さんがあるよ!行ってみようよ!」



「し、しかしフェイト……」

「ふふふ……どうしたの？ クロノ。あ、わかったあ……非殺傷設定の限界ってどこまでか、身を持って受けてみたくなっただね？」

「すまないはやて。僕は無力だ」

「おいコラ、何勝手に着いて来とんねん、アリシアはどうした。誰がアンタのはやてや、目のハイライト勝手に消すな。あと、クロノさんも諦めんの早過ぎや」

「はやては私のだもん！ やつと……見つけた私の心の支えだもん！ クロノなんかには……渡さないんだからー!!」 「ガガガシユン！」

「わかったわかった！ わかったからバルディツシユを振り回さないでくれ！ バルディツシユも、なんでライオットザンバーになってるんだ！」

「Sorry」

「フエイトちゃんの腹ん中がもう、驚きの黒さやで…ああもう、こうなったらしやあない  
…ノーパン娘!さっさと行くで。デート邪魔するんやからクレープのひとつでも奢  
りいや」

「もちろん!あ、アリシアは今日翠屋JFCの試合があつて、汗かいたから一回家に帰つ  
てお風呂に入つて翠屋に来るんだつて」

「アリシアも来るんかいな…へえ、アリシアはサッカーに興味があるんやな?意外や、も  
しかしたら…あつちのアリシアもそうやったんかもしらんな…」

「うん…そうだったのかもね…なんでも将来シンチ・カッターワを超える選手になつて、  
自分でチームを作りたいんだつて!毎日暇さえあれば練習してるよ」

「ふむ、言い方が悪いと思うが…何と言うか…とても普通でいい夢だと僕は思う。そう  
か、アリシアも自分の夢に向かってがんばっているんだな…」

「アリシア…私がちゃんと立てるようになったら、リハビリがてらサッカーに付き合っ  
て貰おかな。将来はどこにチーム作る気なんやろな？わたしもアリシアん事、応援したく  
なってもうたで！」

「アリシアすつごく喜ぶよ！最近じゃ、アリシアの為につて母さんがサッカーの事を  
もつと知ってもらおうと色々なところに働きかけてるみたいだし…そうだ！クロノも  
応援手伝ってよ！執務官なら色々なところに行く機会も多いでしょ？」

「すみませーん。ベリーベリーストロベリークレープ、トッピングにバナナとチョコ  
レートしましたしで…って、みんな同じ!?!」

ええ話や…正史では死んでもうたけど…ここでは夢に向かつてがんばつとるなんて…わたし感動したで!私がサツカー選手アリスシアのファン第1号や!!にしても、フェイトちゃんもプレシアさんも応援がんばつとるみたいなや…ん?執務官なら?

「もちろん!僕なんかの応援でよければ手伝わせてもらおう。僕にできることならば何でも言つてくれ!なんかいいな、こういうの。凄くマトモで…」

「じゃあ丁度いいや!このデバイスをいろんな世界の人たちに渡して欲しいんだ。ただの映像投影型メモリーデバイスで、再生のみしかできないやつなだけど…」

「クロノさん、それについてはわたしも同感やで。なんやアリスシア!次元世界にサツカー流行らそうとしとるんかいな!えらい壮大なプロジェクトやで!」

「ふむ、これならほとんどの管理世界には持つていつても大丈夫だな。いくつかあるなから後で渡してくれ、できるだけ多くの世界に持つていつてあげたい。中にはどのような映像が入つてゐるんだ?」

『超次元サッカー！電撃イレブン』ってアニメーションだよ！もし気に入ってくれたならクロノも一緒にやろうよ！私もなのは最近練習始めたんだ！母さんと士郎さんがレギュレーション考えてくれてるの！』

おおおおおい!!! サッカーやのうて超次元サッカーの方か!!! まあ、魔法文化のある次元世界なら超次元サッカーの方が流行るかもしれないな…いや、意外に面白そうや…あかん、わたしもやりたくなつてもうた…このままじゃ魔法少女リリカルイレブンになつてまう!!! くらえ必殺、石化のミストルテインシュートや!!

「嫌あああああ  
!!!!ユ:ユーノ君があああああ  
!?!?!?!?」

「!?!  
な、なのは!?!」

「もつと強く!もつと激しく!もつと情けなく!!僕の顔を踏んでください!!!僕を……君  
の犬にしてくださいさああああい!!!」

「嫌なおおおお!!!足に縋りつかないで欲しいのおおおお!!!」ゲシゲシ

「ありがとうございます!!ありがとうございます!!」ペロペロ

「足を舐めないで欲しいのおおおお!!!そんな趣味、私には無いのおおおお!!!」

「この卑しい淫獣め!とお呼びくださいああああい!!!なのは様ああああ!!!」

「うええええん!!!はやてちゃん!!!助けてほしいのおおおお!!!」

「ああつ!!!なのは様ああああ!!!」

「「よ…予想GUYデス…」」

第十九話 I F 嘘予告がホントになっちゃった!魔法  
少女リリカルイレブンS t r i k e r ' S 始まります  
!

『アリシアさんの夢から始まった私達の情熱と汗と涙の物語。  
』さあ行くわよ、みんな!キックオフ!!!』

魔法少女  
リリカル  
おわた  
o r z



## 第十九話

I F 嘘予告がホントになっちゃった!

魔法少女リリカルイレブン Striker's

始まります!

「おっしや、今日から新人も入ってきて本格的に管理局機動六課の始動や! ええか、みんな! この機動六課結成の意義は、超次元サッカーを基にどれだけ局員の魔導師ランクのレベルアップが見込めるかつちゆうことや。そやから海も陸も関係あらへん、ベテランも新人も同じフィールドで戦う仲間やつちゆうことや! 新人の子達にはベテランの魔法の上手さを、ベテランの人たちには新人の柔軟な発想をお互いに学びあつてほしいねん」

肅々と進む結成式、そこには機動六課の部隊長である八神はやて隊長の姿があった。彼女は若くして一等空佐にまで登り詰めている出世頭であり、管理局が最も力を注いでいる魔導師ランクの向上及び超次元サッカーの普及の旗頭となっている。あれ? 次元サッカーなんて前あつたっけ?

「今回、試験運用つちゆう名目で管理局内にこの機動六課を作る際の、本局並びに地上本部、聖王教会の幹部の皆様方のご協力、誠に感謝しております。特に、レジアス中將にはこのように広いサッカーフィールドを借り提供する隊舎をご用意いただき、そのご厚意には部隊一同を代表して謝辞を述べさせていただきますと思います」

と、とりあえず、超次元サッカーとは、現在ミッドチルダにて流行の渦を巻き起している、第97管理外世界発祥のスポーツである。魔法を駆使し、ボールを相手側のゴールに入れると得点となり、前半45分後半45分の計90分間に多くの得点を取っ

たチームの勝利となる。もともとこのスポーツはここ数年に始まったスポーツであり、今ではインターミドルチャンピオンシップに並ぶ一大イベントである。私もスバルと何度かスタジアムに足を運んだことがあった。

「では、あまり長い話してもしゃあないので、ここに…機動六課の結成を宣言します！」  
パチパチパチパチパチパチ  
!!!!

壇上から降りる八神部隊長。流石の彼女でも部隊の隊員、管理局幹部たちを合わせた総勢1000人を超える人達の前での演説は厳しかったのか、額に汗が浮かんでいた。

「あかん、もう漏れそうや…、すまんフェイトちゃん、ちとトイレ行ってくるわ」

「なんで開会前に行かなかったの!?!はやてやっぱりバカでしょ!?!」

そこにいたのはなぜか締まらない部隊長だった。

「あの…フェイトさん…? 私の事…覚えてますか?」

「ティア?もしかして…私の補佐だったティア?」

「はい!よかったあ…フェイトさんもやつぱりこっちに来ていたんですね!なんだか兄さんは生きているし、スバルの様子がちよつとおかしかったので心配になっちゃって…」

よかった!こんな変な世界でフェイトさんだけは私の事を覚えててくれたんだ!

「お兄さん生きてたんだ！よかったね…うう…」

「な、泣かないで下さいよフェイトさん！でも、いったい機動六課はどうなっちゃってるんですか？私は、この機動六課でまた訓練を積んでフェイトさんの執務官補佐になりたいと思ってきたんですけど…レリックはいつたいたいどうするんですか？」

「あはは…ティア、世の中にはね。知らなくていいこともたくさんあるんだよ…」

「フェ、フェイトさん………？」

「うひゃく危なかったわ、間一髪つちゆうとこやったな。お、フェイトちゃん。ティアナにはもう会えたんか？どうやった？知り合いのティアナやったか？」

「うん！はやて。私の知ってるティアナだったよ！」

「ほーかほーか、ゲンヤさんもわたしの知つとるゲンヤさんやったし、あとはヴィヴィオとウエンデイがどうなつとるかやな」

「えっ!?!ヴィヴィオにウエンデイ!?!八神隊長!?!いったいどうなっているんですか!」

「あははーティアナ、あんま気にせんでええよー。ある程度は元の歴史通りつちゆうことはわかつとるんやけどなー、詳しくは私にもわからん…一つ言えるんが、スカリエツティからの挑戦状が管理局宛に届いたんがこの機動六課結成の理由の一つになつとるんや」

「スカリエツティ!?!」

「ティア、今から部隊全員を集めてブリーフィングルームで説明するから、そこで詳しく話すよ」

八神部隊長も知ってる？ロストロギア暴走と何か関係があるのかもしれない。いったいどうなっているのだろうか。

「では、今からブリーフィングを行うで！各々席についたってやー」

「フンツ！フンツ！コオオオオ…、そうだ。その呼吸法こそが波紋エネルギーと言って召喚する際に召喚獣に対して、強力なブーストを引き起こすことが出来る…」

「このチョコポッドってやつギガ美味いなー、なあスバルー。あとで売ってる店教えてくれよー」

「やはり剣を振るうには、手首の返しと体重移動が重要なのでござるよ。槍とて同じことにござろう。拙者でよければ指導させてもらおうし、ここにはゼスト殿もいらっしや

る。エリオもすぐに強くなれるでござるよ」

「それでねシャーリー。はやてちゃんつたら自分の旦那さんに向かって『なんでわたしの取つといたチョコケーキ食べたんや』ですって、自分が旦那さんに買ってきたケーキだったのすつかり忘れちゃってたのよ?」

「熱血、そうだ熱血が必要なのだ。みたところ、新人の中で一番状況を見ることが出来そうだが、時には自ら前に出て戦うときも来よう。その様な時に必要なのが、冷静な熱血ということだ」

「おーい、隊長きたでー。ブリーフィング始めるでー」

「」「おお!隊長(笑)」「」

「お前ら後で説教な…」



えっ……？ヴォルケンリッターにいったい何が……？リインフォースⅡ空曹……なぜかおっきいし

「私が部隊長の八神・Hはやてや、よろしゅうな。でや、おのおの手元に資料送つとしたで。中をよう見たつてや。一応そこにスカリエツテイからの挑戦状がはいつとる、それを読んでもらえればこの機動六課結成の意味が分かつてもらえるとと思うで」

「オイ、狸の王。少しはまともに部隊長をやらぬか。そんなことだから貴様はいつまでたつても（笑）などと呼ばれるのだ。フツ、やはり我が魔道神眼の前に敵などはいまい、フフフハハ……ハツハツハツハツハツハツ!!!」

「はやて、端折りすぎだよ。もうちよつと丁寧な話をしないと、新人たちきつとわからな  
いよ？まったく、はやては私がいないとダメなんだから」



罪者取り締まるつちゆう訳やないんやけど、次元世界に超次元サッカーを広めた管理局が大したことないなんて思われるのは次元管理局の名折れや！ええか？わたしら機動六課はワールドフットボールチャンピオンシップで優勝目指すで!!!」

「「「「「「オー———!!!」」」」」」

「えっ…フェイトさん。結局どうゆうことなんですか？コレ…」

「フフフ、では今から新人の教導を始める！まずは主に教導させてもらう我々の自己紹

介といこうではないか。我が名はバスターカラムיתיホワイト・T・なのは!魔道神眼の正統後継者で、次元管理局最強の砲撃魔導師である!気に食わぬやつには片っ端からスターライトブレイカーを叩きこんでやるから覚悟しておけ!

「「は、はい!」」

「なのは様ああ!!!僕にも砲撃のご褒美をくっださいwwww」

「ユーノ・スクライアああああ!!!貴ッ様!また僕の嫁の…はやての下着を盗んだなあああ!!!」

「いち、に、さ、さん、しーズドーン!ズドーン!ズドーン!ズドーン!ズドーン!

「あうん!あうん!あうん!あうん!www気持ちE!!!」

「あら、なんやあなた、またユーノ君追っかけてここに来たんか?そんなに私に会いたいなんて…もう、いややわー」チュツ

「は、はやて!? 人前でそんな大胆なこと…!!!」

「えっ…? 今、ユーノさんいなかった? あれ? ハラオウン提督って八神部隊長と結婚してたっけ? 下着…?」

なのはさんにいったい何が…!? 中二病発症してるし! 言ってること物騒だし! やってること恐ろしいし!!!

「次は私だね? 私の名前はフェイト・T・八神。はやての愛人で、いつかクロノを倒してはやてを私のものにs「勝手に八神姓を名乗んなやフェイトちゃん! ちよつと隊舎裏まで来んかい!」あはは、いやだなあはやてえ…まだ自己紹介の途中…スカート脱げちゃ

うよおおお!! ああああああ……」ズリズリ

「訳が……分からないッ!!」

フェイトさん……とりあえずパンツ履きましよう!!!!

「はーい! オラの名前はスバル・ナカジマ! ここに来ればスゲーつえー奴と戦えるって  
とーちゃんに聞いた! オラ、わくわくすつぞ!」

やはりスバルは少しおかしい。なんでこんな変な言葉遣いになってるんだろうか……  
まあ、性格的には何も変わってないし、付き合いやすいからかまわないんだけどね。

「拙者！エリオ・モンディアルと申す！背中へ背負ったこの六文銭と拙者を拾ってくれたお館様であるフェイト殿の爲にも、この身を粉にして戦い抜いて見せるでござるよ！」

エリオ……こんなに熱血だったつけ……？なんかシグナム副隊長としゃべり方酷似してるんだけど……ま、チビツ子がかんばるって言ってるんだし、私も頑張らないと!!

「次はワタシアルね。ワタシ、キャロ・ル・ルシエっていうアル。コレはワタシの非常食の「キユクル!」フリード……じゃなかつたネ。定春っていうヨ「キユクル!」よろしく頼むアル」

非常食……今、キャロ非常食って言い切ったよね……？フリードなの？定春なの？本当は

どっち……?

「わ、私の名前はティアナ・ランスターです。将来の夢は執務官になって……私的大好  
きな自慢のお兄ちゃんと結婚することです!!お兄ちゃんだけど、愛さえあれば問題ない  
よねツ!!」

「……問題しか起きんわボケ!!」



第二十話　I F　今こそ証明する！ランスターの弾丸は  
！全てを打ち抜く弾丸だあああ！「キーパーを突き抜け  
ゴールへ…だと!？」

アリシアさんの夢から始まった私達の情熱と汗と涙の物語。

『なんで…お話し聞いてくれないの…』

『うわああああ!!クロスファイアー!シュートッ!』

魔法少女 リリカル おわた orz

第二十話 I F 今こそ証明する!ランスターの弾丸は!

全てを打ち抜く弾丸だああ!

「キーパーを突き抜けゴールへ…だと!？」

「そうだ!ティア!ボールが転がるのを意識するんだ!フェイクシルエツトとオプ  
ティックハイドはこの競技最強の魔法なんだ!ランスターの弾丸は…全てを突っ切り  
ゴールを打ち抜く弾丸だ!」

「はい！がんばります！お兄ちゃん！！」

明日は私達新人の初試合だ！今までの試合はベテランの人達で行われたんだけど：特にストライカー隊のゼスト隊長：すさまじい攻撃力だわ：ハーフラインからボールごと5人まとめてゴールに叩きこんだんだから：うへえ：私達じゃ絶対に敵わないわね：ホント、JS事件の時はシグナム副隊長に抑えてもらってて本当によかったわ：

「すいまへんな、ランスターさん。幻影魔法の使い手はあまりおらんから頼まざるをええへんかったんやわ：」

「ははは、気にしないでほしいツスよ、八神さん。妹に魔法を教えるだけじゃないツスカ」



あら、ハラオウン提督……ごきげんよう。利害は一致したようね……  
《聞こえるかテイアナ君。僕がはやての気を引くからその隙に……》  
了解。ミツシヨン……スタート!!

「はやて！またユーノの奴が隊舎の中に！」

「なんや、また出たんかいな……今度は誰の部屋なんや？」

「なんでも女性隊員の下着を着用して走り回っているらしい…」

「うっひやあ…：絵的に見たないな…」

「流石に僕が女性隊舎に入るのはマズイからね…」

「そんなもうなのはちゃんに頼んで鎖に繋いでもらわなあかんで？」

《今だ!》

ええ、わかっているわハラオウン提督!

「お、お兄ちゃん?あのね…：そのお店、わ、私が一緒に行きたいな…：ダメ?」モジモジ

必殺！『可愛い妹からの上目使いおねだりびーむ♡』いかにお兄ちゃんといえど！この攻撃は無視できまい！！

「そうだね、うん。一緒に行こうか？ティアも頑張ってるみたいだし。可愛い妹の頼みをきくのも兄の義務だからね。八神さん、俺達は少し早いッスけどお昼に行つて来るッス」

「そうやな、わかりました。ティアナ、明日試合なんやからお兄さんとゆっくりして英気を養つてきいよ。午後の練習は3時からやからそれまで自由時間やでー。あなたもちつとはわたしを労わつてくれてもええんとちやうか？」

「フツ……ここに来る途中に『翠屋くミッド支店く』で君の好きなチョコケーキを買つてきた。食事の後にティータイムでもしようか」

「あら、やっぱりわたしの旦那が世界一や♡」

ぐっ  
b  
《ビツ  
b》

「ねえスバル…私きつとお兄ちゃんがいなかったらハラオウン提督の事好きになつてた  
と思うわ。あんなに私の事理解してくれた人、初めてだったもの…」

「うっひゃあ!略奪愛か!オラわつくわくしてきたぞ!!」

「略奪愛でござるか!それも一つの愛の形でござるな!」



「りやくだつあいつてなんアルか？非常食の仲間アルか？」

「キュ…キュクルー!!!」

「よし！今回が新人には初試合や！好きにやったらええ！後ろはちゃんと守つたるさかいな!!おっしや！気合入れていくでー!!!機動六課！」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

『それではただいまより！【管理局機動六課】と【NRPガッツ】の試合を開始いたし



「ティアナ！行くアルヨ！ブースト！ストライクパワー！」

「サンキュー！キャロ！」

「させるか!!!」ババッ

『おおっと！ここでスバル選手を迂回してハツテュー・シン選手と萌奈ア選手がティアナ選手に襲い掛かった！』

「ティアア！」

「くっ、スファイアシューター！GO！」バシユ！

「よっつとー！」

『ティアナ選手迎撃失敗!このままだとボールを取られてしまうぞ!大丈夫かあ!?!』

「マズイ!どうすれば!」ティアナ殿おお!!こつちでござるう!!」エリオ!!行くわよ!パス!」バシユ!

「確かにこの魂!しかと受け取ったでござるうう!!」バシツ!

「し、しまった!空中だど!?!」

『なんとおお!これは凄い!エリオ選手!空中でリフティングを続けながら手に持った二本の槍での飛行を続けております!この超次元サッカー、ボールを殴り飛ばしたりするのはOKですが、手で掴んでしまうのは反則!ゆえに空中戦を見るのは実に久しい!』

「このまま一気に本丸を狙うでござるうう!!」

「ざんねんだったブーン！ウチにも飛行魔導師がいるブーン」スパーン

「な…しまったでござる!!」

『おおっとここで部ブーン選手がインターセプト！しかしボールはキープできずにフィールドに落ちてしまった!』

「大丈夫ネ！エリオ！今アル！行くネ定春!!おりいやああああ!!」バシユーン

「キュツクブーンブーン  
!?!?!?!?」

『なんとー! キャロ選手、ボールに向かって自分のタイムビーストを投げつけたあ! いったい何をするつもりなんだあ!』

「そんなの決まってるアル! 定春! 合体ネ! 死んでもボール離しちやダメアルヨ!!!」

「ギュー! ギュグルウウウウウウウ!!!」ドベチ

「ブースト! ストライクパワー! 全開! スバルー! 今、キュクール宅急便そつちに送るアルヨおお!!」

「キュ! キュクーーーーール!?!?! ギュグエツ!!」ドゴム!

『なんとキャロ選手! 自分のタイムビーストの定春君ごと蹴り飛ばしたあ! 全然クールな行動じゃないぞお!』

「へっへっへー！ナイスパス！こうなったらオラも……本気モードだあ！！」キイイイン

【Standup Activating Combats Mode】

「どけどけえ！スーパー戦闘機人だ！当たると痛てえぞ！！」ギユイイイイン！

「「「ぎやあああああ！！！！」」」

『なんと！スバル選手！突如金ぴかに光り出したかと思うとすさまじいスピードで相手を轢き逃げしていく！恐ろしい！誠に恐ろしい新人たちだああ！』

「ハアアア！エンチャント・サンダー！スバル殿！今でござるよおお！」

「ここはツ！オラの距離だあああ！！一・撃・必・蹴！デイバイーン……」

「キュ!キュキュキュクルー!?!?!」シビシビ

「バスタアアアアアア!!」ドツゴン!

「ギュグエエ…」メメタア!

「この時を待つていたアル!!定春ううう!龍魂召喚!!ブラストレイイイ!!」

「キュ!キュツク!?!ギヤオオオオオオ!?!」

『なんて非情な技だああああ!定春君ごと技を放ったかと思えば!その定春君にも技を使わせたああ!燃える巨大火の玉ビーム電撃龍が回転しながらゴールを目指す!これは!初得点になるのかああ!?!そして定春君は生きていいのかああ!?!こんな止められるのかああ!?!』





「定春は犠牲となったのだ…。  
少しでいいから…たまには定春の事…思い出  
してあげてください…」

第二一話 「私は変な夢を見ていたの、白昼夢。そうにち  
まいない」なのはちゃん……なかつたことには出来へん  
で…

衝撃とともに始まった私の魔道物語。

目の前に現れたるは、史上最強の女の敵！ここは一致団結、みんなで戦うんや！  
『震えるぞハート！燃え尽きるほどヒート！WWW』

魔法少女    リリカル    おわた    o r z

第二一話 「私は変な夢を見ていたの、白昼夢。そうにちまらない」

なのはちゃん……なかったことには出来へんで…

「僕の！この熱い思いを！なのは様の中にぶちまけさせてくださああい！！！」ハアハア

「きいやああああ！！何か言い方からして卑猥すぎるのおおおお！！！」バシバシ

「なつなのは様あああ p r p r !!!」ドーン

「うにやあああああああ  
!?!?!?!?」バターン

「僕のフェレットが戦闘モードですよおおお!!」ジイイ

「うええええん!!!もうやだああああ!!!おーち帰るのおお!!!ズボンのチャック降ろさないでほしいのおお!!!」ジタバタ

「日中の公園でいったいなにさらしとんじやあ!!!この淫獣があああ!!!」

「む!スケスケおばんちゆはやてたん!邪魔しないでいただきたい!ようやくなのは様を口説き倒したところなのだ!今からがいいところナリよwww」

「思いつき押し倒しただけだろうがああ!!!この次元変質者あああ!!!執務官の目の前

でそんなこと、許すもんかああ!!!」

「わあ、ユーノのフェレットがズボンからこんにちはしてる…」

「ふえええええん、ふえええええん…」

カオスつてか、もはや犯罪現場や…ユーノ君がなのはちゃんにまたがって18禁なこ  
としようとしとる…そして誰がスケスケおぱんちゅはやてたんや!!フェイトちゃんも  
見たらあかん!!目が腐るで!!ほら!なのはちゃん泣き出してもうたやないか!!!クロノ  
さん殺つちやつてええで!!

「こうなつたら一度逃げて体制を立て直すしか…!忍法!水遁の術!その服をスケスケ  
にしたいく!!」

「まかせて！プラズマデイフェンサー！」バシユー

「なるほど、大量の水を一気に電気分解したんだな？さすがフェイトだ。そこまだ」そこまでや！次元変質者！この執務官クロノさんが捕まえたるで!!!」はやて…空気読んでくれよ…」

「はやてちやあああん！ユーノくんが…ユーノくんが…うえええん…」

「なのはちゃん…えらいドギツイ目におうたなあ…もう大丈夫やで？…オイ淫獣！とりあえずズボンからハミ出とるフェレットさっさと仕舞わんかい!!!」

「ああ！なのは様が泣いている！いったい誰がこんなことを…許さん!!!」

「「「お前だああああ!!!」」」

「うっひひーwwwすんまそんwww吾輩の目的はこれで達成したナリヨwwwドロン

「させてもらうでござるーwww」

「そんなk 「そんなこと許す訳がないだろ!!」 クロノさん…仕返しせんといてえな…」

「これからははやてたんのおぱんちゆコンプリートを直指すでござるーwww忍法！  
火遁の術く花火に見とれている君の胸元に手をく」

「「「オイ!!!ばかやめろ!!!」」」

どかーん！



「ひ…ひどい目にあつたわ…土郎さん、わたしチョコケーキとダーズリンな」

「全くだ…僕もはやてと同じものを」

「私はシュークリームとアイスココア！なのはは？」

「うう…あんなのユーノ君じゃないの…ユーノ君は優しくて情けなくつて…ちよつぴりMで…えつちいで…たまに押しが強くて…あれ？やっぱりユーノ君なの？」

「なのはちゃんが心の迷宮に入つとる…」

「俺はイチゴ牛乳とデラックスジャンボパフェ。リンデイ、てめえは何にするんだ？」

「うーん…じゃあ葛きりと抹茶オレにしようかしら？砂糖は10個入れてくださいね？」

「と、とりあえずなのはちゃんにはショートケーキとオレンジジュースお願いしとくわ  
「やっぱりあれはユーノ君なの！あまり変わらないの！」

ん!?なんでしれつとここにおんねん！ハラオウン夫妻！アンタら次元航空艦勝手に  
離れてええんかい!!あと、洋菓子店でなに頼んどるんや!!パフェとか葛きりとかある訳  
ないやろが!!!そしてなのはちゃん!どうしてそこに着地した!?!?!

「あはは、オーダー承りました。ちよつとまってね、すぐ持ってくるから」

あるんかい!!!

「とりあえず、アイツの目的が何であれ、一人で行動するのは危険すぎる。これからは各人最低でも2人行動を心がけるように。なのははご家族と一緒に：『気配の読める半人外戦闘民族』さんたちと一緒にユーノの奴も手出しできないだろう。フェイトとアリシアは：まあ『次元なんて私がプレシア・テストロツサの時点で最初から存在しなかった』さんがいるから大丈夫だとは思いますが：。一番危険なのは君だ、はやて」

「へっ!?!わたししか? 『おバカ戦隊! 腐ってもヴォルケンス』がおるのにな?」

「その彼らのいる家の中で襲われたから言っているんだ。アリシア、なのはについては

外を一人で出歩いていた時に襲われていることから家の中では容易に手出しができなかったと推測される。それにいざとなれば戦うこともできよう。でも、そうなるとやはり君が一番心配なんだ。戦う力もなく、逃げることもできない君が」

「たしかにそうなの。今回は私もレイジングハートも驚いちゃって戦えなかったけど、次からはちゃんとユーノ君の期待に応えられるの！思いつきりシバき倒すの!!」

「Yes. Master!」

「そうなつてくるとやっぱりはやてさんが一番心配ね…どうしたらいいのかしら…」

「んなもん簡単だろうが。オイ、クロノ！てめえが嬢ちゃん守つてやりやあいだろ、自分の女ひとり守れねえ奴が次元世界を守る執務官名乗るのは百年はええよ」

「な…:…なんやて!!? クロノさんがお風呂も寝る時も付きつ切りで新生活生活おくつてくれるやて!!? 夢の新婚生活やああ!!! お義父さんお義母さんありがとおお!!!」

「だ、誰もそこまで言つてない！父さん、なんでその結論になるんですか!!!」

「んなこと言ったってなあ…俺とリンディも似たようなもんだつたし…なあ？」

「うふふ…昔はよくクライドさんをレティからよく匿ってたわね」

「よりによつて守られていた方なんですか!!!レティ提督うう!!!」

「ぐ……ぐぬぬぬぬ!!!私のはやてがああああ!!!!」

第二二話 たまにはこんな日常や!わたしかて毎日突っ込みしとる訳やないで?

夏真っ盛り!今年はいっぱいみんなと遊ぶでー!!今までの鬱憤を晴らせてもらおうやないか!待ってろ!ひと夏のあばんちゆるる?

『もしテントの中でクロノさんと二人つきりになってもうたら…うへへ…』

魔法少女      リリカル      おわた      o r z

第二二話      たまにはこんな日常や！

わたしは毎日突っ込みしとる訳やないで？

「なあクロノさん？わたしの干しとった下着知らんか？なんか枚数少ないねん」

「それをよりによつてなぜ僕に聞くんだ、はやて？君の中での僕のキャラクターについて話したい。事と次第によつては小一時間説教がしたい」

「あ、あはは。冗談に決まつとるやないか…誰もクロノさんが取ったなんて思つたらんよ？…あかん、目がマジやった…」

「まったく…このところずっと一緒に暮らしているが、いつまで経っても君のすべてを理解するのは僕には到底無理だよ…」

「それは当たり前や。女の子の事をすべて理解できるなんて思っとなら痛い目みりで。女の子は男の子には理解できんのや」

「ふう、やれやれ。聞くのならヴォルケンリッターに聞けばいいだろう?」

「うーん。誰も洗濯物には触つとらんゆうとるねん…風に飛ばされた様子もないってシヤマルが言うとなし…」

まさか下着ドロか!?うーん…でも、下着ドロやったらじよしこーせーとか狙うんがぶつうやないか?そうなつてくると怪しいんは…

「やつぱりクロン」まあ、十中八九はユーノの奴だろうな…最近姿を見せなくなつたかと



思ったら…。何か言ったかはやて、質問に答えろ」

「い、いややわあ…あ・な・た。自分の嫁に向こうでデバイス突きつけんといてやあ…。あ、あはは…おちやめなジョークやん…」

「……………。ホントのところは？」

「ようやくクロノさんがわたしに興味をもってくれたんかと思つとるなんてことないで!?わたしの下着であんなことやこんなことを…うへへ…」

あかん!あかんでクロノさん!そんなこと…まだ朝つばらやで!?うへへ…わたし!今最高に幸せやあ…あ…あ…憧れの新婚生活(＋5)って最高やな…まるで夢の中に見えるみたいやあ…

「おーい!シャマル。はやてがまた夢の世界に旅立ってしまった。僕は仕事に行つて来

るから後をよろしく。いつユーノが来るかわからないから、はやての傍に誰か一緒にいてやってくれ」

「あらあら、はやてちゃん。また壊れちやつたの?クロノさん、いつてらつしやい!今夜はお父さんとお母さんもらつしやるんでしょ?今日は冷やし中華つてのに挑戦してみようかと思つてるの」

「そうか…できれば今日は紫色や虹色に輝いている肉は使わないでくれよ?なんていうか…たぶん父さんが見ただけで痙攣しだすと思う…」

「うーん…善処するわ!ほらはやてちゃん、今日は病院に行くんでしょ?早く準備しないと…」

「どうや？石田せんせ？最近ちゃんと動くようになってきたんやでー！もうすぐ歩行訓練に入れるやろか？」

「うんうん、順調みたいね？結局どうして足が動かなかったのかわからないままだったわね…。うう…。ごめんね、はやてちゃん。ダメなせんせえでえええ…」

「ちよ！石田せんせ！泣かんでくださいよー、せんせの所為やないでー。原因不明やつたんやから治るんも原因不明でええやないですかー」

「う、うえーん！ごめんねえええ!!!」

「やれやれ…また石田医師の号泣が始まってしまったでござるか…」

「うぬう…なぜこうも石田先生は泣くのだ？」

「なあシグナム、リイン。このあとつてなんか予定あつたか?なんか買い物せなあかんかつたような気がすんねん」

「ふむ…なにかあつたでござるか…?思い出せないでござるが何か大事な用があつた気もしなくはないでござる」

「む…?そういうえば来週、高町家の者からキャンプに誘われていなかつたか?そのため  
の買い物をしなければならぬのではないか?」

「おお!そうや!さすがリインやな、我が家で一番記憶力がええで!」

「拙者、生粋の脳筋にござるからな。3歩歩けば鳥頭にござるよ!はっはっは!」

「シグナム、そこ笑うところちゃう(ではない)」

「で、なんやねんコレ。木刀とテニスラケットがキャンプに要るかあああ!? キャンプの道具買いに来てこんな買って帰るわけないやろ!!」

「そ、そんなこと言わずに買ってほしいでござるよー! さすがに街中でレヴァンティン抜く訳にはいかないでござるよー! いつ次元変質者が出るかわからないでござるよー! けっして拙者が欲しいからという訳ではないでござるよー!」

「そ、そうなのだ! いつ次元変質者が現れてもいいように準備を整えておくべきなのだ! そのラケットを装備したらバーニングのように熱く速い戦士になれそうなのだ!」

「シグナムもリインも本音がダダ漏れやああ!! いいからもあつたとこに返してこんかい! お母さん許しまへんで!」

「ならば!そのカゴの中に入ってるワイシャツは何でござるか!いったい誰が使うんでござるかああ!!」

「そ、そうなのだ!婿殿が使うにはサイズが大きすぎるぞ!いったい何の目的で購入するのか聞かせるのだああ!」

「そんなんわたしがクロノさんに対して肌ワイで迫る為に決まつとるやろうがあああ  
!」

「お客様方、周りの方の迷惑となりますのでもう少しお静かにお願ひします」

「す…すみません」

「お、そろそろクロノさんが帰ってくる時間やないか？玄関で出待ちしーとこっ！」

「ハヤテエ？どこに行くんだ？アタシ達から離れたら次元変質者が来るぞ？」

「そうやった、なあヴィータ。玄関で一緒にクロノさん出待ちせえへん？もうすぐ帰ってくる時間やし」

「んー、いいよ。ポーエスびーた持ってく」

「主はやて、私にお乗りください。『週刊守護獣』に載ってたのですが、最近では四肢を鍛えるのに主を乗せるのがトレンドなのだそうです」

「いったい何の雑誌なんや…？」

「ただいまー。帰ったよ、はやて」

「おかえりや!クロノさん!」

なんか……こーゆーの、ええな。幸せや。



第二三話 「なぜ山に来て叫ぶかだつて？チヤキーン！  
ただ単に叫びたかつたから！ドドドド！」そこに山があ  
るから。やないんかい！

夏真つ盛り！今年はいっぱいみんなと遊ぶでー!!今までの鬱憤を晴らさせてもらお  
うやないか！待つてろ！ひと夏のあばんちゆるる？

『クマと執事つてどつちが強いんやろ…？』

魔法少女 リリカル おわた orz

第二三話 「なぜ山に来て叫ぶかだつて?チャキーン!

ただ単に叫びたかったから!ドドドド!

そこに山があるから。やないんかい!

「士郎さん、わざわざすんまへんなあ…誘ってもらうて。でも、ホンマよかつたんですか?  
?車の手配とか…わたしんこの家族、人数多いから大変やったと思いますけど…」

「大丈夫、気にしなくてもいいよ。キャンプは人数が多いほうが楽しいからね。それに、

みんな聞き分けのいい人達ばかりで助かるよ。さあ！さっそくコテージに荷物を運んじやおうか。はやてちゃん達のコテージは右から三番目だよ」

士郎さん：はっはっはって…それは擬態や！あのヴォルケンズはそんなんちゃうんや！今は大人しくしとるけど絶対この三泊四日の間で大問題起こすで！？ザファイラが野生動物に格闘挑んだり、シグナムが鍛錬とか言つて森林破壊したり、ヴィータがドジって川に流されたり…あかん、容易に想像できるわ…。シャマルとリインに見張り頼んどい…

それにしてもえらい参加者多いな…八神家からはわたしとヴォルケンズの六人。

高町家からはなのはちゃん達家族の五人に…美由紀さんと桃子さん初めて見たで…美由紀さんの方が年上にしか見えへん…何で桃子さんがなのはちゃんの中学ん時にそっくりな口リになつとるんや…高町家は意味が分からん…。

バニングス家はアリサちゃんと執事の鮫島さんの二人…鮫島さんがどうしても東方

不敗にしか見えん:執事の東方不敗とか:誰も誘拐出来へんわ:あ、今ザフィーラと格闘しよる:手からビーム出た:見なかったことにしよ。

月村家からはすずかちゃん、忍さん、メイドのファリンとノエル:やったつけ?の四人や。ファリンとノエルの違いがわからん:あ、ファリンがコケた!?そんなキャラやったつけ!?

テストタロツサ家からはフェイトちゃんとプレシアさん、あと「行くぞすずか!!銀河美少女☆アリシア!今必殺の:超☆輝くシュートツヴァイダブルツインマークIIセカンド!シユバツ!」の三人やな。突っ込まへん、突っ込まへんで。なんで2がいつぱいあるんかとかバスケットボール蹴つとるかなんてわたしは絶対に突っ込まん。「あ、これバレーの時に使うやつだった」ちやうわああ!!お前はサッカーボール蹴つとけやああ!!

「ふいー、ようやくついた。車の運転とか何年ぶりだ:オイ、クロノ!さつさと荷物運べ、俺は糖分補給してくる。どっかパフェ落ちてねえかな:」

「父さん！ちゃんと最後まで働いてください！なんで家族全員の荷物を僕が持たなきゃいけないですか！もし落ちてたとしても拾い食いなんでしないでください！それでも大人ですか!?!」

「うるせええ！親父に向かってマダオ（まるでダメな大人）呼ばわりだど!?!せめてマジでダンディなお父様って呼べ！そして、パフエが落ちてたら誰でも食うに決まってるんだろ  
！」

「毎日だらしないオッサンの間違いでしょおがああ!!!」

「チツ、しゃあねえな…リンディ。俺はガキと一緒に荷物運ぶから士郎の奴からケーキ奪ってこい。アイツの嫁さんの四次元ポケットなら入ってるだろ」

「わかったわ。あと、私の作ったクッキーでよければこk「さあ！クロノ。荷物運ぼうか！どっちが早くコテージに着くか、父さんと競争だぞ☆」

……。キャラ変わりすぎやろクライドさん……まああのリンデイ茶改を飲んだわたしならアレがどれだけのもんかわかるんが余計に嫌やけどな……てかハラオウン家も参加やったんやな……クロノさんもなんか言ってくればよかったんに……。そして桃子さんの四次元ポケットつて一体なんなんや……

「なんかもう……突っ込みとかどうでもええ気がしてきた……そうや、かの勇者様も言つとつた……『僕にはとてもできない。』ごめんな……クロノさん……わたしにはもう無理や……」

「はやて!?諦めないでくれ!僕を残して逝かないでくれ!!」

「ああ……そうや……最後にクロノさんに言わなあかんことがあるんや……。クロノ、貴方の事を愛してます……」

「はやてえええ!!ネタに走つて僕を一人残さないでくれえええ!!」

「『『『寸劇乙wwww』』』」

「ところでなのはちゃん。その紐でグルグル巻きにして引き摺つとるのは何や？なんか動いとるけど…まさか動物か!? 虐待はあかんで!!」

「なのは、それはちよつと僕もさすがにどうかと思うが…」

「えっ? だってこうするとスツゴクよろこぶの! 見ててはやてちゃん、クロノ君! ええいっ!」バチッ! ビッターン!

「ちよ! 叩きつけたら…」

216 第二三話 「なぜ山に来て叫ぶかだって?チャキーン!ただ単に叫びたかったから!ト  
!」そこに山があるから。やないんかい!

「おふ  
w  
w  
w  
おふ  
w  
w  
w  
」

「ユ  
ー  
ノ  
!!!  
そこ  
に  
いた  
の  
か  
あ  
あ  
あ  
!!!  
」



第二四話 魔法少女にはマスコットが付き物やて？なら  
これでわたしも立派な魔法少女や！異論は認めん。

夏真つ盛り！今年はいっぱいみんなと遊ぶでー！！今までの鬱憤を晴らさせてもらおうやないか！待ってろ！ひと夏のあばんちゅーる？

『あはは…拾ってきてもうた…』

魔法少女    リリカル    おわた    o r z

第二四話 魔法少女にはマスコットが付き物やて?

ならこれでわたしも立派な魔法少女や!

異論は認めん。

「そうや!わたしは次元変質者なんて見んかった、それでええんや。ほな荷物も置いたことやし…:念願の溪流釣りに行こか!頼むでザツファイー!」

「ワンツ!ワンツ!」

「狼姿で腕立てすんなや…動きがめつちやキモイで…あと、吠えとるんか気合入れとるんかはつきりしいや…」

「では、はやて殿。我々は大人組と一緒に酒盛りに参加するでござるよ。ひつさしぶりのビールでござるー!!!」

「ヴィータちゃんは…車酔いでダウンしてるから、しばらくそつとしておいてあげてね？一応、薬は渡してあげたから大丈夫だと思っわ」

「あい、わかった。ラインも一緒かいな？その見た目で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。桃子も士郎もいるのだ、私だけ仲間外れはズルい」

たしかにあのメンツやったらラインがおつても大丈夫やな。約一名マダオがおるくらいしか不安材料があらへんし。むしろ、子供たちと一緒に行動するよりは大人組に混ぜとつたほうが安全地帯なんやないか？いや、やつぱ地雷踏み抜きそうで怖いわ。

「おっしや! いっちょ大物釣つて帰つて来ようやないか! 岩魚や岩魚! ザツフィーに乗つとつたら険しい山道も安全やる? フェイトちゃんもあとからくるらしいし…: それにうちのザツフィーに勝てる野生生物なんて日本にはおらんて!」

「もちろん、ワンツ! なんです。主は、ワンツ! やて。フウ…:。岩魚は塩焼きが一番美味しいと聞きました!」

「お! ええな! シヤマルがおるからあんま料理せえへんごとなつたけど、わたしもなかなか上手なんやで!」

「では調理器具も一緒にお持ちしましょう。期待していますよ、主はやて!」

「おっしやあああ！獲ったどおおお!!!」

「お見事です！さあ、火は起こしました！串に刺して塩焼きと行きましょう！」

「了解や！わたしは調理しとくから、ザッファイーは2匹目よろしゅうな！」

「はやてちゃんのお料理教室やー。今日は岩魚の塩焼きにするでー。まず、水で洗って…次に鱗はちゃんと取るんやでー？あと内蔵もな？そして、身に切れ目をちよちよいつと…」

「筋!!肉!!バスタアーーーーッ!!!」

「一体なんの掛け声や。せめてそこはフィィィィィッシュ！やろが！」

「ほふほふ! あつつあつで美味しいでー!! 獲れたて新鮮! 野生の味やー!!!」

「ハグツ! ハグツ! ハグツ! ハグツ!」

「なんかコメントしてえな…。そろそろええ時間やし…。これ食べたら帰るか? にしてもフェイトちゃん、来る言うつつたんに来んかったな?」

「あかん、どつかで変なフラグ立ててもうたみたいや…。なんでこんなところにドラゴンがおんねん…。サイズえらいでかいし…。意味わからん。ここはルシエの里か?」

「主はやて…。さすがの私もあのサイズのなんちやらレウスを討伐するには回復薬（シヤマル）が足りません。せめてしびれ罫と大樽爆弾Gをご用意ください…。あと、3乙の可

能性は覚悟していただきたい」

「そんな問題ちやうやろ…わたし日本で猫カー見たことないで。乙しても復活できんわボケ」

なんかここにおったわ、ザファイラより強いかもしれん野生生物。近くにヴォルテールとかおらんやろな…超大怪獣決戦とか普通に起こりそうなところが海鳴の怖いところやで。あかん、触らぬ籠に祟りなしや。ザツファイ、寝とるうちにゆっくり離れるで…

「はやてえええ!!!おまたせえええ!!!私の愛をうけとめてえええ!!!」

「誰やあああ!!!やかましいわあああ!!!静かにせえつちゆつたんが分からんのかあああ

!!!  
」

「主はやてえええ!!! 声が大きすぎます!!! 気づかれますよおお!!!」

「なになにー!!! そこに何かいるのー!? ド、ドラゴン!?!? ここはアルザス!?!?」

「きゅ!? きゅくるー!?!」

「」でかい割には声が可愛過ぎ!!!」



「で、はやて。私たちに何も言わずに釣りに行つて、こんな時間によく帰ってきたと思つたら…その…空を飛んでる赤饅頭はなに？きちんと説明しなさい」

「いやな…すぐかちゃん。わたしにもようわからんねん…岩魚釣りに行つたかと思つたらこの…「きゆくるー？」子を見つけてな…。でかかつたんやけど、光つたかと思つたら縮んでもうたんや！ザツファイも何に対抗したんか分からんけど唐突に高速腕立て伏せ始めるし…フェイトちゃんは相変わらず頭ん中お花畑でおかしいし…気づいたらこんな状態や！超スピードとかちやちなもんやあらへんで！もつと凄いモンを味わつたわ！」

「ワン！ワン！ワン！ワン！」

「はやてつたら…照れちやつてえー！せつかくクロノがクライドさんの世話してないんだから、私と二人つきりでデートしようって言っただけなのにー」

「あはは…あいかわらずだねフェイトちゃん…。ねえはやてちゃん、この子の名前は？  
…君可愛いね？お名前なんて言うの？」

「きゅくく！きゅくるー！」

「一応…ぷちトマトって名前にしようとおもっとるんやけど…」

「「「…ダサッ！」」」

第二五話 乳に関してはわたしも一言申し上げなあか  
んことがある：揺れへん乳は乳やない！貧乳はステータス  
！神は偉大な言葉を残したで：

夏真つ盛り！今年はいっぱいみんなと遊ぶでー！！今までの鬱憤を晴らさせてもら  
うやないか！待ってる！ひと夏のあばんちゅーる？

『わたしとこの子でおっぱいドラゴンや！！』『きゅく？！』

魔法少女    リリカル    おわた    o r z

第二五話 乳に関してはわたしも一言申し上げなあかんことがある…

揺れへん乳は乳やない!貧乳はステータス!

神は偉大な言葉を残したで…

「はやて…まさか…僕は非常に信じられない…まさか…君も次元犯罪者となつてしまふなんて…。悪いことは言わない、今スグ自首するんだ!出来心だったのなら観察処分で

済むから……。他次元への無許可転移並びに他次元の生物の無断捕獲は密漁なんだ……！」

「や、クロノさん。わたし転移とかしてこの子捕獲してきたんちゃうで。なんか知らんけど、その裏の山ん中におったんや」

開口一番、クロノさんから次元犯罪者認定されてしもうた。ま、気持ちわからんでもないで……わたしかて未だに信じられへん。これ、絶対モンスター狩り殺す奴から来とるやろ……持ってきた奴、地球の生態系の破壊が目的とかそんな生易しいやつちゃうで？むしろ全力で地球破壊しに来とるわ……

「で、クロノさん。現地住民が次元世界の動物を保護したつたのは大丈夫なんか？ぷちトマトもなんかわたしに懐いてしもうて……引きはがすんは可哀相や……」

「うむむ……。本来、管理外世界の現地住民が保護したのなら次元漂流者と同じ扱いで、ミッドチルダで保護することになるんだが……。次元生物を保護した、はやて自体の扱い

が妙なことになってるからなあ…」

こんな幼気な薄幸の美少女捕まえておいて妙とはなんや、妙とは!断固抗議したるで!  
!出るとこ出たらんかい!!訴えてやる!

「まあ、幼気な美少女かどうかは置いといて。それに訴えても勝ち目はないと思うんだが…。ごほん、まあ、実際のところはやてがミッドチルダ…引いては魔法世界とどのような関係になるか次第つてのが大きいかな?魔法世界と一切関わりを持たないつて言うなら、やはり地球でその子を飼いつけるのは…まあ状況から言つて不可能だろうね」

あかん、クロノさんにまで置いておかれた…やっぱわたしは薄幸の美少女(笑)やつたんか…。まあ正直そこはどうでもええ、問題はぶちトマトや。クロノさんの話し方からすると、魔法世界の関係者やつたら問題はなさそうや。確かにそうやな、キャロやルーテシアも他次元の生物連れとつたし…使い魔登録みたいなんしとけば問題ないつ

ちゆう制度やろうな。地球でこの子を飼いつけるんも周りの目から見ても明らかに地球外生物やから連れて行かれて研究されてまうかもしれへん…

「ちゆうことは……わたしはどうすればぶちトマトと一緒におれるん？もともとわたしは地球で一生過ごすつもりなんかあらへんで？それに一度聖王教会つちゆうとこに行つて、話をせなあかんのやろ？なんか使い魔の登録みたいなんすればええんか？」

「まず、その子が次元生物保護法の対象になつておるかを調べないと。他次元への連れ出しが禁止されている生物もいるからね。そのあとは…はやての使い魔として管理局に届出をすれば問題はない」

「よかつたな、ぶちトマト！これからも一緒におれるかしらんで！夢はでつかく！打倒、乳龍帝や！合体してジャガーノートドライブの練習するで!!」

「きゅくー？きゅくきゅくー！」

「なんだその卑猥な称号は…」

それにしてもわたし、ベルカ式魔法は使えへんし、使用デバイスからしてミッド式やし…使い魔にぷちトマト…原作の八神はやては完全にロストしてもうた…。ドラゴンに乗って魔法撃ちながら戦うって…どこの『俺、強ええええ!』なオリ主やねん…。むしろ『私、弱ええええ!』やで?頑張ってもシューターをガトリングでしか撃てんねん…役立たずここに極まれり!Striker'sじゃ、きつと出番ないで。AMFで形無しやー



「なあ忍さん？ちよつとええか？相談したいことがあんねん」

「どうしたのはやてちゃん？お姉さんに相談事？いいわよ、何でも聞いて？」

そうや、わたしもうかうかしてられへんねや！またいつどこで誰にクロノさんのスキル『フラグメイク』が発動するかわからん！クロノさんが家にいる今のうちにゲットしとかなん！

「史上最強のシスコン朴念仁をどうやって射止めたんか聞きたいんや。乳か？やつぱり乳なんか!?肉体的な色仕掛けかあああ!?わたしのぼうけんはおわってしまったで…。ちきしよー！わたしの未来は平均やあああ!!」

「ブツ!!ごほつごほつ…と、突然何を聞くかと思えば…なかなか答えにくいことを聞くわね…」

「なにになに?どうしたの?桃子さんも混ぜてー!!」

「こら桃子、はやてちゃんが驚いてるわよ?どうかしたの?私達でよければ相談に乗るわよ?伊達に二人も子育てしてないんだから…まあ、フェイトはあまり手のかからない子だったんだけどね」

「ふつつふーん、きつとうちの息子の事よ。あの子バカみたいにニブチンだから…まったたく、そんなとこばかりクライドさんにそつくり」

ママさん大集合や。桃子さん、完全に酒入つとるやろ…。しても流石の貫録、旦那方を射止めただけのことはあるで…

「つまりはクロノ君の事を好きになったから振り向いて欲しいってことね?ああ!いいわー!若いつて素晴らしい!」

「プレシアア。それじゃあ完全にオバサンみたいだよ？まだまだ私達も若いんだから何とかなるってー！再婚とかしないの？」

「こらこら、桃子。話を逸らさないの！今は、はやてちゃんの相談が先でしょ？で、はやてちゃんはうちの息子に対して何かアピールした？」

「アピール…、ま、まあ色々…。でも結局クロノさんはわたしのこといっつも子ども扱いでするんや！そんなに歳が離れとるんがいかんのかな…」

「うーん…たぶん歳とか恋愛対象外とかじゃないと思うんだよね？恭也もそうだけど、あの手の堅物は自分に対して何故こんな行動を取るのかってのを理解してないんじゃない？もし、理解しててその態度なら完全に脈なしってことになるけど…」

「そのクロノって子、フェイトから聞いたわ。なんでも無意識にフラグを立てるけれど、微妙に恋愛対象にならないところギリギリまで攻めてくるって言ってたわね」

「なにー?その新車のフラグメイカー!デメリツトのない凄いスキルだねー!」

「完全にクライドさんを凌駕してるわね…まあ、クライドさんはフラグ作ってバツキバキに壊してたわ。大体が死亡フラグだったけど」

「いやむしろクライドさんにとっては、リンデイさんがバツキ刃牙な死亡フラグやと思うんやけど…」

「「結論は、既成事実作っちゃえー♡」」

「そんなこと出来る年齢やないわ!!!」

第二六話 求めよ、されば与えられん。その肉はわたしが育てた奴やああ!!! 「自らの力で勝ち取ってこそその勝利にごぞる！」ハフハフ

夏真つ盛り！今年はいっぱいみんなと遊ぶでー!! 今までの鬱憤を晴らさせてもらおうやないか！待ってろ！ひと夏のあばんちゆるる？

『このステーキス（鉄串）…全弾持ってけやああ!!!』ジュージュー

魔法少女 リリカル おわた or z

第二六話 求めよ、されば与えられん。

その肉はわたしが育てた奴やあああ!!!

「自らの力で勝ち取ってこそその勝利にござる!」ハフハフ

「既成事実…既成事実…ぬーん…。やっぱりあの手のニブチン捕まえるに肉体的に迫るしかあかんのか…。でも、クロノさんわたしを風呂入れてくれても全然意識してくれとる

気配なかったしなあ…。全裸で添い寝しても朝起きたら服を着せてもらつとつたし…あかん！このままじゃ永遠に意識してもらえん同居の従妹のか、パンツ履けへん女の子の的な何かになつてまう!?あれ？後者はそれでええんやないか…?」

「はやてちゃんが心の迷宮を彷徨つてるの…、しかもなんかクロノ君の秘密を大絶賛暴露中なの…。どうしてクロノ君はあんなに紳士なの…?」

「ぐぬぬー!!クロノー!うらやまけしからん!私と変われー!はやては…はやては私とアリシアのだああ!!」

誰がお前らのはやてか。たしかになのはちゃん、クロノさんは紳士やで。でも…男はちよつとくらいえつつちな方がええらしいんや!桃子さんたちも言うとした、その方が手のひらで転がしやすいつて。

「ふむふむ、メモメモなの…。じゃあユーノ君はどうなの?大分エッチに変身してし

まっているの」

「あかん、あれはエツチとかいうレベルちゃう。もはやエツチを超え、変態すら超越した。今のユーノ君はまさに次元変質者と呼ぶにふさわしい存在や」

「次元変質者…私が将来、執務官に成ったらユーノみたいなあの追いかけるの…? やだなあ…スカリエッティがスカリエツチイとかになつてたら…」

「そんなん、チンクの名前が○で隠さなあかんくなつとる上にセインのデーブダイバーで盗撮しまくりに決まつとるやろ…常識やで? JK」

「うぎやあ! そんな所にヴィヴィオ置いておけないの…教育に悪いとかそんなレベルじゃないの…変なこと覚えてきちやつたらどうしよう…」

「そういえばフェイトちゃんは未来でスカリエツティに拘束プレイされとつたな…、今



「回もされるんちゃう?」

「い…いやあああああ!!!」

「ヴェータ? 元気なつたか? 今から夕飯やで? 今日にはバーベキューやって土郎さん気合入れとつたで?」

「バーベキュー? なんだそれ。アタシ食ったことねえ… キュウリをバーベに付けて食べるのか? あんまりうまそうじゃねえな…」

「モロキュウちゃう、それにバーベってなんやねん。そっちの方がどんな味か気になるわ。バーベキューってのはな… …串刺し祭や。鉄の串に突き刺して火あぶりにするんや」

「は…はやてちゃん?その説明は斬新すぎると思うわ…。ヴィータちゃん、気分はどう?  
?」飯食べれそう?」

「く…串刺し…。シヤ、シヤマル。アタシ体調悪いから行けないや。あ、あははは…」

クツクツク…ヴィータ君。君のついた嘘など私にはマルツとお見通しなのだよ。フ  
フフ、ハアツハツハツハツ!!!ほな行くで。

「やだー!まだ串刺しにされたくないー!」



「それにしても…君の…ぷちトマトだっけ?あまり肉を食べないな…食が細いのか?それともなにか病気に罹ってるのか?」

「肉食えー!おつきくなれないぞー!!ドウビシ!ほれほれー!!!」

「きゅ!きゅくるるる…」

「いやアリシア、実はえらいおつきいでその子。それ以上おつきくなられたら逆に困るわ。そうやなあ…龍といえば肉を大食い!つてイメージなんやけど…。フェイトちゃんかなり前に龍を飼つとつた人にあつたつて言うかつたろ?そんなときはどうだったん?」

「龍を飼つてた人…?ああ!キャ…。はうはう…。ル、ルシエさんのことね?う、うん知ってるよ!ええええつと…確かにお肉いっぱい食べてたかな?うん!そうだった!」

「? なんて突然フェイトは挙動不審になったんだ?ルシエ…ああ、聞いたことがある。」

たしかアルザスってどこにいるルシエの里の民の事か…」

「きゆく……きゆ!? きゆくきゆくー!!」 アグアグ

「『猛烈な勢いで生ピーマン齧りだした…!!』」

「オオオオオウフｗｗｗｗバーニング! バアアアニング! もつと熱くなれよおお!」

「む!今どこからか燃える男の声が出たのだ!今日からお前はマックポークだつ!!!」

「ユーノ君、さすがに火投げ込むのはまずいから火元に転がしておくけど、大丈夫なの?」

「お好みはミディアムレアで…w w w 丁度いい塩梅で引きずり回してくださいw w w キタキターー(。▽。)—ー!!!」

アンタは対抗せんでええねん、リイン。燃える男の声ちやうわ、物理的に燃えとる淫獣の声や。ほんまに大丈夫か?尻尾燃えとるで、ユーノ君。

## 第二七話

## 幕間3

しよーとしよーと24連発

「ここらで一息入れようか？手抜きやないで!？」

『感想返しから生まれた私らのショートショートやでー』

魔法少女 リリカル おわた orz

第二七話 幕間3 しよーとしよーと24連発

【原作どこいった!?!】

「もうここまで変化が来てしまったのならどうしようもなからう」

「そうやな、もともとわたしがいる時点でおかしいもんな」

「原作なんて、私がパンツの時点で最初から存在しなかった」

「フェイトちゃん…」

「ふむ、ということはストラグルバインドをかけたらパンツに戻るのか?」

「!?!?!」



【アンリミテッド・エロイヤ】

「フヒヒwww我輩が無限の欲情www淫獣ユーノだwww」

「?!? 今、次元世界のどこかで私の誹謗中傷を受けた気がするよ!?!」

「博士が…壊れた…」

「いや、だって今…え？ウーノ、私が悪いのかい？」

【触るな地雷！】

「なあクロノさん、エイミイって誰なん？リンデイさんの話ん中で出たんやけど…」

「エイミイ…エイミイイイイ!!!」ガクガク

「ク、クロノさん?!?!? どうしてもうたんやあああ!!!」

「あががが!くあwせdrftgyふじこlp…」

「あかん…壊れてもうた…正史を知らんはずなのに…『エイミイ』は地雷みたいや…」

【C I W S】

「オホーwww金髪幼女たんwww生まれる前から好きでしたーwww」

「きやああああ!!!」Photon Lancer!

「ひでぶwww」

「あ、ありがとバルデイツシュ」「All Right, Sir」

「ねえあなた♡いつまで妻のわたしのこと放っておくん？」

「あがががが…ハッ!?今、外堀から埋め立てられた気がする!？」

「まだだwwwまだ終わらんよwww」

【悩んだ結果】

「実は、STSの敵役をスカリエッチイやのうて、スカリエッチイになってもうたユーノ君に担当してもらおうかとも思ってたんやけど…」

「それだと僕が、使えない執務官になってしまうので諦めたんだ」

「それにしてもSTS敵役…「無限の欲情」スカリエッチイ…えらい勿体無い事した気がするで…」

「!?!? また次元世界のどこかで私の誹謗中傷が…私の将来が脅かされた気がしたよ!?!」

ねえ！ウーノ！！

「博士。申し訳ありませんが、私達戦闘機人にも電波を受信する機能は備わっております」

【最強の盾】

「フツヒヒーwwwやっぱりパンチラするなら反応の可愛いはやてたんだおww」

「やめいや！」

「フンツ！盾の守護獣！パンチラなどさせん！筋肉ヘツドロック！」

「オゲエエエ！！胸筋がががが！かかか顔の横ににに…！！」

「悪は滅びたで」

「僕も体を鍛えようかな…」

「フェイトちゃんのひ・み・つ」

「フェイトちゃんにはとんでもない秘密が隠れてる」

「うむ。たとえばストラグルバインドで変身が解け、パンツになるも「ならないよ！なの  
はー」

「!! 君が伝説の…おぼんちゅガールだということのか!？」

【途中で脱ぐではなく最初から履いてない。これが発想の転換……！】

「フェイトちゃん…なんでいつもパンツ履いてないんや?」

「ちちちちがうんだよ?!?!いつも履いてないんじゃないんだよ?!?見られそうになるのが恥ずかしくていつもモジモジしてることなんてないんだよ?!?私えっちい子じゃないもん!!」

「「「フェイトちゃんエロ可愛い」」」

「はうっ!!」

【けどそんなことなかったぜ!】

「最近フェイトちゃんのキャラが弱いと思っと思った。そこに、フェイトちゃんの驚愕の事実が発表された!」

「それが…まさにどうしてこうなった!という訳だ」

「うう…私、汚されちゃったよう…ティアナー、ふえええん」

「はっ!?今、フェイトさんに助けを求められた気がした!」

「? どうしたティアナー?今日はクラガナンに御飯でも食べに行こうか」

「けど…そんなことは無かった!はい!兄さん!早く行きましょう!」

【変態忍者!推参】

「いつつもいつつも…みんなして僕のことを淫獣だの、空気の、ユーノって必要なくね?だの、エロオコジョだの、なのはオマケだの、使い魔で十分じゃ?だの、ユーノ?

いたっけそんな奴？だの…

好き勝手言われた吾輩テラカワイソスｗｗｗｗフツヒヒーｗｗｗｗ自重など、当の昔に捨・て・て・き・たｗｗｗｗ」

「わ…私の…初代相棒ユーノ君が…変態忍者になつてるのおおお!!!」

「よくもハヤテを…次元変質者！ブツ潰してやる！」

「我が主を辱めるとは…この不殺さずの誓い！破らせてもらうでござる!!!」

「グへへｗｗｗｗ貴様らに用はないｗｗｗｗなのは様！私を卑しい淫獣め！と蔑み下さい  
!!」

「…私…ユーノ君が変わってしまったって気づいたの…ユーノ君のこと…本当は…  
「踏まれず虐げられず蔑まれずに…何の淫獣か!!フツヒヒーｗｗｗｗ」





【見た目も中身も真っ黒です】

「なあ…あの次元変質者、警察とかで捕まえられへんのかなあ…。だめか、転移で逃げまうだけやなあ…」

「一応、僕も警察と同じような組織として、アイツを追いかけているんだが…」

「わかった！つまり、次元変質者も捕まえられないクロノって、実は役立たずなんだね！」

「あかんフェイトちゃん！たとえホントの事でも、そんな直球で言ったらクロノさん傷付くで!」

「ぐっはああああ!!」

「あ…やつてもうた…」

「ニヤリ…計画通り…」

【はるか昔、その頃の主人公だった男の話】

「いつもニコニコ！クライドさんの隣に這い寄る混沌！レティ・ロウランでええつす☆  
クツクライドさああん！」

「ええい！しっつけえんだよ！レティ！」

「クライドさん！私の料理を食べてください！」

「それは料理じゃねえ！百歩譲って料理だとしても、てめえを料理してやる！の料理だよ！世界中の料理人に謝れコノヤロー！」

「ああん！クライドさんは照れ屋さんですねえ〜！うつつふふ〜今日は逃がしませんよおお！だいじよおぶ〜痛くないからああ！」

「私だっっていうまでも『管理局の暗黒騎士』って呼ばれたくないんです！今日こそその称号を返上して見せます！」

「オオオオイ!!俺の周りの女にはろくな奴いねえのかああ!!」

【ツツコミの英霊】

「毎日叫んでばかりで……喉が壊れる前に心が砕けてもうた……」

「喉は鉄で心は硝子な訳でござるな？」

「その砕け散った心を私たちがミキサーに入れて粉微塵にするのだ!」

「」「」「そう、それが我々ヴォルケンリッター!!!」「」「シヤツキーン!」

「亡霊(守護騎士)は暗黒(夜天の書)に帰れやああ!!!シヤマルもこんな時だけ乗らんでええねん!!!」

## 【勇者はやての冒険】

「フツヒヒーwww今日こそスケスケおばんちゅゲットだぜwww」

「魔王の下僕が現れてもうた。コマンド」

戦う

魔法

道具

↓  
通報

「はやては旦那を呼んだ」

「時空管理局！クロノ・ハラオ…グエ！」「囑託魔導師！フェイト・テスタロッサだ！」ゲ  
シッ！

「しかし、旦那はこんかったで」

「ふぎゅ!?」

【お話し聞いて?】

「あのね、お父さんお母さん…お願い聞いて欲しいの…」

「し…士郎さーん! ついになのはがワガママ言ってくれましたよー!!」

「な、なにいい!? いいぞ! なのは! お父さんが何でも聞いてやろう!」

「ず、ずるいわ士郎さん! 桃子さんも聞くからね! なのは」

「う…うん。あのね、実は今日フェレットさん拾つて「いいぞ!」うちで飼おう!」

「あ、ありがと!」いそいでペットショップでケージとフェレットフード買ってこないといけないわね!」

「そ、そこ m 「恭也ー！美由紀ー！なのはが初めてワガママ言ってくれたぞー！」  
「あの…その…」「なんだったってー!?」

「なのはー。僕はケージの中より外にいるほうが好みだなー」

「わかつたの！外に紐でグルグル巻きにして繋いであげるの!!」

「うは w w w そつちのほうが好みです w w w」

「やっぱり私にはユーノ君が必要だったの！ユーノ君！お話ししよー！」

【○○○はいつだって】

「女の子はいつだって男の子より強いの！」

「男の子はいつだって女の子にいちめられたいの！ w w w」

「そう！きつとそういう生き物なの!!!」

「いや、僕は断じて違う。一緒にしないでくれ、はやて。だからその乗馬用ムチをしまっ  
んだ！早く！」

「ちえー。あ、そうやったね。クロノさんはバインドで縛るんが好きやったんやな、忘  
れとったわ。クロノさん早くーわたしにバインドかけたってえなー」

「ありもしない事をさも事実のように言わないでくれ!!!」

【胸の大きさをなんて飾りです】

「そういえばわたしって結局、きよにゆーにはなれへんのやなあ…。な、なあ…ク、クロ  
ノさんは…胸が大きい娘の方が好きなんか…?」



「…?どうしたんだいきなり。しかも答えにくい事を…ハッ!」  
「ん?どうしたんや?」

(きつとはやては夜天の書によつて成長を阻害されていて、自分が体格的に小さいことを気にしているんだ…だから突然こんなことを…だとしたら僕がかける言葉はただ一つ!)

「はやて。僕はたとえ君がどんな大きさ(体格)だろうと僕は気にしないよ。君は僕にとつて大切な(友)人には変わらない!」

「な…:どんな大きさ(胸)でもわたしのこと大切な(恋)人として思ってくれるんか…」  
グスツ

「こうして今日もクロノ殿はちやくちやくとフラグを立てていくのでござった」

【狩り暮らしのスカリエツティ】

「ハツハツハ！貧弱！貧弱ウウ！とでも言つて欲しいのかね？君の攻撃など私にとっては価値のないものなのだよ」

「ギュググ…ギャオーン！」

「クツクツク、甘いよ。そんな簡単に行動を予測されていては自然界では生きていけないはずがないではないか…残念だったね。そこは罠だ」

「ぐぎやあああ!!」

「フフフ…ハツハツハツハツハ！獲つたどー！というヤツだね…クツクツク」

「オイ、誰だ奴を無限の欲望でなく無限の筋肉で作り上げた奴は！」

「むしろあれでは無敵の筋肉ではないか？ドラゴンと素手で格闘していたぞ？」

「もともとがジェイル・スカリエッティだったから異常に知性が高いな…無敵生物誕生って意味では成功作…か？」

【哀れフリード。そして兄妹の日常】

「キユク！キユクキユクキユクルー！」

「コクコク」ポン

「非常食（ガリユ）。なにやってるアルカ（の）？」

「はい、お兄ちゃん♡今日もお弁当作ったよ」

「ありがとうティア。いつも悪いね？」

「いいの！いつもお仕事頑張ってるお兄ちゃんのためだもん。お兄ちゃん！行ってきますのちゅー…！」

「うん、ティアが何を言ってるか、俺には全然わからないよ。いつてきます」ガチャン  
「ああん！おにいちゃんのイケずうう〜！」

【そしてブラコンへ…】

「だって…前はお兄ちゃん…死んじやったんだもん…お兄ちゃんと一緒に暮らしてて分かったの…お兄ちゃん超かっこいいんだよ！もうハラオウン提督とか目じやないの！お兄ちゃん…結婚してくれないかなあ…♡」

「ちよいまちいや!!!いったい誰よりカッコええ人がおんのや!?!わたしの旦那の方が100倍カッコええに決まっとるやないか!!!超絶イケメンヒーローやで!!!」

「そんなことないもん！次元世界で一番かっこいいのは私のお兄ちゃんだもん！いくら八神隊長でもこれだけは譲れません！」

「ほお…ええ覚悟やないか。そこまで言うんやったら白黒はつきりつけたろうやないか…」

「異議あり！私にはやての方が「アンタは黙つとれ!!」ひやう…」

【和解、そして伝説へ…】

「お兄ちゃんは超イケメンでヒーローだもん！でも、ハラオウン提督もやっぱりカッコいいかも…」

「確かにわたしの旦那は超カッコええ。まあ、もちろんランスターさんもカッコええけどな…」

「いまここに歳を超えた友情が成立したの…」

「なのは様ああ!!もつと!強く踏んでくださいww」

「うーん、最近ユーノ君とこうやってるのも有りかもと思ってきている自分が怖いのに」ゲシゲシ

「ありがとうございます!ありがとうございます!」

「ユーノ君が旦那でもいいかもなの。ストレス溜まらなさそうで…」バシーン!バシーン!  
ン!

「おふー！おふー！」

【あるいはこんな、愛の形】

「なのは……あの……」

「んん……なあにユーノ君？こんな朝早くから……」

「……………」

「ふふつ、昨日あれだけシタのにもう欲しくなっちゃったの？しょうがないなあ……」

「ごめん、なのは……」

「んふふ、いいよ。きて、ユーノくん……」

「なっ……なのはあああ！」

ビシッ！バシッ！バチコーン！

「うっぴょーwww」

「朝からうっさいわ！世帯宿舍出てけええ！」

【魔法少女（痛）】

「私は諦めない！絶対にはやてをクロノの魔の手から救い出してみせる！だから早く！クロノと別れて私と結婚してよ！！」

「フフフ、我にも男の一人や二人おるわ！ハツハツハ！何をおっしやる狸さん」

「そんな妄言吐いとる暇あったらまずパンツ履けや！！10年後までノーパン娘とか痛いぞ！！お前もや永遠の中二病！！お前の男は変態を超越した次元変質者やろが！！」

「「ふぎゅー！！」」

第二八話 今やヴィータ!お前の力を見せてみい!「ハンマーヘル!ハンマーヘブン!」

夏真つ盛り!今年はいっぱいみんなと遊ぶでー!!今までの鬱憤を晴らさせてもらおうやないか!待ってる!ひと夏のあばんちゆるる?

『行くぜゴールドイ…グラーフアイゼン!』



魔法少女　リリカル　おわた　o r z

第二八話　今やヴィータ！お前の力を見せてみい！

「ハンマーヘル！ハンマーヘブン！」

「うーん。気持ちのええ朝やなー。今日はいったい何するんやっただけアリシア？超次元サツカーやるんやっただかな？ま、走れへんわたしには関係あらへんけどなー。……言ってて悲しくなったわ、鬱や…死のう」

「はやて!?ドウキューン！いきなり一人で鬱にならないでよ!?ドウキューン！はやて

だって一緒に遊ぼうよ!キュイーン!今日はみんなでシュート練習だ!!アンタダケハ  
…オトス!」

「……………!?おい、なんで効果音にバナージ入った!?お前の効果音は宇宙世紀から聞こえてきとつたんか!?!……………今のはさすがに流しきれへんかったで…。シュート練習か、わたしにもできるかな?ようやく杖につかまって立てるようになっただけなんやで?」

「それについては大丈夫、クロノも一緒に来てくれるんだって!ドウ!頼んだら魔法で何とかしてくれるってさ!ズガン!」

「うう…:ホントは私とその魔法使えればよかつたんだけど、電気変換資質がなあ…。悔しいけど緻密な魔法についてはクロノにかなわないんだよね…」

ほーかほーか、フェイトちゃんそういや電気変換資質もつとつたなあ…。フェイトちゃんに頼んだら足をビリビリにされそうや…。それはそうと今日の朝食はなんやろな?朝っぱらから肉やないやろうし…:土郎さんと桃子さんに期待やな。

「ほれ、アリシア。わたしの車椅子押したつてえな。そろそろ朝食の時間やし行かな間に合わんで？ たぶんみんな集まっとるでー」

「そうだった！ テイン！ 超時空銀河美少女ピュアキュアスターズ！ 吶喊します！ うおおおおお!!! レガンダムハダテジャナイ！」 ガラガラガラ

「アリシア……効果音パワーアップしてるね……。なんかさつきから人の声に聞こえるんだけど……」 タツタツタ

「フェイトちゃん……アムロも人類に失望しとらんかったんや、これがニュータイプの革新なんや……。さすがレガンダム、さすがニュータイプ」 ガラガラガラ

「はやてが何を言っているのか私には全然わからないよ……」

やってきました原っぱ。なんもないな、一体ここでどうやってサッカーするつもりな  
んや?このまま結界も張らずになのはちゃんのエクセリオンバスターブレイクシユ  
トぶつ放したら海鳴どころか日本沈没やで。さすが魔王、ペタジュールは伊達やない  
な。

「おい、銀河美少女。このまま超次元サッカーの練習をするつもりか?我に日本を沈没  
させたいのか?さすがにまだ管理局に捕まりたくはないのだが」

自分の魔法が世界を滅ぼすつちゆう自覚あつたんやな、なのはちゃん。

「ふっふっふー！見よ！テテーン！この機械はママが僕がトイレに行ってる5分の間に作り上げた超次元サッカー用のバーチャルワールド発生マシンだー！テレレレテツテツテー！」

「アホ、勝手にレベル上がんな。まあ5分やて、プレシアさんやから仕方ない。で？そのバーチャルワールド発生マシン…名前長いな、バフでよかる。バフ、どうやって使うんや？」

「はやて、バフって…MMOの補助魔法じゃないんだから…もうちよつと良い呼び方があるんじゃない…？」

ええやん別に、バフで十分やバフで。それよかはよ説明したつてやー、みんなボーっとまつとるで？ん、めずらしいな、ヴィータまで来たんかい。すずかちゃんとアリサちゃんは来とらんようやな、魔法使える子供達しかおらんのか。

「えつと…なになに…『まずは容器の中から薬剤を取り出して、容器の線の部分まで水を入れます。そのあと薬剤を容器の中に入れ、周囲から1m以上離れてください。約1分ほどで煙が出ますのでその間に部屋から退出してください』……?なんだこれ?」

「それ、黒いガンダ…げふんげふん。黒いGを退治する奴じゃないのか…? いったいプレシアさんが何を元に開発したのか僕はとても気になるよ…」

クロノさんがガンダムファンやちゅうことが知れ渡った一瞬やったな。どおりでどこかで聞いたことのあるセリフが出てくると思っただわ。そんなに将来ガンダムに乗れんのが悲しいんか…? いつか絶対主役になれるって、気にせんでえな。

「アリシア、ここにボタンついてるよ? これじゃないの? 母さんの字で、押したら10秒以内に遠くに放り投げなさいって書いてあるよ?」

「さっさと押すのだ、なんならアタシのグラーフアイゼンで遠くまでブツ飛ばしてやる  
よ」

おっしや！行くでアリシア、ヴィータ！

「よし！いづくぞおお!!ゴルデイオンハンマー!!承認!ビシイ!」

「セーフティデバイス、リリース!」ポチ

「光になれえええ!」カツキーン!

「君たちのその謎の連携はいつたいどこで培われてきたんだ?しかもまったくもって意味が分からない…」

「おつ、よつと。なかなか難しいな…。ふむ…ブレイズキャノンを直射型から変えた方がいいな、歪曲射撃型にしてボールを包んだまま相手を迂回させれば…」

「超☆銀河美少女!ボールをゴールに向かってシュート!チョウエキサイティーン!」

「ブリッツアクション!アリシア、私は簡単には突破できないよ!ソニックムーヴ!」

「高町にやのは!アタシのグラーファイゼンの錆となるのだ!シユワルベフリーゲン!シューツ!!」

「我が名はバスターカラミティホワイト・T・『な・の・は』!逃げも隠れもせん!こおおおい!ディバイーン…!」  
「B u s t e r!」



「う？高町にやのか？」「ちっがー！私の名前は高町な・のは！ちゃんと名前を呼んで！」

みんな思い思いに遊びよんなあー。してもクロノさん器用やな、もうブレイズキャノン曲げよるわ……。わたし？小休止や。立ちっぱなしもなかなかキツツイしなー、なにやり歩けるようにしとるとF4Uで魔法が使えんからポンコツ夜の書しか使えへん。お、そうや！サッカーに使えそうなおもろい魔法とかのつとらんかなあー。

「はやてたん、みんなと一緒にサッカーしないの？なら吾輩と一緒にミノムシごっこでもしようでわないかーデユフフwww」

「なんやユーノ君、ミノムシごっこって。またわたしに緊縛プレイさせるつもりか？わたしが縛られたいんはクロノさんからだけやで？」

「吾輩も緊縛プレイは、なのは様以外はお断りでござるーwwwはやてたん、気が合う

なwww」

「ガーン。ユーノ君と気が合うなんてシヨックが隠し切れへんでー。うわー死んでまうー。ところでユーノ君はなんでフェレット状態で縛られとんのや?」

「なのには迷惑がかかるからさ、僕だつてなののはの評判を落としたい訳じゃないからね。まだフェレットだったらマシだろ?それに魔法を知ってる人の前でしかこんなかつこしてないよ」

「なんやユーノ君、普通にしゃべれるんか?そうや、どうしても聞きたいことあったんや。なんで初めて会ったときにあんなに暴走しとったんに、最近はまったく音沙汰なしやったんか?クロノさんが家に住むようになってくれたんは嬉しいんやけど…なんか違和感がぬぐえんねん…何を考えとるんや?」

「……………」

「最初に会った時もおかしかったんや。わたし、アリシアとフェイトちゃん、そしてなの

はちやん。なんでこの4人だけ狙ったんや。うちにはヴィータもおるし、完全にわたしだけ狙う意味はないやろ？あと、なんでこれからはわたしのパンツだけを狙うとかクロノさんに宣言したんや。守ってくれって言うのとかわらんで？わたしらに危機感持たせてホンマは何がしたいんや？」

「…………。そこまでわかってるなら僕がなにをしたのかまでわかってるんでしょ？詳しくはまだ話せない。ただひとつだけ言えるのは…

僕はある目的を持ってこの時代に戻ってきたんだ。あの時の事を…なかったことにするために」

「ん?なんやこのページ…『第602頁収集魔法、忍法・亀甲縛りの術』!?」

「ぎゃああああ!!なんだこれはああああ!!う、動けな…はうつ!」キーン!

「あ、銀河美少年にピンポイントアタックが…」

「しかも当たったのは超一撃のビームマグナムだろう…」

「あ、空中から墜落してくる…撃墜なのだ」

「確実にチャンスステップ発生だね」

「テラウラヤマシスwww」

第二九話 「なぜ、分かり合おうとしない！悪いがつ…ここまでだつ！」 ええなあ…わたしもガンダムごっこしたいなあ…

夏真つ盛り！今年はいっぱいみんなと遊ぶでー!! 今までの鬱憤を晴らさせてもらおうやないか！待ってろ！ひと夏のあばんちゅーる？

『クロノの行ったフラグ立てを…この私が、破壊するツ!!』

魔法少女    リリカル    おわた    o r z

第二九話 「なぜ、分かり合おうとしない!悪いがつ…ここまでだっ!」

ええなあ…わたしもガンダムごっこしたいなあ…

「ちつ…あとすこしでクロノが戦闘不能になるところだったのに…しつこいんだよ!!ア  
リシア、次は絶対に決めるよ!フォトランサー!さあ始めよう、来たるべき未来の為

にー!」バババシユツ!

「もちろんだ!パウツ!絶対銀河美少年をやっつけて、はやてを僕たちのものにしてみせる!ダキシメタイナツガンダムツ!超銀河☆アリシアスペシャルツ!そのどおり、僕の無理でこじ開けるっ!!」バシユウ!

「くっ…僕は戦う為に来たわけでは…。君たちがなぜ僕に敵対意識を持つのか全く分からない…その件について、僕たちは分かり合う必要がある。答えてくれっ!君たちの目的は!」キュイン!

「私も参加するのとおお!!デバイスを使ったとんでもねえ戦争って奴によおお!!」

「Which rock shoot?」

「たぶん話しても意味なんてない、何も…何も変わらないっ!はやての救世主なんだよ、この私は!」

「Sorry. Thunder Smasher!」ドドドドツ!

「フェイト! そんな甘ったれた奴の言うことになんか耳を貸す必要はないぞ! キイイン! 捉えたつ…バルフィニカス! 僕は…君を倒すつ! ワタシノミチヲハバムナツ!」

「クソツ! 迎撃する! なぜ…なぜだつ! 君たちは分かり合う気はないのかあ!!! トランザム!」

「TRANS—Assault. Mode.」ヒイイイン!

「全部まとめて全力全開! 行けよお! フアング!」ジャキイン!

「Master… Are you Devil?」

「なのは!? くつ…だけどつ! トランザムが自分のものだけだと思わないでほしいね! その傲慢な態度はよくないな! バルディイッシュユ!!」

「Yes Sir! Sonic Form… No! TRANS—A. M. !」ヒイイイン!

「この気持ち! まさしく愛だつ! 僕は…はやてが好きだああ! キミガホシイイ!」



「悪魔でいいよ、悪魔らしく…消えちまいなああ！チヨイサー!!」ドオオ!!

「君たちは歪んでいる！その歪み…この僕が断ち切るっ！僕がっ…執務官だっ!!」ガガ  
ガッ！

「世界の歪みがここに集結しとる…いったいわたしはどうすればええんや…ああ…  
ヴェーダ…」

「ハヤテ!! ケーキの兄ちゃんの声がするよ！今度会ったらお礼しようと思ってたんだ！  
探しに行つてくる！」タツタツタ…

「拙者も参加するでござるーwwww僕はAEUのエース(笑)富士見のスクライアだつ  
wwww模擬戦では負け知らずの、スペシャル様なんだよーwwww」ピヨーン！

ユーノ君、なんで自ら撃墜フラグ立てていったんや…今日は00ネタかいな、それにしてもクロノさん主人公しとるな…そんなあなたにメロメロや…!めっちゃかっこええで!それに、わたし好きやで、せったん。フェイトちゃんはどっちゃかってえとアレハレやないんか、戦闘スタイル的に?それにしてもバルディッシュ、えらいノリがええな…!意外に気に入ったんちゃうか?アリシア、あんたグラハムさんが乗りうつとるんか?その変態機動と効果音…そして、わたしはアンタの気持ちに応えられんで…。なのはちゃんはブラスタービットをファング扱いすんなや、なんでブチ当てとるんか?質量兵器やろそれ…。あと、微妙に原作のネタ入れんなや。

「ところがギツチョン!」ズドドド!

! 「無駄だ!僕は、示さなくてはならない!この世界と…来たるべき対話をつ!」シユイン

「フヒツｗｗｗ流れ弾がｗｗｗｗ!僕はスペシャルで…模擬戦なんだよーｗｗｗｗ」ドカーン!

「ズルイズルイ！みんなしてわたしのことほっぽってガンダムごっこ始めるんやもん！放置プレイもいかげんにしいや！せつたんの背中ぐるぐる回されとるサジ君の役でもくれてええやないか！」

「すまなかつたはやて、でもそれだと必然的に僕の背中に括り付けられるんだが…。さすがに僕もあの弾幕の中を無傷で抜けるのは厳しすぎるし…」

「くっそー！強すぎるぞガンダムマイスター！ビシユ！」

「はやて！私の背中があいてるよ！私の頭はツインドライブだから大丈夫！」

「フェイトちゃん、頭はツインドライブじゃなくてツインテールなの…」

「フェイトちゃんの頭ん中がツインドライブくるくるパーなんやろ」

「ふぎゅ!!」

ふいー、いい湯やったなあ…。結局ヴェータはどこまでいっとったんやろうな、ちかくにグラハムさんがおらんかったって帰ってきたけど…。そりやそうや。アリアアの効果音やったんやからな。ん?外が騒がしいな、そろそろ夕飯やからか?それとも…なんか始めたんかな?

「おお、久しいではないか燃える男のバーニング！」

「ハアアア！筋肉全開！また会ったな…今度こそ、この体で…見極めさせてもらおう！  
フンツハアア!!」

「あらあら、おひさしぶりです。どうしてこちらへ？休暇ですか？」

「ハツハツハ！久しいな皆！あえて言わせてもらおう！ギル・グラハムであると!!」

「ケーキの兄ちゃん！やっぱり気の所為じゃなかったんだな！」

「おろ？この御仁はいったい誰でござるか？」

第三十話 「なぜ、テメエがここにいる! 答えろお!」 ベ  
：別人やなかったんか：歴史はいつたいどこまで狂つと  
るんか!

夏真つ盛り! 今年はいっぱいみんなと遊ぶでー!! 今までの鬱憤を晴らさせてもらお  
うやないか! 待ってろ! ひと夏のあばんちゅーる?

『まったくもってナンセンスだな!』

魔法少女    リリカル    おわた    o r z

第三十話 「なぜ、貴様がここにいる！答えろお！」

ベ：別人やなかったんか：

歴史はいつたどこまで狂つとるんか！

「はやてちゃん？私たちは先に夕食の手伝いしてくるからね？」

「おー、了解や。みんなの事をお願いするでシヤマル。それにしても久しぶりやなグラハムさん、どうしてここにいるんか? 変態機動しすぎて会社クビになつたんか? やっぱり思つた通りやつたわ」

「随分なご挨拶だなはやて嬢。いまさらグラハムスペシヤル程度で私はクビにならんよ、貨物室がぐちゃぐちゃになつたことはあつたがね、まったく…E U め! あんなところで軍事演習などしおつて…私の顔に泥を塗るか!」

ハツハツハ! やあらへんでグラハムさん…グラハムスペシヤルしとつたんかい!  
ジャンボジェットですんなや! 変形か!? 変形するんか!? もう驚かんと決めとつたが  
やつぱりこの人は生まれる時代と場所をまちがつとつたで…

「今日は会社の同僚たちとバカンスに来ていたのだよ。それにしても偶然…いや、これぞおとめ座のセンチメンタリズムな運命と言うやつだな! ハツハツハ! そうそう…紹



介したい者たちがいるのだ、出てきたまえ！」

「にゃー」

「にゃんこ！グラハムさんにはゃんこ飼つとつたんか!?かわええなあ〜!!」

「私の猫…：ハワードとダリルと言う!!二匹ともメスなのだがね！」

ももももももふふにゃんこにゃんこにゃんこ！かわええにゃんこ！世界はにゃんこの光に包まれたああ！おほー！

「めんどくせえな…：オイ嬢ちゃん！そろそろ夕食の時間だから呼んでくるようになって  
シヤマルに言われてきたんだが…：入るぞ」

「にやーにやーにやんこー、かわええにやんこー!ぬ、クライドさんか?もうそんな時間  
なんやな」

「む…?クライド?どこかで聞き覚えが…まさか…」

「ここにいたのか嬢ちゃん。もう夕食の時間だ…つて貴様…グラハム!?ようやく見つけ  
たぜ、本局から抜け出してきやがつて!テメエ提督なんだからいつまでもフラフラして  
んじやねえよ、俺達はテメエを探してこの星まで来たんだよ!」

「ずいぶん言いようだな、クライド。私は君の探しているギル・グラハムなどと言う魔  
導師ではない!私の名前はグラハム・エーカー!生粋のフラッグファイターなのだよ  
!」

「ごまかしきれてねえから!?!ボロボロ情報漏れてつから!このドアホ!だいたいフラッ  
グはテメエのデバイスだろうが!まず、地球のダミー会社で働いてんじやねえよ!?!まっ  
たく意味わかんねえから!?!」

「ハツハツハ！さすが我が宿命のライバル！では、はやて嬢！失礼する！行くぞ、ハワード！ダリル！私は我慢強い男なのだ！あんな狭つ苦しいところに好き好んでいる訳がないだろう！私は空を飛ぶために生まれたフラッグファイターなのだ！！」ダダダダ

「は、はい！ま、まっつてえーお父様！！」テテテテ

「オイ！！まちやがれええええ！！テメエには俺のボーナスがかかってんだよおお！！」ダダダ

「えつと…どういふことなんや…？」

結論から言うと、グレアム×（アリア+ロツテ）∥グラハム×（ハワード+ダリル）÷フラッグファイター+クライドの方程式が成り立つ訳やな…ってんな訳あるかい！！結局グラハムさんはグレアムおじさんやつたつちゆう訳か。真に悲しきはリーゼアリア

とリーゼロツテや…名前が…くっ! 涙がとまらへん!

「約束された勝利の肉(肉スカリバー)!」

「肉の軍勢(アイオ肉ン・ヘタイロイ)!」

「天地乖離す開闢の肉(エヌマ・肉シユ)  
!!!!」

「破魔の肉薔薇(ゲイ・ジャ肉)  
!!!!」

「「「おおおお! 我が手に肉を!!!」」」

「めっちゃうまいなー！土郎さんは焼きそばとかも作れるんか！次はたこ焼き作ったってやー！」

「いいよ、でもあつちの焼肉には参加しないのかい？君のところの家族が第4次焼肉戦争はじめちゃってるけど…」

「ええんや、みんな聖杯の泥みたいに焦げてもうた肉でも食べばええんや」

うちの家族は食事中くらい静かにできんのか！周りからも注目されてもうて、わたし恥ずかしくて穴があつたら入りたいで！！

「はやて！焼きトウモロコシ持ってきたよ、私が愛情込めて焼いたからスツゴク美味しーよー！」

「はやてもこっちのテーブル来なさいよ。たまには子供達で騒ぐのもいいじゃない」

「おお、フェイトちゃんありがとうな。すまんなすずかちゃん、今行くわ」

「私、子供じゃありません、少女です。キリッ!」

「アリシアちゃん? 突然どうしたの?」

「流派東方不敗が名のもとに! 超級霸王電影弾!!! ばあくはっ!」 ドゴーン!

「「ぐはっ…我々の…我々の肉があああ!!」」

「おや、少々やりすぎましたかな?」

「鮫島あ、やりすぎだよお……」

第三一話 幕間4 執務官とは。

みんな、すまないな。今日の主役は僕がやらせてもらおう、と言つても執務官の何気ない日常なんだがね。

『くっ、そんな所に質量兵器を設置するとは……卑怯な！』



魔法少女　リリカル　おわた　o r z

第三一話　幕間4　執務官とは。

「では、行つて来る。はやて？最近ユーノの奴が大人しくなったからと言つて気を抜くんじやないぞ？　いたい奴は何を仕出かすかわかったもんじやないからな？」

「あはは、わかつとるつてクロノさん。ほな、お仕事頑張つてえや！わたしも今日から聖様に編入やし…大丈夫やろか…」

「まったく、いつもの元気はどこに行ってしまったんだい？ 聖祥にはなのは達もいる、君は分け隔てなく人と接することが出来るんだから嫌われることなどないさ。僕が保証する。だからそんなにビクビクする必要はないと思うがね。僕の好きないつもとどおりの元気な笑顔でいればきつと大丈夫さ。」

「……………あかんよクロノさん、こんな朝っぱらからなに女の子口説いてんねん…。そや！…につししし…」

「ん？ どうしたんだい？ 独り言しやべってたと思つたらへんな笑い方をしだして…」

「なんでもないで！ ほら、仕事遅れるで？ 行つてらっしやいダーリン♡ こうしていると新婚さんみたいやな」

「…！ その割には随分とまあ幼い妻だことだ。夕飯までに帰れないときは一度連絡する。もう11月だ、帰りに寄り道して風邪ひいたりしないようにな。フツ、では行つて来るよ嫁さん」

「ふぎゆ!!はうはう…いつてらっはい…」

「自分で言い出して照れないでくれよ…」

執務官の朝は早い。職場であるアースラまでは転移で一瞬なのだが、地球時間でいう午前6時には仕事を始めなくては片付かない。僕が八神家で暮らし始めてもうすぐ4カ月が過ぎようとするが、相変わらずはやては毎日朝起きて僕が家を出るのを見送ってくれる。まあ…毎朝のはやてとのやり取りが結構気に入ってるのは僕だけの秘密だ。

「副艦長!!もう6時ですよ!!いい加減起きてください!!朝御飯食べないと仕事に合いませんよ!!」

「ぐー！すびー！むにやむにや…お？クロノか……。おやすみ…」

「こんの…ダメ親父がああああ！！！！」

…。  
だからといって毎朝の仕事が父さんを起こすことだなんて絶対はやてには言えない

「む、この案件は局に資料の請求をしなければいけない…。そういえばこのあいだ起きたジュエルシード事件の報告書の追加資料を纏めて報告しなければいけないだった。あと…はやてを聖王教会に連れて行く日は…来週か」

ジュエルシード事件…嫌な思い出だ。次元震の反応を感知してあわてて飛び出したものの、まさか半泣きになって逃げまわっている金髪少女を白い悪魔から助けることとなるとは夢にも思わなかった。うう…しばらくピンクのものは見たくないな、思い出してしまった。

「つと、どこにしまったんだっただんな…たしかフォルダ名は『フェイト、散る』だったはず…あれ? 『なのは、大地に立つ』だったっけ…。あつた、『すれ違い、空』のフォルダか。これと…このファイルを送信つと」

ビービービー!

「クロノ執務官! 仕事です。今すぐブリッジへ!」

「艦長!?! 了解しました!」

「第38無人世界に魔力反応をサーチ。どうもきな臭いわね…あの世界にはカエルみたいな生物のピョンキチ君以外は生息してはいないはずよ。魔力反応を持つ生物なんているはずがないのに…。渡航禁止区域だから一般人もいないはず…」

「たしかに怪しいな。魔力量からいつて推定AAランクか…俺かクロノがいけばなんとかなるな。どうすんだクロノ？」

「副艦長は残っててください、僕一人で行きます。最近このあたりの次元世界に次元犯罪者が逃亡した可能性があるらしいので、真偽のほどを確かめてきます」

「わかりました。ですがクロノ執務官、危険と判断したら速やかに帰還すること」

「了解です、艦長」

「たしか反応があったのはこのあたりだったはず…地上には一切魔力痕跡がない…」

「どういふことだ？このあたりを少し回って見たものの、辺りに住んでるピョンキチ君にはおかしな行動は見られなかった…ということはやはり地下か。」

「ふむ、なら…S4U。金属反応探知、半径2km」

【Scanning Start】

やはり地下になにか研究施設があるという訳か。こんなところにあるということは違法研究施設の可能性が非常に高い……。ん？東に700mのところの出入口か……。少し中を調べる必要があるな……。蛇が出るか鬼が出るか死神が出るか魔王が出るか……。もしかしたら美少女（笑）かも……

「フフツ。我ながらアホなことを考えてしまうとは……。いかん、ツボにはまってしまった……。ククク……」

「だから（笑）つけんなやああああ  
!!!!」

「ふえっ！どうしたのはやて？突然叫びだして？」

「いや、今な？誰かわたしのこと美少女（笑）って言った気がしたんや……。わたし、美少



女（笑）やないやろ？な？」

「……………」フェイツ

「……………」ナノツ

「……………」キラツ

「……………神は言っている、ここで泣く運命ではないと…。わたし、負けへん…。ぐすん」

「結構前に廃棄された場所のようだな…。このぶんだと半年以上前だろうか…」

なになに…細胞をもとに元となった人物の再生を試みる…こっちは、戦闘に特化した  
機人を作り出すためのデザインベイビー…

「ちっ…完全に黒って訳だな。命を冒した研究がおこなわれていたってことか!」

「いったいこの研究を行う為にどれだけの命が犠牲になったんだ!許さないぞ、絶対に  
首謀者を暴き出してやる!…ん!?声が聞こえる、例の魔力反応だな!」

「クツクツク…ハアツハツハツハツハツハ!!!!実に愉快だ!ここまで愉快なものは久しぶりだ  
!ハツハツハツハ!どうだい?吾輩に命を握られている気分は…ねえ、どんな気分どん  
な気分!?!ハツハツハ!」

「や…やめてください！ひつ、そこは！あ、あれは…爆弾!？」

「クツクツク、さよならだ！爆弾に燃やされるか、吾輩のガトリングガンで蜂の巣にされるか選ぶがいい！そして潔く死ぬがいい！ハツハツハ！」

「そこまでだ！次元管理局執務官！クロノ・ハラオウンだ！武装解除しておとなしく……」

ドツカーン！ウワアア！

「ああ！ドクター！私の質量兵器マンが死んじゃったじゃないですかー！」

「クツクツク、君が防弾チョッキに穴をあけてしまったのが敗因だよ。それじゃあ装備できないじゃないか。おや？お客さんかい？いらつしやい、君も一緒に質量兵器マン4でもしないかい？」

「えつと…次元管理局執務官のクロノ・ハラオウンです。少しお話聞かせてもらってもいいですか？」

「ああ…今日も疲れた…。もう夜の10時か…、仕事で夜遅くに帰るって…まだ20歳にもなっていないのに…がんばれ僕。がんばれサラリーマン。がんばれ世界中のお父さん……。はあ…今帰ってもはやては寝てしまっているだろうな…。ただいまー」キィ

「おかえりクロノさん！待つとつたでー！あんな、今日いろいろ楽しいことやら、なんやらかんやらがあつたんやで！ご飯食べながらでええから聞いてえな！」

「……………！ ああ、もちろんだとも。僕も今日、なかなか愉快な人たちと出会ってね…  
まったく、何も玄関で待つてなくてもいいだろうに…」

この笑顔があるからこそ…僕は執務官を続けられるのだろう。きっと。

第三二話 性王教会：なんと卑猥な響きや…! 「君の頭の中の方がよっぽど卑猥だよ…」

そう…ここが第三部の舞台になるミッドチルダや! きつといろいろ変な店があるんやろうな。お! これは…ピカチユウのぬいぐるみ!? なぜここに売つとるんや!?

『この女狐がつ!!』 『狸じゃないんだ…』

魔法少女    リリカル    おわた    o r z

第三二話    性王教会…なんと卑猥な響きや…!

「君の頭の中の方がよっほど卑猥だよ…」

「おおつ、ここが話に出とつた性王教会つちゆうところやな…なんと淫靡な王様を崇拜しとるところやろうか…きつと変態レベルが高ければ高いほど上にいけるつちゆうシステムなんやろな…うむうむ」

「きゅくく! きゅくきゅく!」

「聖王教会だ。そんな卑猥な王が古代ベルカにいてたまるか! まず、そんな王様崇拜するか!」

「いややでークロノさん。さすがのわたしもちよい緊張しとるからそれをほぐそうとしたいだけのウイットにとんだジョークやないかー」

「自分で言つて緊張がほぐれるのか僕は凄く疑問なんだが。やはりー回、君の頭の中を精密検査してもらうしかないようだな…大丈夫だよはやて。痛くないから」

「その哀れな目線くれるのやめてんか!? ああコイツも結局は…みたいな顔せんといてや! みつともなく泣くで!? 大声で泣くで!」

「きゅくー? きゅくるー!」



「クスツ…はいはい、こんなところで痴話ゲンカしないでくださいな。ようこそいらつしやいました、クロノ執務官に八神はやて様、ぷちトマト様。私が案内人を務めさせていただきます、シスターシャツハと申します。本日はよろしく願いますね」

「ああ！すみませんシスターシャツハ。教会の前で長々と話し込んでしまいました…、約束の時間に遅れてしまい申し訳ありません」

おお、この人がシスターシャツハか！なるほど…トンファ一流を極めていると見た！きつとそうに違いないで…なぜなら、この世界の人はどっかバグつとるに決まつとるか。うん。そうにちまいない！トンファークック！

「いえいえ、まだ約束の時間まで余裕がありますよ。あいかわらずクロノ執務官は時間に厳しいですね…まったく、ヴェロツサにはクロノ執務官の爪の垢でも煎じて飲んでもらわないといけませんね！いつもいつもフラフラとどっか行つて…！」

「ははは、ヴェロツサの奴もあいかわらずみたいですわね。おっと、紹介するのを忘れていた。はやて、こちらが本日お招きに預かっている騎士カリムの秘書であるシスター、シヤツハ・ヌエラだ」

「…!? あうあう…:きよ!きよ!わ、わざわざおによびしてもうて!ありあとごじえました!八神はやてでちゆ!こつちは…わたしのぷちトマトの使い魔です!」

「きゆくつ!」

あかーん!あまりに普通の人過ぎて逆にビックリしてもうた!噛んでもうたのはまだええ!『でちゆ』!?!これはあかんやろ!!うわああ!穴があったら入りたい…:ぷちトマトの使い魔ってなんや!?!あかん、このあと騎士カリムにも会うんやで?またトチツて噛んでまうかもしらん…:ウヴオアアア…

「クスクス…:はい、お気になさらずに。クロノ執務官…:この子とつてもかわいいですね。」

私に譲ってもらえませんか!? 妹にします! これは決定です、異論は認めない! 私、妹が欲しかったんです!!」

「いや…あの…今日は別にはやてをシスターの妹にしてもらうために来た訳では…それより騎士カリムを待たせているのでは?」

「いや、正直カリムなんてどうでもいいんで。そんなどうでもいいことより! はやてちゃん! 今日から私の事をおねえちゃんって呼んでね!」

「ほあっ!? な、なんでこんなことになつとるんか!? わたしが心の迷宮を彷徨つとる間にいったい何が!」

「いや…あの…どうでもいいことじゃなくて…騎士カリムが…約束の時間過ぎてるんだけど…」

「ぎゅくー」

「で。シャツハ、何か申し開きはあるか。俺をこれだけ待たせたんだ、どうでもいい理由だったら今晚からロツサと一緒に布団で寝ろ」

「ロツサと一緒に?!なんて嬉し恥ずかし…じゃなくて! 騎士カリム! はやてちゃんが可愛くて私の妹なのがいけないんです!」

「ふむふむ…なるほどわからん。とりあえずロクなもんじゃねえな…とりあえず、そのハヤテの為にクラガナンで一番美味しいケーキ買ってこい。ダツシユな」

「はやてちゃんの為なら…私は今、光になる!」 ダダダ…

アホや…真正のアホや。やっぱりこの世界にはアホしかおらんちゆうことが再確認できたわ。トンファー流より性質悪いで…

「おいクロノ。このちつこいのが綾崎ハヤテか。へえー、少女よ。運命とは実に残酷だが、借金なんかには負けるなよ。聖王様はちゃんと見てくれるはず…とか適当に言つとけばいいか」

「いや、借金執事ちゃうし…八神はやてや。そして信仰心の欠片もないんかい…いったいどうして騎士になったんやこの人…」

「合法的にニートできるからに決まってるだろ。適当にレアスキル発動させてりや仕事しなくて済むなんて最高の職場、他にないぜ」

誰やこの人…：中身全然ちゃうで…：見た目はそのまま騎士カリムなんやけど、絶対中身ちゃう。なんかこう…：悪徳業者とかマフィア的な二オイがするで…

「はあ…騎士カリム、人の名前覚ええないのはあいかわらずですね。あと、ちゃんと仕事してください…別にニートじゃないでしょうが…、ヴェロツサから聞きましたよ? アイツに全部の仕事押しつけてるそうじゃないですか…。シャツハには黙ってろって言われたせいで毎回会うたびにどこほつつき歩いてんだって無実の罪に問われるってばやいてましたよ」

「へつ、義弟なんて使ってナンボだろうが。そうそう、ヴェロツサが今、俺の執務室に監禁…居るからたまには顔でも見てつてやれ。…そういえばそろそろ最後に飯食わせてやっつてから丸2日ぐらい経つな…」

「ヴェロツサー! 待っているろ! 今行くからな! だから…死ぬんじゃないぞ!」ダダダ…

「きゅつくー♪」パタパタ…

「あつ…クロノさん…。ぷちトマトも行ってもうた」

「ふう……、で？騎士カリム。人払いしておいて一体わたしに何の用や。夜天の書の話だけじゃないんやろ？だったらクロノさんまで追い出す必要があらへん」

「ククツ、頭のいい子は嫌いじゃないよ……さて、八神はやて。交渉と行こうか」

あかん、なんやこの人。腹黒とかそんなチャチなもんちやうで……でも、わたしかて将来管理局の子狸言われとるんじゃ！素養はあるはず！まけへんで！

「俺のレアスキルについてはクロノから話があつたかもしれないが『予言者の著書（プロフェーティン・シユリフテン）』って言つてな、まあ要はよく当たる占いのモンなんだが。ここ数年変な予言が出てきていてな……どうもキナ臭い感じがして、その予言の当事者である君に少し協力してもらいたいと思つてね」

「ほうほう、予言の当事者…ね。いったいどんな予言なんや? 残念やけどわたしは大した力をもつとらんで? 我が家のヴォルケンリッターの戦力を当てにしとるんなら個別に話持ちかけてもらわな、決定権がわたしにある訳ちやうからな」

「ククツ…つれないねえ…。まあそこはいい、予言については訳したものがここに。まずそれを読んでもらってから話を進めようじゃないか」

「ほなF4U翻訳お願いな。「おーるらいと」えつとなになに:『新暦007X年、ミッドは魔王の光に包まれた:草木は枯れ生物は絶え管理局は壊滅し、あらゆる生き物が絶滅したかに思えた:だがしかし、人類は滅亡してはいなかった!』ってなんじゃこりや!世紀末魔王伝ナノハの拳でもやるつもりか!」

「ずいぶんと前衛的な詩だろう。君の記載が出てくるのはその先だ、どうも魔王と不滅の楯に対する抑止力となる夜天の王と金色の死神、あと黒の英雄つてのが出てくる。なぜかよく出てくる言葉に『その現実と常識をブチ殺すなの!』つてのもあるな。最後の



言葉はよくわからなくてな…一応ミッド語に訳しておいたんだが…」

「うわー、非ッ常に嫌なそげぶが出てきてもうた…。そうやな、事件は新暦0070年から0079年までの間に起こるつちゆうことと、夜天の王つてのがわたしの事で間違いないあらへんつてことが読み取れるやろうな」

「そういう訳でね、相手も時期もわからないことから君に夜天の書の協力だけではなく事件の解決も依頼したいと思ったわけだよ。報酬としては、君を騎士として認定することと、局において現在3尉の待遇を用意することが出来る。その待遇からなら事件の発生時に迅速に対応できるぐらいには出世できていると思うんだが…どうだい、悪い話じゃないと思うんだがね」

ふむふむ…実際のところ、新暦0075年にはStSがあるからその期間になのはの乱がおきる可能性があるあるつちゆう話か…それにしてもいったい何が原因でなのはちゃんはミッドにスターライトブレイカー打ち込むかな…気分やろうな、きつと。あと不滅の楯つてユーノ君の事やろうな…この前アリシアと模擬戦しとるときにユーノ君を

フェレット状態で右手に縄で縛り付けて楯代わりにしとったし…黒の英雄に関してはたぶんクロノさんやろうな…黒ノ…ヒーロー…、魔法執務官マジカルクロノ! チャツキーン★つて感じやろうな。

カリムの予言については必中やない、当たらない場合もある。という考え方もできる訳やから、私が中学卒業するまでになのはちゃんを矯正して、見張りをフェイトちゃんやヴィータに頼めば何も問題あらへんつちゆうことやな…ならあとはどれだけカリムから有利な条件を引き出すかやってことか…

「ひとつええか? 騎士として認定つちゆう話やけど、夜天の書が古代ベルカの貴重な文献やつちゆう話での認定やったつけか? もしそうやないんなら…別にわたしの家族は教会やのうて管理局に入っても全く問題あらへん訳やから、管理局でシグナム達にがんばってもらうつてもアリやな。古代ベルカ式の使い手…そっちとしては喉から手が出るほど欲しい人材とちゃうんか? それにミッドが崩壊するつちゆう予言なんやろ? やつたら報酬がちと少ない気がするんやけどなあ…?」

「くっ…そうだったね…。では、騎士の認定については夜天の書での協力…ということ

で、報酬については…そうだな、ならミッドでの拠点を贈ろうではないか」

「うーん、そうやな…。拠点については新暦0070年からでええわ。あとは、そうやな…指揮官としての勉強をしたいから、士官学校に通えるよう計らってもらいたいねん。それに騎士つちゆう訳やからもちろん給料出るんやろ？さすがにグラハム提督から厚意で援助してもらつとるからちよつとは負担にならんようにせなんしな…」

「ふむ、そのくらいなら全く問題がないだろう。拠点については大豪邸つて訳にはいかないがな…。給与については問題ない。古代ベルカのデバイスなら技術的な分野や史実的な分野から見たコストパフォーマンスが良過ぎるからね、相当な額が出ると思ってもらつていい」

「なら交渉成立や。これからよろしゅうな、騎士カリム」

「俺の事はカリムでいい。よろしく頼むぞ、はやて」

「きゆくつ!」

「どうしたんだいはやて? 聖王教会からでてからずっと非常に性質の悪い悪巧みをしていそうな顔なんだが…僕がいない間にいったい騎士カリムと何の話をしていったんだ?」

「いややなークロノさん、わたしかて女の子なんやから顔が悪いだなんて失礼やでー。ま、夜天の書での協力に関する話やったよー」

「夜天の書だけかい? リインフォースは現存する古代ベルカのユニゾンデバイスだろうに…その話はしなかったのかい?」

「あやー! すっかり忘れとったわー!」

「きゆくるー」

くつくつく…わたしが全てのカードを切ったと思っただら大間違いやでカリム…。それにしてもタダで家が入るとはな…、これから先の生活費についても安泰やしリンフォース及びこれから生まれるリインフォースツヴァイに関するユニゾンデバイスのパテントも夜天の書とは別に契約することによって、せしめられるっちゅう訳や…これが笑わずにいられるか？クツクツク…ハツハツハツハツハ！」

「途中からダダ漏れだよ…」

「うぐつ…死ぬ…」

「どうしたんですか騎士カリム？はやてちゃんが帰ってからずっと非常に性質の悪い悪

巧みをしていそうな顔なんですけど…私がない間にいったいはやてちゃん何の話をしていたんですか?」

「嫌だなシャツハ、俺とて女性なのだから顔が悪いだなんて失礼じゃないか。ま、例の魔王の予言での協力に関する話だっただけさ」

「魔王の予言だけですか? 予言についてはもう一つあったでしょうに…その話はしなかったのですか?」

「ああしまった。すっかり忘れてしまっていたよ」

「シャツハ…僕を踏みつけてないでくれ…」

くつくつく…俺が全てのカードを切ったと思っただら大間違いだぜはやて…。それにしてもタダで管理局の手駒が入るとはな…、もう一つの予言で起きる事件に対して

活動してもらおう人材としても安泰だろうし、指揮官として勉強したといって言ってたことから部隊を自発的に作ってくれそうだからバックアップとして活動するだけでよさそうだ…これが笑わずにいられるかい？クツクツク…ハツハツハツハツハ！」

「途中からダダ漏れです…」

「この勝負、わたし（俺）の勝ちだったな！」

「ああ、つまり似た者同士だったって訳か…」

第三三話 クラガナン散策や!世界が違々と文化が違う  
!やっく!でかるちゃー!

そう…ここが第三部の舞台になるミッドチルダや!きつといろいろ変な店があるんやろうな。お!これは…アーンヴアル型武装神姫!?なぜここに売つとるんや!?

『1分の1ガンダムとか作れそうなのになあ…質量兵器扱いか?』



魔法少女      リリカル      おわた      o r z

第三三話      クラガナン散策や！世界が違くと文化が違う！

やつく！でかるちゃー！

「じゃあはやて、僕は局に用事があるからもう行くが…本当に一人で大丈夫なのか？」

「なんやクロノさん、ぶちトマトもおるから大丈夫やつて。局に行く言うても今日はそんなに時間かからのやる？その間にクラガナンの街をちよつと散策しとくだけや、それ…ここ、クラガナンには地上本部の局員さんがおる。きつと何かあつても守つても

らえるって」

「そうだな…。とりあえず夕方の方の5時ぐらいには遅くとも終わるだろうからその頃になつたら連絡を入れよう」

「ほな、いつてらっしやいなー」

「きゆく、きゆつきゆくつきゆくくるー」

クロノさんも大変やな、休日やちゆうのに報告せないかんことばかりやって。さて、ほんならクラガナンの街でも散策に出かけよか?アニメじゃほとんどどんな街かわからんかったしなあ…地球にはない最先端技術で溢れかえつとるんじやなかるうか?うは!ワクテカするなあ!

「おっしや!行くでぶちトマト!超次元巡りツアーや、シャマルの料理を超える変な食べ物とか見つけるでー!」「きゆつくー!」

それにしてもわたしひとりなんてまったくもって珍しいな…地球じゃどこにいるにも誰かと一緒だったしな。F4Uでの魔法もかなり使えるようになってきたし、歩くのは何とかなるし、もう少しリハビリしたら走れるようになるかもな。

まずは目についた店から覗いて行こかな？ん、お！新品のデバイスが売っとる店や。デバイスシヨップなんか？ほへー、ミッド式言うてもいろんなタイプのデバイスがあるんやな…。なんやこれ…レイトウホンマグロ型デバイス…？魔法が氷結系にオート変換されますとな？名前はデュランダル!?…：…なんかもう夜天の書事件の被害者はリーゼ姉妹とデュランダルに決定やな…。見なかったことにしよ…。

「ほへー…デバイスシヨップつちゆうのものなかなかおもろいな…。こりやシャーリーがグヘへ状態になるんもわかるわ。おや？こっちの棚はベルカ式デバイスやな、両手剣に片手剣、ハンマーにポウガン…モンハンに出てくるような武器ばつかな、笛とかないやろうか？」「きゅくつ!」

なんや、ぷちトマト変な反応したな?……なるほど、見た目レウス大剣やなコレ。確かにぷちトマトからしたららびびるわ。んー、一通り見渡してみただけでもうおもしろいものないなー、まあええわ。次の店いこつと。

「にいたん!こえ買つてー!」

「こらティアナ、まだデバイスは早いよ。それにしても俺と同じ拳銃型デバイスを手に取るとは…やるな!我が妹よ!よつと、高い高い」

「うー!子供あちゆかいヤダー!」

「ん?どつかでティアナちゃん4さーいの声が聞こえたような気がしたが…そんなこと無かったで。次は…そこのお菓子屋さんやな!」「きゅ!」

クラガナンのお菓子で聞いたことあるのはケーキにチョコポット、あとアイスやな。次元世界流のゲテモノお菓子とか超次元カエルチョコレートとかあるかしらん。なんだまたダンブルドアかいな、的なカードもはいとつるかしらん。

「ほへー、棚の上から下までお菓子尽しやな…。定番のスナック菓子にクッキー系、チョコレート系に…おつ、これが噂のチョコポットやな。何個か買うて帰ろ、みんなにお土産やな。ぷちトマトー何個か持ってきてくれんかー」「きゅくつー!」

えつと、籠はこれが。フエイトちゃん、アリシア、なのはちゃん、すずかちゃん、アリサちゃんユーノ君の6人分でよかろうか? 家族には別の物買うて帰ろうか。ふむむむ：包装されたお菓子とかも売ってるんやな…近くに病院があるからやろうか。おや！ ねるねるねるね！ こんな所で出会えるとは…地球に売ってなかった理由はこれなんやな！ また君に出会えて嬉しいよ！ 10個買いやな。うまいっ！ てーれっててー!

「ほなこれで会計しよか。ぷちトマト、悪いんやけど持つてくれへんか?」  
「きゅつくー!」

さて会計も終わったし…次はどこに行こうか。家電量販店とか面白そうやな!初音ミクとかAI化して売つてそうやし…もしそうやったら買って帰ろ!ニタニタ動画に旋風を巻き起こしたる!うへへ。

「あれは…八神はやて?自力で歩いているし、この時期にクラガナンに居るはずがないんだが…闇の書事件は起こらなかったのか?隣に浮いてるチビドラゴンもよくわからないし…他人の空似か?」

「おとーさん、早くー!スバルとおかーさんが店のお菓子を一緒に全部食べちゃうよー!」

「ゲンヤ、このお菓子とってもおいしいわ」モグモグ

「うーまーいーおー!!!」バクバク

「ごるあああ!!バカども!店のお菓子を買う前に食うなあああ!!クイント!お前の頭の中は4歳児並みかああ!」

「とっても美味しいの」モグモグ

「モグモグしながら言うな!!美味しいかなんて誰も聞いてねえー!!まったく…ああ、なんでこんなダメっ娘に捕まってしまったんだろうか…ゲンヤ・ナカジマ最大の失敗だぜ…。ほらクイント、とりあえず会計して出るぞ。すまんギンガ、スバルを頼む」

「私はゲンヤと結婚出来てよかった」ニコニコ

「ちっ…その言い方は卑怯じゃねえかよ。へいへい、俺もだよ!」

「ぱーだっこー」

「おとーさんは私と手をつなぐのー!」

「なんや?どっからかゲンヤさんの叫びが聞こえてきたで?どこか近くにおるんやろうか?リア充爆滅しろ!!!」 「きゅ?」

あかん暴走モード突入してまうとこやった。それにしても、なんかさつきからニアミスしとる感が否めないな…。



## 第三四話 魔法少女リリカルはやてStriker's

## 第0話 魔法少女、育ちます！

『わたしかて魔導師のはしくれ、戦う心構えくらいは持つとります！』

魔法少女リリカルはやてStriker's

## 第0話 魔法少女、育ちます！

「家電量販店なんて、どこの世界も同じなんやなあ…それにしても電気街アキバハラってなんやねん…そっくりにも程があるんやけど…」 「きゅくー」

お、ここか…エドバシ電気…なんかこれもどつかで聞いたことあるような…。まあええわ、PCコーナーが地雷やなきつと。なんか知らんがポンコツ店員とアホの子店員に次元跳躍店長がいそうな気がする。それでも…行くしかないんだー！踏み込めー！フラットアウトー！

「行くでぶちトマト！踏んで行って生き残る！それがR乗りの宿命やー！とつげ、ふぎゅー！」ドントッ！「きゅくつ！」

「む？すまない、大丈夫か？メガース、来てくれ。少女を轢いて泣かせてしまった」

「隊長!?まったく、冷蔵庫は大きいんですから周りには気を配っていただかないと…、あなた大丈夫!?怪我してるわ、ヒーリングかけないと…隊長はこの子を向こうのベンチへ運んでください！」「あぶー」

「しかし…世間では『Yes!ロリータ。No!タッチ』という言葉があるらしい、レジアスから聞いたことがある。俺は次元犯罪者になってしまうのではないか？」

「そのあまりの世間の疎さをどうかしてください！そんなの、この場合は治外法権ですー」「きやつきやつ！」

「うえええ…、ふえええ…」「きゅくー！」

めっちゃ痛いねん！泣くわ！転んだのなんか何年振りや！前世になるから10年ぶりくらいやで！うえええ…痛いよークロノさん…

「少女よ、すまなかつたな。お詫びと言つては何だが遠慮せず食べてほしい…俺の名前はゼスト・グライガンツだ。こっちはメガータ・アルピーノとその娘のルーテシアだ」

「私達は地上本部の首都防衛隊なの。今日はお休みで隊長に荷物持ちをお願いしていたのよ。ほら、私はこの子がいるから」「びやあ！」

「わたしは八神はやて言います。こっちは使い魔のぷちトマト「きゅくっ！」クラガナンには初めて来たんでちよつと散策しとったとこやねん」

あら、ゼストさんとルーラーのお母さんやったんか。ルーテシアちいちゃいな！かわ

ええ…。それにしてもヒーリングかけてもろただけじゃなく喫茶店でケーキまでごちそうになるとは…。ちよつと悪い気がするなあ…。いや、めっちゃ痛かったんやから気にせんでええか。

「む？初めてということとは他の次元から来たのか？変なことを聞くが渡航証明書とかもっているか？それとも次元漂流者か？」

「とこーしよめいしよ？そんなもらったつけ…。パスポートみたいなもんか？次元漂流者やないでー。聖王教会に用事があつてきたんやー」「きゆくーきゆくきゆく？」

「ひとりで来たの？それとも他の人と来たの？お父さんとかお母さんは？」「あうあう」

うーん、お父ちゃんとお母ちゃんは死んどるし…。なんて言えばいいんやろうか…。クロノさん言うても知らんかもしれんし…。地上本部と本局はめっちゃ仲悪いもんない！しゃあないか、年相応に振舞つとけばなんとかなるやろ！

「クロノさんと一緒にきたでー！管理局の執務官やー！」「きゅー！」

「執務官と一緒に……？ということは少女、デバイスを持っているか？なにかあつたらデバイスを見せろと言われているか？」

「あ。言うとした。身分証と財布が一緒になつとるよーって言われとつてん。すつかり忘れとつたわ」

「ちよつと見せてもらうね？……、隊長。この子、このあいだ話のあつた管理外世界で見つかったつていう古代ベルカのデバイスの持ち主ですよ」

「だから聖王教会にか、なるほど。と言うことはクラガナンについて全く知らない訳か。」

「知らなかったけど、この街めっちゃ楽しいで！変なモンいっぱいある！さつき曲がるビーム出る光線銃見つけてん！当たっても痛くないとか何に使うんやろか！」「きゅつ

きゅー！」

きつと魔法の練習用やろうな！おもちゃ屋さんとかわくわくするでー！なんでこんな楽しいんやろうか！クラガナンは最高の街やでー！

「あらあら…そうだ！もしよければこの後、私たちがクラガナンを案内…、はやてちゃん！危ない！」ドンツ

「わあ!? いったい何が…バインド!? メガーヌさんになんでバインドがかけられとんねん!?」

いったい何が起こしたんや!? 突然メガーヌさんに突き飛ばされたかと思ったら私がいた場所にバインドがかけられとる！あかん！ルーテシアもメガーヌさんと一緒にバインドに捕まつとる！

「メガーヌ！ルーテシア！大丈夫か！……これは中距離転送の魔法陣！」

「隊長ははやてちゃんを連れて離れてください！この子は私が守って見せま……」  
「シューイン！」

転送用の魔法陣……!?敵は私を連れ去るつもりやったんか？……！！まさか……ユーノ君がクロノさんを私の護衛にしようとしたんに関係があるんか!?

「クソツ！行くぞ、少女！とりあえず店を出る……狙われているらしい！メガーヌは首都防衛隊の隊員だ、なんとかルーテシアを守るくらいは出来るはずだ！」

「あわわ！りよ、了解です隊長！」「きゅく！」

「フツ……」。デバイスを持っているなら少しは魔法が使えるのだろう、期待している



ぞ八神隊員！店を出てすぐセットアップだ！敵が来るかもしれん…戦うぞ！いけるか？」

「ひゃあ！……大丈夫です！わたしかて魔導師のはしくれ、戦う心構えくらいは持つとります！」

これが、わたしが海やのうて陸を志願したきっかけになる事件やった。

第三五話 魔法少女リリカルはやてStriker's

第1話 ファースト・アタック

『わたしは負けへん。戦いを知った今のわたしは…ちいっとばかり強いで?』

魔法少女 リリカル はやて S t r i k e r , s

第1話 ファースト・アタック

「八神隊員！気をつけろ！どこから敵が狙っているかわからん！空戦魔導師がいるかもしれないから空にも気を配れ！セットアップ！」

「りよ、了解です隊長！Flower For You！セットアップ！」

「おーるらいと！Get Set Ready！」

本邦初公開！1分の1フルアーマー八神はやてや！ごめん嘘ついた。ただの初セットアツプや。バリアジャケットの設定がなぜかわからんが黒のゴスロリから変更不可以外はまったく普通…って普通なところあるか!?なんでヘッドセット付きのゴスロリやねん!?絶対リンディさんの趣味やろこれ！しかもなんで左目にパチモンスカウターがついとるんや!?絶対クライドさんの趣味やろこれ！誰を見ても戦闘力5しか表示されん！いらんわ!!

「…………。なんとというか、ずいぶんと個性的なバリアジャケットだな。しかし左目のスカウターはいい趣味しているぞ」

「変な気遣いはいらんとです！偉い人にはそれがわからんのですよ！F4U、ガトリングモード！」

「がとりんぐもーど！ガシユン！」「きゅくー」

F4Uを両手持ちのガトリングガンみたいな形状に切り替えて…右脇にしっかり抱えて左手で支えるつと…右手でグリップを握ってスカウターのロックマークが付いた

らトリガーを引く！大丈夫や…覚えとる…。これやったら連射に優れとるからそう簡単  
単に近づくことはできんはずや！

「む…変形機構を取り入れているのか。しかもインテリジェンスとは…援護射撃は期待  
させてもらうぞ！」

「は、はい！ワイドエリアサーチ！スファイア射出！半径2km展開！」

「おーらい！」バシユツ！

初の実戦や…怖い…でも、地上の英雄と一緒や！敵は……6人か!?地上に5人、空に  
1人…意外に多いで…！

「隊長！バリアジャケットの反応が地上に5人、空に1人です！そのうち4人は範囲ギリ  
ギリで固まっていますが地上の2人がバラバラにこつちに向かって来てます！正面と  
…右側面空中です！」

「了解！右の奴は俺が抑える、正面から来る奴に一発お見舞いしてやれ！」

「は、はい!!」

はあつ…はあつ…、も、目標をセンターに入れてスイッチ、目標をセンターに入れてスイッチ…射程まであと40…30…、手が震える。…20…10…は、発見！目標…ロック！オレンジの頭の奴や!?走って来よる!?ひあああ!?

「うわああああ！バレットスファイア！フルファイアー！」

「Kiiー、ぜむ、おーる！」

キユイイイン…ガガガガガガガガガガ!!!!

小型直進型スファイアの連続滅多打ちや!!せ、先手必勝!!!怖い怖い!!!

「うわあああ!!俺は、ゆ、友軍だああ!!ア、アンカー射出！」ダダダダ！バシユ！

避けられたああ!!左のビルになんか糸みたいなもの出してピヨーンって!ピヨーンって!なんか叫びよるうう!!ひやああああ!!撃ち落としたるううう!!!

「きやああああ!スパイダーマンみたいに跳ねおつたああ!いやああああ!!!」

「ぐんないBaby!」「きゅ!きゅつくー!?!」

ガガガガガガガガガガ!!!!

「ぎやああああ!かすつたああ!トリガーから指を離してくれえええ!!!」チュイン!チュイン!

こつち来よる!?!来よるよおおお?!?!だ、弾幕やああ!!クラスター型の弾幕を張るんやああ!!左舷弾幕薄いでええ!?!何やつとるんやああ!?!弾幕は…パワーだああ!?!?!?!

「こつちこんでえええ!!ブ、ブラストシューター!!!」

「しゅーと、いっつと!ばーらっじ、いず、Power!」

ドゴオ!ドゴオ!ドゴオ!

「ば、爆風がああ！バカな！ちよ！直撃だど！うぎやあああ！」 チュドーン……ポトツ

い、嫌やああああ！！！！まだ死んどらん！もう動かんでえええ！！！！

「まだピクピク動いとるううう！！！！もう嫌やああああ！！！！接近してトドメやああ！うええええん！！一・撃・突・貫！バンカアー！バスタアアー！！とつき打ち込んであげるから昇天してえやああああ？！（大絶賛錯乱中）」

「じえつとむーぶー！ひーとばいるもーどちえんじ！！D a i, j o b b ! H e, S a d, S h o w, D a d, C o l o r !!」

ドスツ、ズガアアアアン！！！！

「びぎやああああ！！！！ごふっ！！！！」



「ひつく…ひつく…はあっ…はあっ…ふう！殲滅完了や！」ゴシゴシ  
「ないすK i i r e e ! ますたー！」「きゅ…」

「お、俺は…局員…だ…」ガクリ

「いったい何をしているんだ八神隊員？」

「フレンドリーファイアね」

「えらいすんませんでつしたあああ!!!ほんますんまつせええん!!!」ゴン！ゴン！

「いや…友軍識別コード知らなかったんだから仕方ないよ、別に怒ってないからその  
ジャパニーズDOGGEZA?をやめてくれないかなあ…」

ティアナのお兄さんって気付かずに勢い余って撃墜してもうた…しかしオーバーキルやったはずなのに……

「さすが我が地上本部の局員だな、ランスター捜査官と言ったか？」

「ゼスト隊長!? 光栄です！ 地上本部の強さと言えば…回復力の強さ！ 即死でも5分で全快は当たり前です！」

「お腹が空いたわ、ゲンヤはどこ。はやく返して」

殺しても死なないつちゆうんはこういうことなんやな…ティードさんの人外スキルはとりあえず置いて…。みんなの持ち寄った情報からすると『敵は4人、陸戦3人に空戦1人』『人質としてゲンヤさん、スバル、ギンガ、ティアナ、メガーヌさん、ルー

テシアの6人』『敵は女の子を狙っているらしい』『ティアナの反応が敵が4人固まっているところにある』つてとこやな。ゲンヤさんはスバルとギンガを守ろうとして一緒に捕まったらしいし：メガーヌさんとルーテシアはわたしの代わりに捕まったらしい。近くに他の子供がおらんかったことや、近隣の地区の子供がさらわれていないことからリオンカーゴアの資質の高い子、もしくはわたしを狙った犯行やろうな。そして局員を2名も攫ってしまった敵がいまだに逃亡していないことからすると：

「十中八九、敵の狙いはわたしや。サーチ出来るのはわたしとティーダさんだけやから他の人が何処に捕まತ್ತるかわからんけど、ティアナがいることからたぶんみんな一緒なんやろ。ここから南に2kmほど行ったところみたいやね」

「ふむ、敵の狙いが八神隊員だとすると：人質に興味は無いだろうな。よし！ではこれより敵陣に強襲をかけ人質を奪還する！敵も狙いである八神隊員が来るのなら全員でかかってくるだろう。撃破してしまえば安全だ」

「そうですね、幻影魔法を使って反応を誤魔化している様子もないみたいですし：純粹

に4人なんでしょう」

「ゲンヤ…ゲンヤ…。ゲンヤがいないと…死んでしまうわ。早く行きましょう」

「そうだな、プロテインだな。だが行く前に簡単にポジションを決めてしまおう。クイント、お前はフロントアタッカーSt01だ。敵を引き付けて撃破しろ。ランスター捜査官はセンターガードSt02だ、中距離から我々に指示を送って欲しい。俺はガードウイングSt03として敵をかく乱する、炎熱変換があるから多少の中距離なら何とかなる。八神隊員は集団戦の経験がないだろう、フルバックSt04として援護をお願いする」

「隊長、空はどうするの。1人そっちに裂かないと」

そこが問題や…。しかし、逆に都合なんやないか？……ん？プロテイン？

「大丈夫や…わたしが空戦引き受けたる…。できへん集団戦で完全に足を引つ張るより多少なんとかなる対人戦に持ち込んで時間稼ぎます！」

「はやて君、君は怖くないのかい!? さつきは泣きながら戦つてたじゃないか! 今だつてほら! 足が震えているし…」

「そりや怖いで…初めてやったんやもん…。次はもしかしたら死んでまうかもしれん…。でも、わたしには一心同体の強い家族がおんねん! 来たれ夜天の書! 第46頁収集魔法発動! 『フワフワたいむ』対象、ぷちトマト!! F4U! ドッグファイトモード!」  
「おーらい! もーどちえんじー!」

ぷちトマト! フルサイズ・リオソウル!!

グルルル……! ギャオオオオオオオ  
!!!!!!

「青くなって…巨大化した…!?」

「わたしは負けへん。戦いを知った今のわたしは…ちいっとばかり強いぞ?」ニツ

「戦闘を怖がりながらも笑う…。泣きながらも戦う意思を示す…。フツフツフ…面白い、実に面白いな!八神隊員!いつか局員になるときは是非とも我が首都防衛隊に来るといい!歓迎しよう!急造チームだが…我々は絶対に負けん!行くぞ!チーム・ストライカーズ!!」

なんかどつかでみたような布陣なんやけど…あ!わかったで!つまり、魔法少女リリカルはやてStriker'sでは、わたしがキャロのポジションなんや!

## 第三六話 魔法少女リリカルはやてStriker's

## 第2話 チャージ・オン・ザ・エネミー

『残念やったなあ！それは生存フラグやでええ!!』

魔法少女 リリカル はやて Striker's

第2話 チャージ・オン・ザ・エネミー

「そろそろ射程圏内に入ります、お二人とも、準備はよろしいですか？俺が降下の援護射撃を行います！何かあったら通信で！」

「だだだ大丈夫だ、もも、問題ない。神は言っている、ここここで死ぬ運命ではないと。タカイノコワイタカイノコワイ……」

「一番いいゲンヤを頼むわ」



「こんなチームで大丈夫や…?」

敵もわたしらの接近を察知したんか、人質を置いて戦いやすい開けた場所に移動したようやな…。一気にぶちトマトから降下作戦の開始や!

「ではカウント3で行きます! 3、2、1、ヴァリアブル・シユート!」ズドン!ズドン!

「St01。クイント・ナカジマ。私のゲンヤと家族とゲンヤとゲンヤを返してもらおう」タンツ

「St03。ゼスト・グライガンツ! 『地上』の平和は俺とレジアスを守る! いざ行かん! 母なる大地へ!」ズタンツ!

「…Stt01とStt03の降下を確認。はやてちゃん、くれぐれも無理しないようにね！Stt02。ティード・ランスター！俺の妹に指一本でも触れていたら殺す！触れていなくても殺す！七代先まで殺す！非殺傷で殺す！死ぬまで殺す！お前を、殺す!!」バシューーン！

クイントさん：何で三回も言った？隊長は高所恐怖症やったんか…。ティードさんもシスコ丸出しでえらい勢いで落下していきおったし…。管理局員が殺すやなんてあかんやろ。どうやって非殺傷で殺すんや…

「さあ行くで、ぷちトマト。敵さんも空に上がって戦闘態勢や…アンタとわたしの実力、見せつけてやるんや!!」

「ギャオオオ！」

さて、空戦開始と行こうやないか。敵さんもやる気みたいやし…ヤバッ！シューターの準備しとる!?

「St04八神はやて!!エンゲージ!!前方に火炎弾!撃つたらすぐ右にバレルロールで回避や!」

「ギユオオオオ!」

《地上の英雄!大地の精霊!俺がガイアの意志だアア!!》

《あなたーのクイントちゃんだーよ。ゲーンヤー、はやくこーないとーごはんたーべちやうよー。うそだーよーいっしょにたべたーいよー》

《ヒヤアツハツハツハア!いいねエいいねエ、最ツ高だねエ!ユカイに素敵にSHI☆NI☆SA☆RA☆SE!!》

ドゴオオオン!

「ぐっ…爆風があがつとる、どうやらシューターの迎撃には成功したようやな。そのまま円を描くように右から接近!F4U!誘導弾!」

「おーけー!らびっどしゅーたー、しゅーと!」

「討つしかないのか！スファイアシューター！」

くうう！バリアジャケット着るとはいえ、凄い風圧とGや…。あと、通信邪魔!!なんかあったら通信でつて…なんの役にも立たんやないかああ!!シューター3発!!回避や、いつけええ!!

「ならば、俺がお前を討つ！プロテクション！」バシッ！バシッ！

こっちのシューターは弾かれたか!?!しかし、敵はこっちの速さに着いてこれらんみたいやな！掠りもせんやったで！ぷちトマト！

「下降して、敵めがけて火炎弾を撃ちながら上昇！相手に背中を向けてすれ違ってや！」「ガアアアアア!!」

うぐぐ…目が回りそうや…。こんなんが得意とはフェイトちゃん、さすがノーパン変態機動娘や。だけど、舐めたらあかんで？わたしの得意なゲームはエースコンバット！

F-16は最高や！天と地が入れ替わることぐらいなんてことないで！

「クツ、どうしてお前がそんなものに乗ってるんだっ!?!プロテクション!」ズガアアーン!

「光よ集い突き抜ける!魔王直伝!全力全開!デイバイーン…」

「B a s t e r !」

ズドオオオオン!

ここでやったか!?!は生存フラグや!八神はやて、動けなくなるまで叩き込むのがわたしの流儀や!

「今や!ぷちトマト!ムーンサルトで下降開始!……あとでわたしのこと拾ったってや」トンツ

「ギユイ!?!」

ヒュー。

風、気持ちいいねー。ってそんな悠長にしとる場合やないな、大絶賛自由落下中やでー。うん、この状況…実は飛べないわたしはただのアホや。やっぱり敵さん生きとつたで、なのはちゃんクラスの砲撃適正はやっぱりわたしには無いなー。

「飛べないっていったってなあ…ドッグファイトは無理でも、ストライクぐらいは出来るんやで!!」

さて!八神はやて一世一代の大博打!咲かせて見せよう女華!

「夜天の書第29頁収集魔法発動『たーまやー!』」

ヒュルルル〜ドーン!ドーン!

「クソツ、なんだこの魔法は!?前が全く見えない!どうしてお前がニヤチュラルの味方をスルンダツ!」

「F4U!突撃やああ!!」

「ちやーじ!じえつとむーぶ!」キイイイン!

そりや目の前で花火爆発させられたらなんも見えへんで。加速しながら一撃必殺かましたる!あとさつきからツラが左にズレとんねん!!

「テキーーン!キラキラーン!ハヤツ!モウヤメルンダツ!!」ドウ!

アホがああ!!こんな時に覚醒ゲージ解放すんなやああ!?!ヤバい!砲撃魔法や!回避出来へん!!

ドガアアアアアアア!

「やったか!？」

「残念やったなあ!それは生存フラグやでええ!!」ドンツ!ガシツ!

ギリツギリでプロテクションが間に合ったで。今のはちよーつとヤバかったなあ…。ちびつと漏れてもうたやないか!そのツラふつ飛ばすで!?

「ニコルウウン!!」

「うっさい黙れエエエ!!今度はこっちの番やああ!超至近距離から受けてみい…これがわたしの!一・撃・突・貫!!」

「Bunker Baster! Full Power!」ズツガアアアアン!



あなたッ！吹き飛んでッ！

ギンガの！はちえまれえっ！

「キラアアアアアッ☆!!」ズドオオオン！

「フツ、戦闘力たつたの5、ゴミめ！しかし最後の最後まで何が言いたいんか全くわからんやつちやなあ…、ニヤチユラルってなんや…。おい！ぷちトマト、こっちやでー。はよ来てくれんとこのヅラが取れた兄ちゃんと一緒に流星に跨って地上に急降下やでー、地表まであと500mやー」

「ギユグルウウウ?!?!?」

あかん…：…緊張の糸が切れたからか、意識が遠くなる…、ぷちトマト、あとは頼むで…：ちやんと拾ったって…や…

「いけークイントちゃん、君に決めたー。『ズガアアン!』クイントちゃんの、りぼるばーしゅーと。きゅーしよに当たったー。『ぐえええええ!』てててーん。クイントちゃんのをるが151になったー。『ドガアアン!』クイントちゃんは新しく、む!くんくん。『うぎやああ!』ゲンヤのにおいがする!ゲンヤサーチャーを覚えた!てててーん!」ギユイイイイン!

「おい!Stt01!クイント!どこへ行く!」

「Stt01!突っ込み過ぎです!下がってください!」

「違うわ。ツツコミはゲンヤで、夜の突っ込みもゲンヤ。私はボケで、夜も突っ込まれる方。でも子供のそーじょーきょーいくに悪いって最近ご無沙汰…今度二人で旅行に行

くわ。いちやいちやるの、らぶちゅちゅ。ところで……そーじょーきょーいくつて何?」

「こんな戦闘中に下ネタ言うなっ!!情操教育だっ!!」

第三七話 魔法少女リリカルはやてStriker's

第3話 ストリーム・オブ・ティアーズ

『おいバカやめろ！そんな速度でつつこんできたら…！ストップ！ストップウウウ！』

魔法少女  
リリカル  
はやて  
Striker's

## 第3話 ストリーム・オブ・ティアーズ

「きゅくー?」

「うにゃん…ダメや…それはわたしのチョコケーキ…」

「はやてちゃーん?そろそろ起きようねー?もう敵は倒したよー」

「私のこの手が真っ赤に燃える、ゲンヤを掴めと轟き叫ぶ!ゲンヤがいないのなら、こん

な星…いらない！」

「そろそろクイントが色々な意味で危ない。捕まっていた彼らの元へ行こうではないか」

ほえ？ツラの兄ちゃんがわたしのチョコケーキに向かって銀河美少年クロノース★  
ミ…？

「あれ？なのはちやんがさつきまでフェイトちゃん縛ってシバいて高笑いしよったんじゃ…？『フェイトちゃんにパンツなど百億光年早いの！』って…あれ、昨日の事やっ  
たっけ？」

「はやてちゃん…いつたい君の夢の中で何が起きていたんだ…。むしろ君の私生活がど  
うなっているのか…」

なんや。さつきまで気絶しとったんかいな…しっかし、よう勝てたなあ。いっつも模擬戦ではフェイトちゃんやなのはちゃんにボッコボコのメメタア！つてされとったからなあ…まつたく自信なかつたで。ようやつてくれたな！ぷちトマト！

「なに悠長にしている！クイントが電波を受信しだした！急げ！時間がないいいい！死にたいのか！」

「そう、あなたたちが私からゲンヤを奪ったのね…。大丈夫、ゲンヤは死なないわ。私が守るもの。それに…私が死んでも代わりはいるわ。ふはははは！見事だ勇者よ！だが、私を倒そうとも、第2、第3のクイントが再びこの世に現れるだろう!!」

「ヤバツ！急いで、はやてちゃん！クイントさんはゲンヤさんの事となると我を忘れるんだ！過去に地上本部すら崩壊させた実績がある！」

「ひああああ!!クイントさんから変なオーラが出とる!?!た、たいちよー！ティーダさん！おいてかんでえええ!!」「きゅつくー!?!」

「私のゲンヤに、手を出すなあああああ!!!」ギユイイイイン!

うぎやあああああああ!こつちこんといてええええ!?プ、プロテク…どつかーん☆

「くんくん。こつちー!ゲンヤサーチャーでは、ここの倉庫にゲンヤがいる。ついでにギンガとスバルもいるわ。あとは知らない、他の人には興味ないもの」

し、死ぬかとおもた!味方に轢き殺されるかとおもた!やっぱチビツた!

「自分の娘をついで扱いかい…:しつかし、サーチャーと同じ性能を持つとるんやなあ…クイントさん。ゲンヤサーチャーって一体…?」



「さつきレベルが上がって覚えたようだ。む？　そういうえば、レジアスは技は4つまでしか覚えられないと言っていた気がするんだが？」

それはポケモンの話や。クイントさんが仮にポケモンやったとしたらゲンヤさんは今頃保護責任者なんたらーの罪で捕まっとる。

「興味ない!?　そんな訳ねええだろおおお!!　俺のティアナは次元世界一可愛い妹だああああ!!……くれ?　やる訳ないだろおおおお!!」

「ふざけないで、私のゲンヤが次元世界一よ。異論は…認めないっ!」

そこ!　食いつくなシスコン!　あんたら二人は話がややこしゆうなるからだまっとつてや!

「てきーん!　にいたんの声がしゆるでしゅ!　絶対、にいたんでしゅ!　わたしにはわかる

でしゅー！にいたああん！ここにでしゅー！にいたあああん！」

「どうした嬢ちゃん？んく確かに、俺もなんか近くでクイントが暴走してる気がするんだよな…。だいたい当たると嫌な感だぜ。おっと、どうしたギンガ？」

「おとーさん…こわいよお…」ギユツ

「よしよし。お母さんが来るまではお父さんがギンガとスバルはしっかり守って見せるからな！」

「ばば、おちっこー！」

「あら、クイントの旦那さんはやっぱりいいお父さんね」「あーうー」

「テキーン！今、ティアナ（ゲンヤ）の声がつ!!」

「俺には全く聞こえなかったんだが…。聞こえたか？八神隊員？」

「…。わたしも隊長と同じ普通の人間なんで、聞こえませんでしたわ」

「……か！うおおおお!!ティアナアア!!」ドゴオ！

ヤバス。今、素手でコンクリぶつ壊したで？ティーダさん、あんた射撃型魔導師ちやうんか…!?!妹の為ならコンクリすら破壊するんか!?!さすがミッドチルダ！恐ろしい…。

「にいたん！」

「ティアナ！」

「にいたあああん！」 テテテテ

「ティアナアアアア！」 ダダダダ

「ゲンヤアアアア！」 ギユイイイイン！

「おいバカやめろ！そんな速度でつつこんできたら……！ストップ！ストップウウウ!?」

「ゲンヤさん死亡のお知らせやな。線香くらい上げたつたるわ。なむなむ。」

ダアーン！

チャリン。

「……………。ゴフツ……………」

ビチャツ。

バタン。

……………えっ？

「チツ、射線に入りやがって。つたく、あれだけの人数で、あの小娘ひとり排除できないなんてね……」

「貴様！誰だつ！姿を現せつ！クイント！メガーヌ！敵は質量兵器を所持している！警戒しろ!!」

「にいたん？ていあなでしゆよ？……こんなところでねちやダメでしゆよ？いつもみたいに高い高いするでしゆ。ていあなに会えたのがそんなに嬉しかったんでしゆか？ししゆこんでしゆねー。……にいたん？にいたあん」ペチペチ

えつ……ティーダさん、なんで寝とるんや？なんで血がいつぱい出とるんや？

「残念だけど、ここは撤退させてもらうわ。じゃあね、小娘。そうそう、倒れている彼ね？ あなたの所為で死んだのよ。フッフツ」

えっ…死んだ？ ティーダさんが…わたしの…所為で…？

「にいたん……？ い、いやあああああああ!! また死んじやうの!?! にいたん!?! にいたああん!! ひとりにしないでえええ!! いやあああああ  
!!!!!!」

「わ…わたしの所為で……う……うわあああああああ  
!!!!!!」

「八神隊員! しっかりしろ! 君の所為ではない! 撃つたのは君ではない、奴だ!」

「にいたあああん!!うえええええええ!!高い高いするでしゆううう!!おきるでしゆううう!!にいたあああん!!またひとりにしないでえええ!!ふええええええ!!」

「あー!!死ぬかと思った!!ビックリさせてごめんなー?ティアナー。ほれ高い高いい☆」ヒョイ

「ふえええええええ…え?」

「「なんで生きているんだああああ  
!!!!!!」」



「えっ？プロテイン飲んでれば死なないでしょ？普通」

「うむ、レジアスが言っていたから間違いない」

「だから、第2、第3の私がいるの」

「えっと、ちよつと疑問に思っていたんだけどね？」「ぴやあ！」

「おとーさんも死なないの？ギンガも管理局はいるー！」

「ぶとてーん？ままー、おいしー？」

第三八話 魔法少女リリカルはやてStriker's

第4話 プリーズ・スタンド・バイ・ミー

『行くな！僕の傍からいなくならないでくれ！』

魔法少女 リリカル はやて Striker's

第4話 プリーズ・スタンド・バイ・ミー

「なんだって!?!はやてを狙った襲撃犯が!?!僕が今からそっちに行く、現場を教えてくださいー! ティーダ!」

やはり目を離すんじゃないかった!地上本部のあるクラガナンの街だから安全だと高をくくっていたのが裏目に出たか!幸いなことに僕の友人であるティーダが近くにいたのと、ストライカーゼストとともに行動をしていてくれたみたいだったからよかった

ものの！

「S4U、転移!!」

はやての事だからきつと……!間に合ってくれ!

「で、カツラの兄ちゃんたちは何でわたしをねらったんや?ほれ、しつかり吐いてもらうでー。さっさと答えんと永遠に縄で縛って地面に寝っころがしたままやー」

「桂じゃない、アツラんだ」

「ストライプウウ!?!」

「グウウレイトオオオオオ!!」

「すばらしい!しまパンですね!」

「うっさい！黙れええええ！！質問しとんのや！きちんと答えんかい！あとパンツ覗くなや！！」

なんでこんな変態しかこの世におらんねん！！足元に転がつてくんや！蹴つ飛ばすで！こんな小学生のパンツ覗くなんてロリコンちゃうか！？このっこのっ！！

「狙うも何も、小さなドラゴンを連れて女の子がクラガナンの街で迷子になっているから探して欲しい、と依頼があっただけだ。なんでも聖王教会の大事な客で他の組織から狙われているから急ぐようにしてな。これが俺達『こずみつくイラツ☆警備会社』の許可証だ」

「ふむ、間違いない。たしかにこれは最近クラガナンで有名なセキュリティ会社の社員証だ。ちゃんと管理局の許可もある大手の警備会社だな」

なんやねん！こずみつくイラツ☆警備会社って！あんたらにイラツ☆ってなるわ!!

「隊長、ほんまですか？だったらその依頼主がいつたいたいの目的でその依頼を行ったかやな…、最後に出てきた女が依頼主なんやろうか…？」

「そこまではわからない、うちの警備会社はネットで依頼があつたときは、依頼主と会うのが依頼品の受渡しなどの最終段階になつてしまうからな。ただ、依頼があつた時に通信で聞こえた声は女性だつたはずだ」

「つまり謎が謎を呼ぶって訳ね、私からゲンヤを奪つたこと後悔させてあげるわ…フフ」

「別に謎が謎を呼んどらんと思うんだけどなあ…まあ、だれも怪我してないし。ティアナも無事で本当に良かったよ」

今回は無事でよかったんやけど…このままみんなとおつたら迷惑が掛かる…少なくともクラガナンには居られんな…。でも、わたしがミッドチルダで狙われたっちゆうことは地球に帰った方が他の人を巻き込むんちゃうやろうか…。ユーノ君が地球でクロノさんに護衛させとつたのも、ミッドより襲撃がかけやすかつたからやろうし…

「まあ…小学校や中学校卒業程度の学力は持つとるんやし…。もともと一人やったんや、いまさらまた一人になったって対して寂しくないでー」

「きゅつくー!!」

「あはは、そうやったな…ぷちトマトと一緒にいるもんな。そやったら全然さみしくな  
いづー」

「きゅくつー!」

「ほな行こうか。F4U、凶暴な野生生物のおらん生活できそうな世界に転移したいんやけど。あと、転移先知られんように出来る?」

「おーけー、さーちすたーと。らんだむじやんぶ、ぶーとあつぷ」

こつからは誰も巻き込めへん。ティーダさんやったから死ななかつたものの、心臓に銃弾くらつて生きていられる方がおかしいんや。クロノさんやアリシア、おバカヴォルケンリッター、フェイトちゃんになのはちゃん……。地球には巻き込みたくない人ばかりや、わたしは誰にも死んでほしくないんや……

「なにをしているんだ？八神隊員」

「隊長？すんません、お先に家に帰らせてもらいますわ。あ、ひとつお願い聞いてもらってもええですか？」

「……自分で蹴りを付けに行く気なのか。なんだ？」

「……隊長はわかつとるんですね、ティーダさん達は騙されてくれたんですけど。大丈夫



夫です、いつか必ず戻ってきて地上本部の隊長の隊に入れてもらいますわ。お願いっ  
ちゆうのは、この『夜天の書』を執務官のクロノ・ハラオウンさんに渡して欲しいん  
です」

「……わかった、たしかに預かろう。行くあてはあるのか？」

「あてなんかありませんわ。ただ……とりあえず犯人の目的と目星はついてますんで」

と言うより今まで出てこんかったあの人なんやろうけど……。ますますクロノさんは  
巻き込めへんで……。悪いなクロノさん。今は会いとうないから一人で行かせてもら  
う  
で。

「はあっはあっ……はやて!! たった一人でどこへ行くつもりなんだ!! いったい君は何をし

「ようと言うんだ!! 答えてくれ!!」

「あつちやあ……、もう少し早く行動せなあかんかったな……。チエーンバインド!」

なんでそんなに必死になつとるんね、クロノさん。誰かから通信で聞いて急いで来てくれたんやろうけど、そやったら怪我もしたらんことぐらい知つとるやろうし。もうちよつとゆつくりきてくれてもええやんか

「ぐっ……君のことだ、今回の事件は君を狙った犯行だから、自分が他の人と一緒にいたらまた巻き込むって思っているんだろう! 早く転移魔法を止めるんだ!」

なんや、クロノさんもわたしのことようわかつとるやないか。なら、こんな時どうするかなんてわかりきったことやろ? あはは、なんでやろ……クロノさんの顔がぼやけて見えるわ。

「地球へ帰るんじゃないんだろう!!?どこか僕も知らない世界へ行こうとしているんだろう!!?行くな!!僕の傍からいなくならないでくれ!!」

結局、わたしはクロノさんと一緒にいることは出来んかったんやろうな…。原作では、わたしとクロノさんは結ばれとらん。それが今回の事件を引き起こした可能性がある…。もう、クロノさんには会えんな。

「ごめんなクロノさん!!わたしのことは忘れてくれてええで!!ありがとう、さよなら!! あんな…。わたし、クロノさんの事…。大好きやで!!F4U!転移!」バシユウ

「はやて!? はやてええええ!! ……ちくしよおおお!!!」

「ひつく…転移完了…ひつく…。もう、クロノさんには会えないんやね…、ふえええ…」

もう会えないなんて本当は嫌や…うう、涙が止まらへん…。少し、座って泣いていこ

…

「やつぱりここに転移してきたんだね、はやてたん。そのへんは歴史通りって訳か…」

「ふえ…? ぐすつ…」

「オウフｗｗｗｗ！砂漠のど真ん中で涙目美少女の上目づかいを見たｗｗｗｗ！！ウツヒハー  
k t k r ! 僕のフェレットが元気爆発ｗｗｗｗ！！デユフフｗｗｗｗみんなのアイドルユ  
ノ君でええつすｗｗｗｗ」

第三八話

魔法少女リリカルはやてStriker's

第5話

アイ・ワナ・ビー・ユア・ヒーロー

『白馬の王子様って柄じゃないのはわかってるんだ』

魔法少女 リリカル はやて S t r i k e r , s

第5話 アイ・ワナ・ビー・ユア・ヒーロー

「ユーノ…君…？ヒツク…なんで…ここに…？」

「そうだよ、はやてたん。超時空変質者の称号を持つ変態忍者ユーノ・スクライアだよ。なんでここについて？そんなの日夜、はやてたんの事を電柱の陰からハアハアしながら見守ってるからに決まってるでござるよーwww」

口ではそんなこと言いながらも、座り込んでるわたしと目を合わせてくるユーノ君。嘘やね、ほんまに嘘つきや。そんな優しい目をしとる人が本当の変質者やないことくらいわたしでもわかる。

普段の彼は決して自分から目を合わせようとしてこなかった。それは今、彼がここにいる理由と関係があるのだろう、そんなことすぐにわかった。

「フヒヒwwwそれにしてもこの星に転移してくるとは流星はやたん！あつちに綺麗な湖があるんだよ。いつてみようでわないかwww」

ほら。なぜ泣いていたかも聞かないで…。きつと何があつたか知ってるんやろ？でもそんなことお構いなしにわたしを連れてこうとする。きつと彼なりの優しさ、ほんまに不器用な人やなあ。



「ここがその湖でござるーwwwねえ今、どんな気持ち？どんな気持ち？www」

なんでやろ。このウザさがビミョーに心地ええのは…私オワタ！

「うわあああ……。ほんまに綺麗やな…、水面に空が反射して水平線がわからんわ…。まるで…」

そう、空が大きな湖の水面と一体になっていて、この陸地がまるで空に浮かんでいるかのような光景にわたしは圧倒されていた。青空に浮かぶ雲が水面に浮かび、まるで逆

さまの空を覗きこむ感覚にしばし、わたしは感動していた。さっきまで泣いていたことすら忘れて。

「ラピユタは滅びぬ！何度でもよみがえるさー！！www」

「うっさい！人の感動を台無しにするセリフ吐くなや！！」

ていー！目つぶしー！

「ああああああ！！目がああああ！！私の目がああああ！！！！！！」

いくらラピユタにいるような気分になれたからと言ってこのタイミングで何を叫んだらいいのかわからず、そのまま黙って、そのまま黙っていつまでか……！

「あ！ユーノ君！そつちは…！」

「問題ない…!?!」

彼はそう呟いて…言葉は失われた…。ぼちゃん…。ユーノ君、湖に落ちてもうた…。

「どう？はやてたん。少しは落ち着いた？もしそうなら冷静に聞いて欲しい」

「ありがとうな、ユーノ君のおかげでだいぶ落ち着いたわ。話ってなんなん？はよ湖からあがつてこんと風邪ひくで？」

「すぐ上がるよ。でも、落ち着いて聞いて欲しい。座ったまま動かないで。どうか僕

の話を冷静になって聞いて欲しいんだ」

「なんやねん…あらたまつて…」

でも、ユーノ君ってなんかこう…普段の頼りなさげなところやふざけた態度がなくなって、真剣な表情をしているところなんて、始めてみたわ…

彼はそう言つて湖からあがつてきた。

「ズボンごと、パンツ流された」

下半身素っ裸で…。

「……………。わたしの『あつ、普段はオチャラけた彼が真剣な表情をしている…なに…この気持ち…』みたいな感じの胸キュンな乙女心を返せやあああああ!!!」  
「らびつとしゅーたー! ふるふあいあ!」 キュイイーン! ガガガガガガガ!!!

「はやてたん!?そこは!!集中的に狙わないでええええ!!僕の防衛はもうゼロよおおお!!!」

ぴちゅーん!

「で？さっきのは正直いらんかったと思うで。本当に露出狂みたいな性癖でもあるんとかやうか？変態なのはドMだけにしときいや」

「ちがうだよ、はやてたん。さっきのは本当に事故だったんだ…」

替えのズボンを着用したユーノ君はそう言ったが、どこまでホントやろうか…。

「この際やから聞いておきたい。ユーノ君はこの世界の事をどこまで知つとるんや？わたしやフェイトちゃんに、なのはちゃんのことも気づいとるんやろ？」

わたしがそう尋ねると、彼はうつむき…少しして、空を見上げながら語りだした。

「もちろん知っているさ。でも、きみたちと僕は違う。君たちの話は何度か盗み聞きさせてもらったよ、ごめんね、はやてたん」

彼はそう言い、わたしの方を少しすまなそうな顔をして見てきた。

「話に聞いた限りだと、はやてたんは別世界から人格だけこの世界に來た憑依。フェイトは…たぶん向こうの世界では次元震に巻き込まれて亡くなってしまったのだろう…種別は転生。なのはは、幼くなってしまうたのは次元震の影響か知らないけど…並行世界への転移、トリップだね」

「ちよつとまつてえな。ユーノ君はそのどれにもあてはまらないちゆうことか？基本的にこの3パターン以外で…!? ……。ユーノ君、それって…わたしのことをはやてたんって呼ぶことに関係があるんやね」

「さすがはやてたん。君のお察しの通り

僕は逆行者、この世界の行く末を正しく知っている、たった一人の人間さ」

そう言ったユーノ君の表情からは、硬い決意と後悔、そして少しの悲しみの色が見て取れた。

「ここに来た理由はそんなに大したことじゃない、『はやてたん』と『はやて』が違う人だって事もわかっていたんだ。それでもね、どうしてもあの結末だけは許せなかったんだ……」



「だから僕はここにいる。白馬の王子様って柄じゃないのはわかってるんだ。僕はね、はやてたん。君にとつてのヒーローになりたくて、ここに来たんだけ」

そういったユーノ君は、…今にも泣きだしそうな顔をしていた。